

女鑑
明治三十二年十月二十日發行
第貳百拾五號
國光社

女鑑第貳百拾五號

目録

稟告

從來本誌の發賣に係る事務は國光社雜誌部に於て取扱ひ居候處向後東京市京橋區南傳馬町壹丁目七番地靜思館に於て取扱ひ候事に致候間自今國光及女鑑に關する御照會、御送金、御通知等は總て必靜思館宛にて御發信被成下度候也

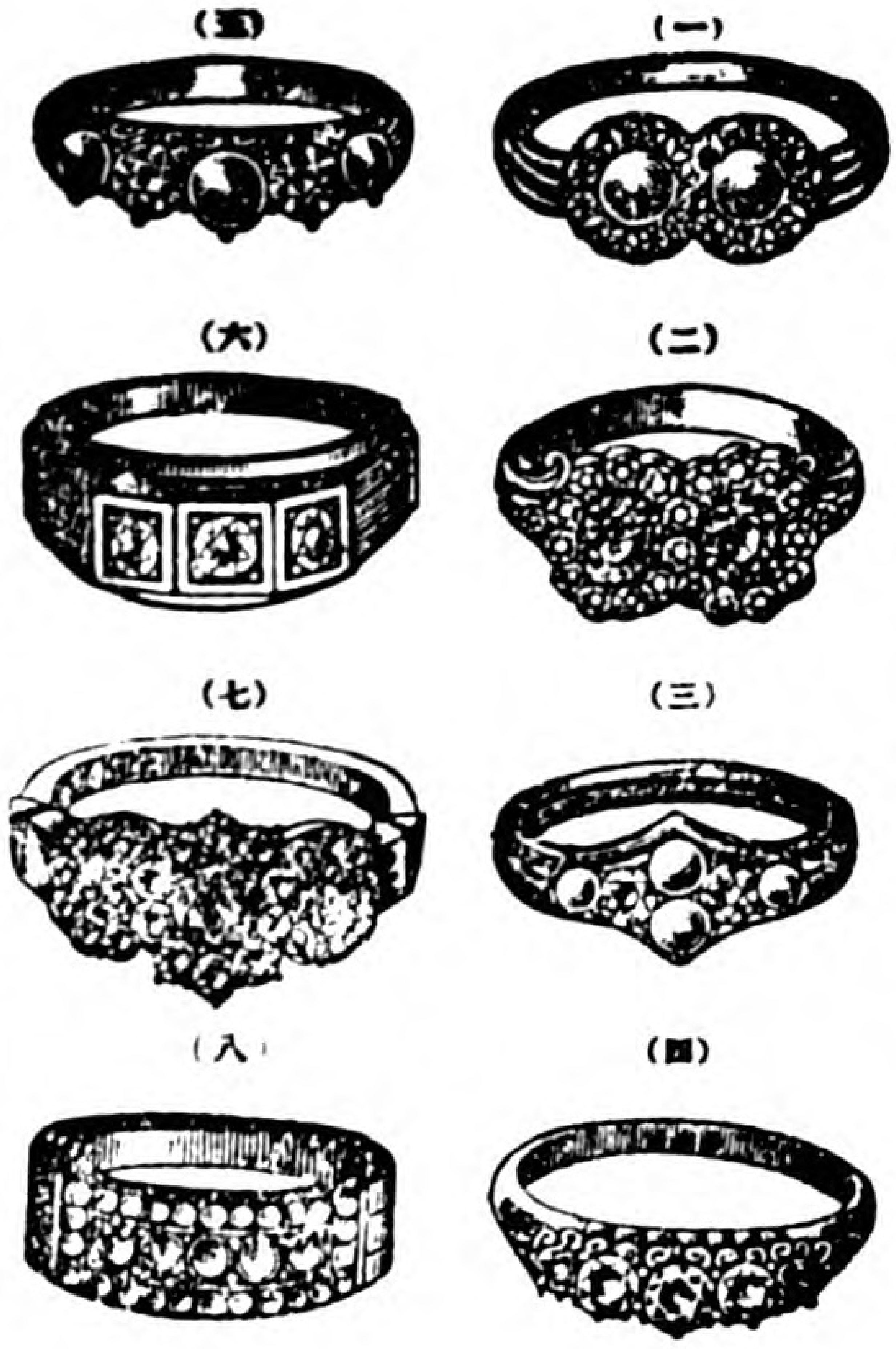
追て編輯に關する件は從來の通り國光社編輯部宛にて御發信被成下度候

東京京橋區築地二丁目廿一番地
國光社編輯部

東京京橋區南傳馬町一丁目七番地
靜思館
（電話本局千三百七番）

明治三十三年十月

寶石入指環



(一) ダイヤモンド及キャッツアイ入甲價八拾五圓●乙價七拾五圓●仝眞珠及チパール入甲價參拾參圓●乙價參拾圓

(二) ダイヤモンド入甲價參百圓●乙價貳百八拾圓

(三) ダイヤモンド及眞珠入甲價百貳拾圓●乙價百圓

ダイヤモンド入甲價貳百圓●乙價百七拾圓

(四) ダイヤモンド及エメラルド入甲價百五拾圓●乙價百貳拾圓

(五) ダイヤモンド及キャッツアイ入甲價貳百圓●乙價百七拾圓●仝ダイヤモンド眞珠入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓

(六) ダイヤモンド入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓●仝ルビー及サツノアヤ入甲價五拾圓●乙價四拾參圓

(七) ダイヤモンド入甲價五百圓●乙價四百參拾圓

(八) 眞珠入甲價參拾圓●乙價貳拾五圓

●市外遞送料金貳拾錢

此ノ外金又ハプラチナ地ニ種々ノ寶玉ヲ裝嵌シタルモノ及彫刻品夥多有之候間御來車ノ上現品御一覽下サルカ郵便御注文ナレバ寶石入若クハ彫刻付等ノ區別ヲ指示シ代金御送附アレバ其價ニ相當ノ品ヲ擇撰シテ調進スベシ若シ御意ニ適ハザル時ハ御購求當日ヨリ一週間（弊店商品中時計ニ限リ三十日間）以內ハ（府外ハ相當ノ往復日數ヲ加フベシ）凡ソ其物品ニ破損或ハ毀傷ナキニ於テハ何時ニテモ需ニ應シテ他ノ物品ト交換シ又ハ原價ニテ買戾シ聊カタリトモ其爲ニ手數料若クハ割引等ヲ加ヘザルベシ其他ノ予細ハ屢々各新聞紙ニ廣告スル所ノ弊堂店則ニ詳ナリ

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
（電話番號新橋三百三十三）
（長距離電話番號新橋三百三十三大阪東七百卅三）

時計及寶玉類
貴金屬美術品商



妙技一等賞牌

天賞堂

東京神田小川町（電話本局二一六〇）天賞堂小川町出張所

橫濱尾上町五丁目（電話八七六）天賞堂橫濱出張所

大阪心齋橋北詰（電話東七三三）天賞堂大阪出張所

名古屋市玉屋町二丁目 天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地 天賞堂廣島出張所

熊本市上鍜冶屋町十番地 天賞堂熊本出張所

長崎市今鍜冶屋町四十番地 天賞堂長崎出張所

福岡市橋口町榮屋方 天賞堂福岡臨時出張所

北海道小樽色內町越中屋方 天賞堂小樽臨時出張所

備後國ひめ女



家庭と規律

人の教育は、家庭を以て終はるものにはあらずして、却りて、家庭の教育は、これにつゞく可き長き教育の最初の第一歩とも看做すべきものなり。人は家庭を辭したる後に於て、なほ博き智識と、更に高き道德とを、その師友にあふく可きなり。されば家庭の教育は、實に人類一生涯の教育の一小部分、第一着歩たるにすぎずといへども、その一小部分たるが故に輕んずべからずして、その第一着歩たるがために、留意せざるべからざるなり。その時間の長短を以て論ずれば、人が家庭に教育せらるゝ時期は、之をその一生の日月に比して、極めて短しともいふべからむ。然れども、その人の心に浸徹する度を以て計れば、家庭一年の教訓は、學校その他の五年にも値すべく、少しく良き家庭教育は、大に惡しき學校その他の教育の害にも打ちかつべき力あると同時に、大に良き學校その他の教育の利も、

少しく惡しき家庭教育のために沒せらるゝなり。人が幼少なるときの感染は、その長大したるときのものと相比すべくもあらず。年少時代に享けたる感化は、老齡に及むで、なほ、且つ脱しがたきものあるは、屢々目擊する所にあらずや。子弟の教育を總べて、之を家庭に於て授けむは、能くすべからざる事たるのみならず、決して良き子弟を得べき所以のものにはあらず。單純なる社會に生活を營むべきものならば、敢て言はず、苟くも複雜混淆せりともいふ可き、今日以後の社會に活動せしめむと思はゞ、諸般の智識を諸般智識の專門家よりして注入啓發せしむ可きなり。或父兄は、或一智識を授くるに餘力あるあらむも、その他は、之を保し易からず。家庭教育を以て、最初にしてまた最終、所謂アルファにして、またオメガなるものたらしめむと欲せば、遂にその子弟を誤らずむば止まじ。されば家庭教育の主とすべきは、子弟をして、よくその家庭外の教育に耐へ、家庭外の教育の効を增さしむるに足る點にあり。家庭教育にして、この以上を望む可からず、家庭教育にしてこの以下に止まらば、その存在は寧ろ有害にして無益なるなり。

賢明なる我が貴婦人の家庭は、思ふに當さに、我が曹の望むが如きものなる可し。或は、我が曹が望む所に踰えて、美はしきものなるべし。されど世間の一般の子弟によりて、その家庭の教育を推察すれば、未必らずしも、我が曹の首肯すべきもののみは限らざるに似たり。實に今日の少年子弟は、その不規律に於いて、實に我が曹の痛嘆を値するもの多々なり。我が曹の不明なるや、その原因を探求して、之を學校その他の罪に歸せんよりも、寧ろ家庭その者の責に歸すべきの、優に妥當なるを感せしむ。

維新以來諸般教科上の施設中、最も、その面目を改めたるものは、徳育にあらず、智育にあらず、實にその體育にあるなり。一たび軍隊的教練の體力増進に効あると同時に、またよく人の徳育に資するあるべきを曉るや、當局は、此の點の注意に於いて、力を盡すを頗る以て到れり。規律は拘束を意味し、拘束はやがて自由の行動を妨ぐるが如きの觀ありとの愚論を爲すものありといへども、事業の進歩に於て規律あると否らざるとの差別は、著るしきものあらむとするとの稍知られたる今日、規律の尊むべく、規律の修養の缺く可からざるは、思ふに當に論なか

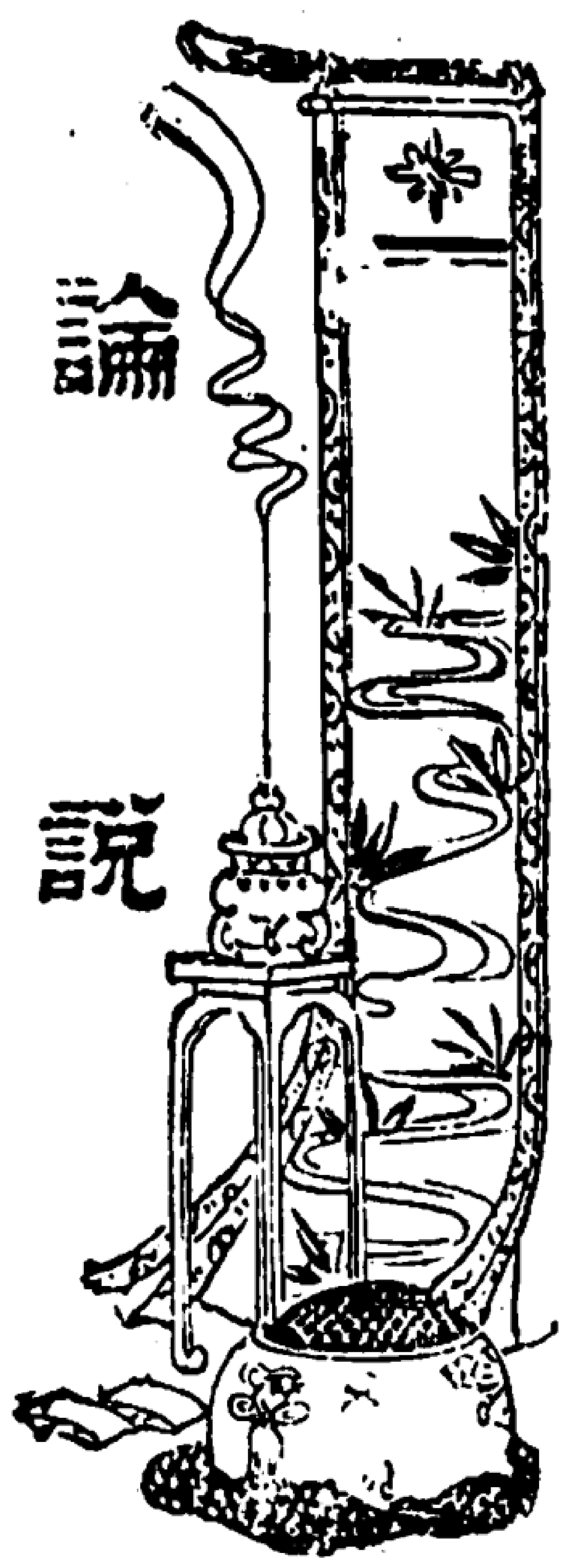
る可し。かゝる規律の觀念を人心中に植んには、自ら人の身體に於いて亦規律的行爲なかるべからず。軍隊的敎練が採らるべきは、殊にこの點にあるなり。然らば、今の軍隊的敎練の下におかれたる年少子弟は、その軀體の發達の著るしきのみならず、その行動に於ても、亦當さに軍隊的秩序的規律的たるべきなり。而かも、その理は然る可くして、その實は大に然らず。今の年少子弟の無規律無秩序なる行動は、往々にして古昔の敎育の下に人と爲りし人々より笑はれむとす。嗚呼その原因果して那邊に存すべきか。我が曹は、之を家庭の無規律無秩序的生活に歸せむとす。さきに謂へるが如く、大に良き家庭以外の敎育は、こゝに少しく惡しき家庭敎育のために、その利を失はしめられたるに外ならじと信ず。

今に始まりたるとのみは言ひ難からむも、早雲二十一箇條の中にも、起床就寢の時を失へるの害は數へられたり。今の家庭の生活に於て、或方面の人の外は、覺むるに時を定めず、臥する時を一にせず、食するに、人と語るに、人を訪ふに、遊ぶに、勉むるに、何一として守まりたる規律の下に行動するものは、果して、それ幾人ぞ。心に惡しき病を獲て、弄花讌遊に耽るの人は、須らく我が曹の人と

して視るを好まざるの所となすも、少しく心あるの人にして、猶醉へるが如く、醒めたるが如きの生活を爲す者多きは、我が曹の常に以て遺憾と爲す所、之を近くしては、社會の活勢に影響し、國運の消長に關係すといふべく、之を遠くしては、家庭の惡習慣に染められて、遂に漂泊するに由なき第二國民を生じ、患ふべき、第二國家を生ぜむ。此の如き不良なる空氣の充盈せる家庭に在るものに對して、如何に善良なる規律的教育を施すも何の得る所ぞ。此の如き無規律なる家庭の生活に馴れたるものを翻がへして、秩序規律あらしめむと欲すと雖ども、その勢は、その功に報ゆ可くもあらざらむ。觀來りて、此に至れば、天下文政の振はざるは、その責當路者に在りといはむよりも、寧ろ家庭の父兄が肩に懸く可きなり。豈に愼まざる可けむ哉。

如上は、家庭教訓が、學校その他の教育の効力を阻害するの一例を擧げたるに過ぎずと雖ども、之を各方に考ふれば、亦各々、その例に乏しからざる可し。我が曹が知れる某小學に於ては、家庭に於て子弟日課の豫習は決して、之を爲さしめざるなり。その故を問ふに、父兄の學力は徃々にして、子弟に授くるに誤謬を以

てするに足るものあり。教師の說く所と、父兄の語る所と兩々相容れざるの結果、年少子弟の疑惑を惹起し、遂にはその信ずる所に從ひて、或は父兄を重じて、教師を輕んじ、或は教師を尊みて、父兄を賤むに至るあらむを慮るにあり。これ少しく極端なるに似たりと雖ども、亦忠實なる學校にして、當さに執るべきの方針、實に嘉すべきの細慮といはざる可からず。これ亦家庭と學校との衝突なり。我が輩は、此の如き擧例の數百を列ねて、貴重なる紙面をうばふの勇なしと雖ども、刻下に於て、先づ第一に顧慮せらるべきの事は、實にこの規律の點にあるを信じ、敢て大方の反省を促がさむとするものなり。



論説

泰平の良婦（中）

三輪田眞佐子

我が國へ佛敎の傳來は、欽明天皇の御宇第十三年に百濟より經論、及び、佛像を献じ、且つ表を奉りて、佛の功德を說きしより、始りしとぞ。されど、武き丈夫が薙髮して、入道あるは法師となり。亦は、未だ春秋に富まざる婦女の、麗しき黑髮をおろして、尼となるまで信向するは、後世のことなるがごとし。

試に我が文學史を見よ。平安朝より延喜天曆のころまでの和歌、及び、文章には、佛敎の趣味なくして、眞に、大和民族の天眞を知るに足らんも、星移り物變りて、鎌倉時代より、足利時代の文學は、禪味あるを以て特色とするも可ならん。おのれつねに、太平記、源平盛衰記、方丈記、徒然艸十六夜日記若しくは、八犬傳などの書を見るにつけて、佛敎の趣味あるところに於て、わきて妙と感じ、これを愛するも、これを國民敎育に應用し、學生をして、盛者必滅を觀し、以て失望の生涯を送らしめんか。國家の隆盛を得る道にあらざるべし。特に女子は、感情に富めるを以て、唯、厭世に陷り易きものなれば、文學を以て、一身を滅すことなくぞ幸なり。これ杞憂に屬するが如きも女生のものする作文に照して厭世の分子あるを証すべし。世の敎育者、これを注意せざるべからず。

更に歷史、又は、作話によりて、昔日の所謂貞婦

なるもの、例を擧げんに、彼の平淸盛は、祇王なる白拍子をかぎりなく愛せしが折しも加賀の國より、佛の前とて歌舞の名人來りければ、淸盛は、その艶色に迷ひて、祇王を追出しけり。時に祇王は、泣く〳〵障子に(もえいづるも枯るゝもおなじ野邊の草いづれかあきにあはではつべき)とかきて立ち出でぬ。なほ祇王のおもひけん、浮世にあれてこそ、かゝる憂目をも見れとていざと心を定め、僧を請じ、髮をきり、嵯峨の奧なる山里に入りけり。佛、これをきゝて移ればかはる世の習なれば、我とても、末おそろしと亦髪をおろし尼となり行きて、祇王が柴の庵をたづね、共に佛道に歸依せしとかや。これら各花の姿を墨染にやつすは、いとあはれなれども、今日より見れば、世を厭はんよりも、人の姿となる如き獸道を去りて、いかに拙きわざなりとも、正しき女藝を營みて、潔白の末路をたどるこそ、願はしけれ。などか美談とするに足らん。

雄禪尼は、年若きころ、庭の木の葉の散るを見て、思ひけらく、我が身の有樣をおもひつゞくれば、木の葉に異ならじ。春の若葉より夏の梢を過ぎ既に、四そぢは秋の色づくに同じ。遂に、五そぢとなれば、冬の枯葉のごとしと觀じ、これより發心して、甲斐の國鹽の山なる向岳院法身和尚の許に行き、尼とならんと請ひけれども、その容姿、頗る麗しく、年さへ、いと若ければとて、寺院に入るを許されざれば再び家に歸り、爐中に鐵器を入れて、これを燒き、その炎のごとくなるを、顏面に壓し醜きほどに火傷して、

我がおもてうらみて燒くを鹽の山
あまのたく火と人や見るらん

と詠みて、重ねて、和尚に乞ひ、遂に戒を受けて

出家の本意を遂げしとかや。元來世上を觀じ來らば、樂天の心を起すもの少なからんも、われらが國民と生れしからは、世事をつとめて、本分を盡さゞれど、決して國民といふべからず。況んや、鐵器を以て顔を傷くるごとき、熱心あらば、泰平の良婦となること難かるべし。惜むべき極みにこそ。

女子と園藝

近藤隆

今假に立派なる一家を理想せば、父子相親み、長幼序あり、夫婦相和し、子孫榮え、外に出づるもの、内にあるもの、皆、各、其の勤めの限りを盡すものたるべし。諺に、佳妻と健康とは、人の尤も善き富なりと云へる如く、病める家庭の如何ばかり物淋しく憐まるべきかよ。一家に於ては、妻は、そが鍵なれども、心して、其の家政を仕末するに非れば、狂ひたるものと、何ぞ擇ばん。この故に我は、人の妻たり、家を治むる内助者なるべき女子は、其の富みと、正しき鍵とを保たんが爲に、只に家政經濟裁縫調理の術に長せるのみならず、他には、趣味を生み、攝生にして健康を増進すべき異るすべにも、心を用ふるの要あるを見るなり。我れは斯の目的の爲めには、其の手段として、園藝の技能の養成せらるべきを希はざるを得ず。園藝とは何事ぞ。之を平易に解釋すれば、庭園に學藝を應用する事なり。言葉を換ふれば、果樹を栽ゑ、花卉を培ひ庭を形ち作り、花を咲しめては、春の趣を添はしめ、夏は、月に秋は虫の聲を聽くべく、常綠樹の參差たるは、冬の凄愴を表はさしめて、四季折〻に眺むる外に、或は、實を結ばしむるの果樹を培ふべく、又は、蔬菜を

作りなどする事をば云ふなり。之も、是等の事共の如何に興味深く、攝生的にして、子女には、示物敎育の好材料とはなり、家を出づるもの、入るもの送らてれは迎へらるゝもの、、心の中に優美なる活動の如何許り湧かしめらるゝぞ。況んや、女子の性は、園藝の技術を解し、趣味を感ずるに、尤も協ひたるに於てをや。婦人の美飾は寡默にあり。要なき言葉を語らざるにあり。それ花を養ひ蔬菜を栽うれば、花は笑ふべき期自ら生れ、實結ばるゝのとき語るに似たり。怒りは、何人にも敵なり。怒を、遅うするものは、戰に勝てる勇士よりも强し。されば怒りの萌せる時は、先づ後庭に出で、、自然が與ふる、立派なる訓戒を聽くべきか。怒りは遠く去り、自ら摘める花は、愛らしさ倚さの外に何者をも表はさゞる美しきものとなるべし。目と耳とを、みだりに用ゐざる謹愼なる婦人は、後園の中に立てり、我は、女子に戸外の運動をとて、種々の献策をなす人々の前に、園藝は修め易くして、尤も大なる効果を生ずべきものなる事を公言して、之を推擧するに躊躇せざるものなり。一家の婦たる女子のそが夫をして、金冕を冠らしむるも、或はまた、その骨を腐らしむるも、またく婦人の力一つにて、自由なるべしと信ず。美靴は、往々にして足を傷く、世の女子達よ。常に心懸け給ふ用意の上に尙、一倍の留意こそ乞はまほしけれ。

婦人と勞働（承前）

紅村生

若し我が國の勞働問題の趨勢をして、彼の佛蘭西に於けるバブーフ輩の唱ひて『社會に於て一人た

りとも他人より多くの財貨を有し、多くの勢力を有する者あらば、我が黨の組織すべき社會の調和は、忽ちにして破れん』と云ふが如き激烈なる共產主義を空想にも行はんとする者あらんには、勞働界の紛亂は施て、國家の紛亂を喚起するに至るも知る可からざるなり。幸にして、我が國に於ける雇者被雇者の關係は、歐米諸國と歷史と習慣を異にし、曾て累を國家に及ぼすが如き大なる紛擾なく、今日に及びしは、眞に國家の慶事と云ふべきなり。然れども、有體に今日我が國工業界の現狀を視察すれば、資本家及勞働者に向ひて、各批難すべきの點少からざるなり。曾て、我が農商務省は、其の官吏をして、工場を巡視せしめ其の結果として、我が工場、及、職工に關する通弊一班なるものを世に公にせり。

（一）空氣流通の構造不完全なること
（二）操業場の面積狹小に過ぐること
（三）入口及階段の構造不完全なること
（四）通路の不整備なること
（五）食堂、着服場、浴場、便所の不潔なること
（六）有害の瓦斯及臭氣の排泄設備不充分なること
（七）有害の品料を使用し若くは製造する工場に於て危害豫防設備の不完全なること
（八）塵埃を發散する工場に於て其排泄裝置の不充分なること
（九）汽鑵の構造及取扱の不注意なること
（十）蒸氣機械其他機械の運轉部に負傷豫防の裝置を設けざること
（十一）起重器、卷揚機、昇降器械に危險豫防の裝置なきこと
（十二）工場に消火器具の不充分なること
（十三）夜業をなす工場にて安全なる燈火を用ゐざること
（十四）勞働定時間に彼此相違あること
（十五）早出居殘及夜業の割增給に厚薄の差あること
（十六）職工の休憩時間及不同なること
（十七）休憩喫飯時間に職工の勞働すること
（十八）徒弟又は幼年職工に制限なきこと

(十九)幼年職工若しくは幼年徒弟の勞働時間に制限なきこと

(二十)幼年徒弟又は幼年職工に通學の時間を與ふるの制なきこと

(廿一)職工の雇入、解雇、賃銀支給方を職工の頭分に放任すること

(廿二)職工傭主より解雇せらるゝとき當然受くへき損害を賠償せらるゝ規定なきこと

(廿三)食物若くは物品を以て賃銀に代ふるの弊あること

(廿四)職工の負傷、疾病扶助の法不完全なること

(廿五)職工事務の爲めに致死する者を手當さする規律なきこと

(廿六)女子授業に制裁なきこと及男女の作業場に區別を設けざること

(廿七)授業徒弟の取締行はれざること

(廿八)職工契約期限内に逃走し又は直接間接に誘引せらるゝことを取締に法なきこと

(廿九)職工周旋業者に弊害多きこと

(三十)火夫運轉手の雇入解雇に取締なきこと

(卅一)職工故意にて無法に抱へ主の高價なる器械を毀損し損害を蒙しむる者に對し處分法なきこと

右の指示せる三十一ケ條の通弊なるものは、其の制度の標準を示さず、且つ我が國工業一般の程度を計らず、單に其の外面に顯はるゝ弊害のみを擧げしのみにて、實際工場の裏面に立入りて、勞働者が、資本家に對する擧動の不秩序にして、誠實ならず、殆んど、其の整理に苦しむが如き狀あるを知らず、徒らに泰西翻譯的の觀察に依れるの嫌なきにあらざれども、世の資本家が、施行しつゝある自己工業上に就きては、一の參考として、大に勞働者風紀の改革を促すべき問題たるや疑なきなり。吾人は、吾が國工業家に希望するの最も切なるは、工女の保護問題なり。彼の柔和にして沈默なる、未だ工場の空氣に觸れざる多くの婦女が、年々增加しつゝあることは、前回に於いて述べし如く、女工風なる一種厭ふべき習慣をして、工場よりして、一掃せしめざる可からざるなり。

世論は、曾て、工場條例制定の不必要を唱へしてとありしも、爾來我が勞働界、何事の革新を見ず工女の增加と共に、婦人勞働に腐敗の風俗を吹き込まんとしつゝあること、豈に憂慮すべき問題ならずや。

年次	女工
明治十九年	一、一七一
明治二十年	一、四〇〇
明治廿一年	二、四〇〇
明治廿二年	五、三九一
明治廿三年	一〇、八三三
明治廿四年	一四、二一六
明治廿五年	一八、八七八
明治廿六年	一九、二八四

右は、全國綿絲紡績女工增加の割合にして、明治二十九年末の調べに由れば、單に織物業に從事せる女工のみにして、九十二萬一千三百餘人に及べりと云へり。此の如き勢を以て進み來る我が工業界に、一大原動力となりつゝある工女界の消息は、吾人をして覺えず嘆聲を發せしむることの多きは、返へす〳〵も工業界の前途に最も悲しむべき暗黑あるを證すべきなり。

就いて之を聽くを求めんとするも渠等はジャーガート器械に身を寄せて默々苦も樂も愉快も不愉快も、有りて訴へさるか答ふるに憚るものあるか敢へて自個を說明せんとする者なく、更に問ふに答ふる者なし、渠等は苦なきか。果して平らかならさるものなきか、聲を揃へて樂しげに謡ふを聽けば

「嫌だ〳〵よ機織廢めて、甲斐絹織屋のお神さん」

更に謡ふものに耳を傾くれば

お鉢引き寄せ割飯眺め、米はないかと眼に涙

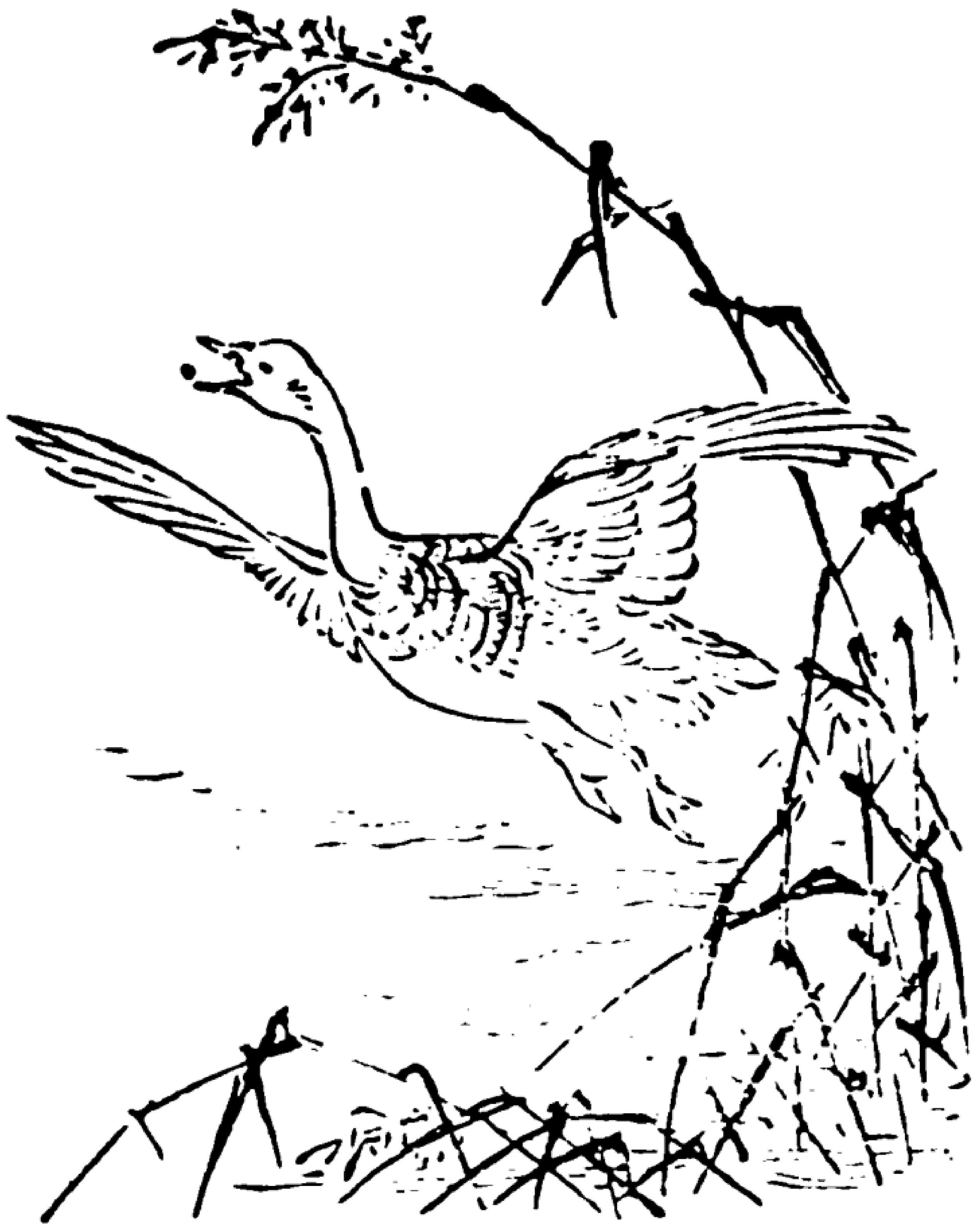
又、

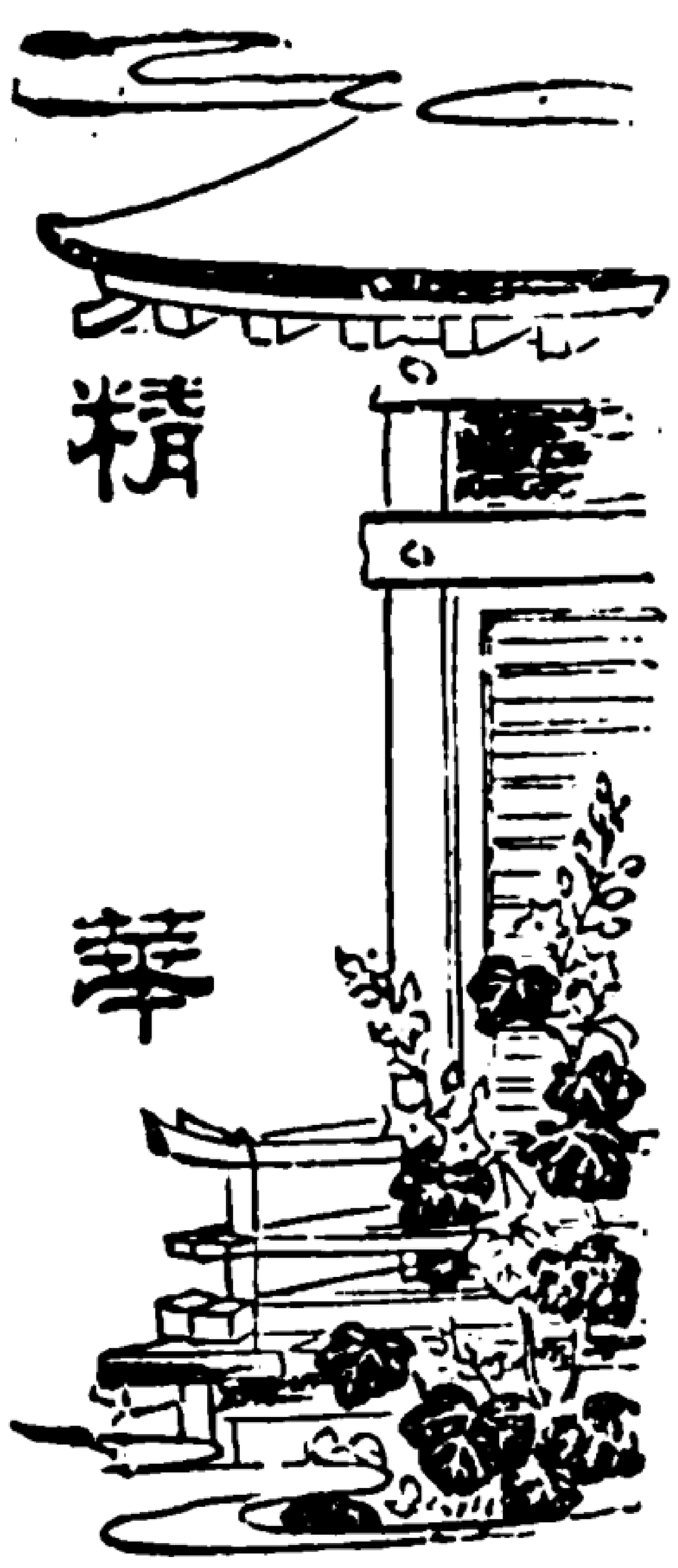
「親が承知で機織させて、〇〇〇なさ先きあ無理だ」

嗚呼これ「日本の下層社會」著者の實見せる桐生足利地方に於ける、工場の狀態なり。誰れか、其

の鄙猥にして、堕落の境に呻吟せる心情を憐まざらんや。此の如き暗黒の方面に向ひて、改新救濟の策を講ぜんとする固より一朝夕の事業に非ざるなり。吾人、今より勞働保護策の世論の何邊にあるかを説き併せて卑見を述べんと欲するなり。

（未完）





勅語要義（承前）

東久世通禧謹述

謹みて案ずるに、父子の道は、天性にして、其の相親愛する情は、自然に出づ。皇祖、寶鏡を、皇孫に授けさせ給ふに當り、吾兒視二此鏡一當レ猶レ視レ吾と宣へり。皇孫は、皇祖の遺體なり。皇祖を拜し給はんとて、寶鏡に向はせ給へば、鏡中の御形は、即、皇祖の遺體にましまして、天胤の無窮に昌え給ふまにまに、皇祖、永く、鏡中にましますなり。其の詔勅の深意誠に、幽遠廣大なりといふべし。

およそ、世に、父母として、子を愛養せざるものなく、子として、父母を敬慕せざるものなきは、是、有生物自然の性なり。禽獸蟲魚に於ても、猶、皆、然り。況、萬物の靈として、至純至粹の德性を具へたる人類に於てをや。況、天地神明の後を稟け、古來幾千萬年、忠君孝親を以て、道德の基本とせる、我が日本國民に於てをや。皇上、已に、神皇の訓を掲げて、父母に孝、なるべき道を諭させ給へり。臣民たる者宜しく、反省して、子孫永世、此の義を全くせんことを念ふべし。これ、即、陛下に忠なる所以なり。

此の條を演述するに、世、或は、父母に孝にと宣へる前に、於て、忠君の一句を省かせ給へるは、陛下の親諭せさせ給ふ所なるが故に、殊更に、謙退せさせ給ひて、忠君の文字なきなりとする者あり。聖旨高大、固より、容易に窺測すべからざれども、陛下は、臣子に命じて、忠なれと宣ふこと、當然のことにして、決して、謙退せさせ給ふべきことならず。蓋、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦の和、朋友の信以下は、下文、天壤無窮の皇運を扶翼すべしとの句に至りて、總括せらるゝものなれば、最首、忠君の文字なきは、當然の事なり。若、首に、忠にとありて、再、皇運を扶翼すべしとありては、重複にして、而も、妥當を缺くべければなり。天壤無窮の皇運を扶翼すべしと宣へるは、君上に忠なれと宣へると、毫も異ることなし。聖勅に、忠君の事を省略せさせ給ふこと、豈、御謙退の意ならんや。

謹みて案ずるに、上古、伊弉諾尊の三聖子を得給ひしとき、天照大御神には、天上の事を授け

させ給ひ、素盞嗚命には、天下の事を任じ給ひ、而して、月讀命には、月界を治めしめ給ひき。兄弟の叙次あやまらず、弟を以て、元長に先ち給ふことなし。大國主神の俊傑を以て、猶、庶兄の命に違ひ給ふことなかりき。又、大國主神と、少彦名命と、天神の命を以て、義兄弟たるときは、少も、逆言あることなくして、天下經營の事に、力を盡し給ひし類、兄弟の友全く、長幼の序、正しきを見るべし。夫、祖先は、父母の始なり。父母は、子孫の始なり。而して、子孫は、樹木の如く、兄弟は、枝葉の如し。其の形體、分離別立したれども、其の根幹たる、父祖の血胤を受け、同氣、相貫き、榮枯盛衰、相伴ひ、苦痛歡樂、之を同じくし、同心一體にして、相扶け、相倚り、以て、其の父祖に、事ふるは、是、天性の自然なり。而して、兄は、

弟を愛し、弟は、兄に順ふこと、猶、小枝の大枝に屬するがごとくなるべし。是、亦、自然の序次にして、友子の情を全くする所以なり。

又、愛は、兄弟より始めて、之を、親族に及ぼし、衆人に及ぼすべし。彼の親々より、他に及ぼす道を知らず、四海兄弟の語を誤解して、内外親疎の別を忘れ、本を末とし、内を外とし、兄弟をも、道路の人と同じくするが如きは、是、神州の道義と相距ること、甚遠きものなり。

上古、伊弉諾、伊弉冊の二神、夫婦の禮を行はせ給ひしとき、女神、男神に先ちて、歌の詞を唱へ給ひしかば、男神、固く戒め給ひ、天神の意を請ひて、男神、更に、先唱へ給へり。天地の開けし初より、陰陽剛柔の義正しき事、此の如し。又、皇孫瓊々杵尊の、木華開耶姫命を見給ひしとき、汝を以て、妻とせんと欲すとのた

まひけるに、妾が父、大山祇神あり。請ふ、垂問せさせ給へと答へ給へり。女子は、自専にせず、父母の許諾を得て、婚嫁すべき事、亦、すでに、上代に定まれり。

此等の明範は、日本臣民の、萬世遵由すべき大道なり。苟、生れて、皇國の神孫たる者は、此の大道に本づき、天地生々の理により、夫婦の道、自、尊卑剛柔の別あることを辨へ、相和合して、其の家を治むべきなり。又、夫たる者は、日本武尊の、夷賊を征討して、事繁き軍中に在らせられても、なほ、妃橘媛を懷顧し給ひしが如き、恩情愛を忘れず、婦たる者は、橘媛の險浪に沒して、尊の難に代り給ひしが如き貞烈を思ひ、開闢以來の神聖なる大道に違はざらんことを期せざるべからざるなり。

上古、皇孫の、中國に臨ませ給ひしとき、文臣には、五部の臣あり。兒屋根、太玉の二神は、中臣、忌部の部屬あり。猿女、鏡作、玉作の三神にも、各、其の部屬ありて、長官部屬、相共に結合して離れず。又、武臣には、大伴連、久米直あり。大伴連には、大伴部兵士あり、久米直には、久米部の兵士ありて、互に、信從して、皇孫を護衛せり。是、朋友相信ずる道を以て、朝廷に仕へたるなり。其の後代に至りても、物部尾輿の藤原鎌足に於ける、藤原鎌足の、蘇我倉山田石川麻呂、佐伯子麻呂、葛城稚、犬養網田、巨勢徳陀古等と、同心協力して、以て、奸を誅し、天智天皇中興の業を補佐し奉れるに於ける、諸他、祖先が、信義協心、皇室に仕へ奉れる、朋友相信の明鑑は、歷史に、昭々として、範を、後昆に垂れたり。利の在る所は、則、親しみ、黄金の多少、則、交の厚薄を見るが如

き輕薄は、祖先のつねに、痛憤せる所なり。豈、愼まざるべけんや。方今、人心、浮薄に趨き、風教、月に頽廢せんとす。今にして、之を挽回せずば、數千萬年相傳へたる良俗、全く、地を掃ふに至らん。此の國家の隆昌を輔翼し、皇運を扶植し奉る大本は、臣民、皆、父祖の明鑑に遵由し、朋友相信じ、同胞相携へ、一意、君國に勤むる道を失ふことなきにあるなり。

備後國ひめ女

田山とり子

備後國にて貞節を以て聞えたる、ひめ女は、御調郡宇津戸村の組頭、半兵衞が女にて、世羅郡高山町の濱田屋儀八郎が妻なり。性質素直にして情ふかゝりき。儀八郎、田畑三段ばかり所持したりしかど、其のみを耕作して、一家の糊口を支へらるべきにもあらねば、下部一人をやとひおきて、田畑のことをうちまかせ家の人々は、麻、苧、綿衣類、鐵鑄物、穀類、茶鹽味噌やうのものを賣りて世をすごせり。父母は、既に老いて、儀八郎夫妻の孝養を待つ身なりしかば、ひめ女は、夫を助けて、商賈の道にいそしみ、赤誠を盡して、舅姑に仕へ、家道やゝ盛運に向ひたりしに、如何なる鬼神のわざはひなりけむ。夫儀八郎、不圖、病にかかり、癒ゆることもなく四五年ばかりを歴しが、三年前よりは、いと重うなりて、床にのみ就きてありけり。固より、少し短氣の性質なりしが、斯く病蓐に長の年月を送るやうになりては、更に、いと氣短うなりて、條理なきことにも、うち腹立ち、怒り罵ること多かりき。時としては、一向食物をも食べずして、何もかもすべて、ひめ女の故

に歸し、日夜せめ聞ゆることなどもありしが、ひめ女はつや〳〵、憤りうらむる心もなく、言葉を和らげて詫びながら、或は、夫の親しき友を賴みて、うちきとさしめ、病人の心にさばらぬ樣にと、心を碎きぬ。幼き子一人ありけるが、日頃も、藥用二便のあつかひ、人手をたのみては、病人の心にかなはざるより、幼子を懷にいだき、家業のことをも爲ながら、看病如才なかりけり。夫は、かく病人なり、舅姑も老人なれば、それ〴〵に、鍋をわかちて、相應しく能き品を調へすゝめ、おのれと下部とは、木芽野菜のまじれる粗物をのみ食ひけり。衣服のこと、亦、おのれは、肌を覆ひ、寒を凌ぐばかりなるをとり、老者病者には、温くよきものゝみを纏はしめぬ。舅姑とは、僅に、障子一重を隔てゝ臥しけり。若し、老爺のよくあることにて夜更るまで寢つかれぬやうのことある時

には、看病の隙をうかゞひて、しば〳〵安否をたづね、枕の高きひくきさへ、心をくばらぬくまもなかりき。斯ばかりの注意も、なみ〳〵の人ならましかど、容易に、行ひ遂ぐることを得むや。然るを、ひめ女には、猶更に、行ひ遂げにくき事情のありけるなり。

舅六郎右衛門は年老いて、たゞ、儀八郎が上のみ氣遣ひけるが、ひめ女の朝夕の慰籍によりて、然樣かと安心を得るばかりの良好人なりき。今一人の姑こそ、心術ひが〳〵しく、いとかたましかりしか。其の一二を言はゞ、朝の茶を呑まむとては、是はあまりに澁し、然りとては、また淡し。わが言ひたるに憤りてわざとや斯くするとか、飯の炊方强しとては、老者の腹そこなはせむとての業ならむなど、事々しうわめきたてつ、烏雀の囀聲は聞かずとも、儀八郎が母の小言聞えぬ朝は、

四隣の人々、いと珍しきことに不審しあへり。其等の無理ごとも、皆わがあやまちにしなして、其の心を和げゝり。

くだ〳〵しかれど、更に「とりあつめていはむか。心なき下部を率ゐて其の業を勤めしめ、一向わが子の病を案じ煩ふ老父を慰め、朝夕なにかにゝつけて罵りさわぐ老母をなだめ、一家の糊口を支ふる商買を手一にさばき、而かも、頑是なき乳子を賺しながらに、短氣なる夫の病氣の介抱、其も、一日二日の間ならばこそあれ、幾年月のこゝろくばひ。若し、小説稗史とやらむを物する人々をして、斯の事實を聞かしめば、ひめ女の心中を、如何に悲絶に、如何に慘絶にも描寫したりけむよ。然はいへ、ひめ女は、これを悲しとも辛しとも思はざりけり。彼は、眞實に、不幸なる男夫を慰めいたはり、不平おほき姑を和くるために、天より遣はされたる人のごとく、其の心純潔にして情ふかゝりき。

夫は遂に死去りぬ。愛子さへ尋いでなくなりぬ。固より貯蓄とてもなければ、彼是の費用のために、家計、はます〳〵、苦しうなりぬ。是に於いて、ひめ女は先づ下部を歸し、店の間をうかゞひて、自、田畠を耘し、更に、また豆腐をつくりて商ひ、猶、少しの間を見出でゝ、布木綿を織り、さて、身につくるものとては、わづかに生命をつなぐばかりに節約して、舅姑に仕へ、亡き人のためにも、懇に、後の營を爲してけり。斯く比類まれなる心に、如何なる鬼か角を折らざらむ。然しもありし姑も、いつしか、やさしき人となりて、朝夕曉びくらすやうになれり。彼の鬼も遂に角を折りしとよとて、鄉閭の人々も、今更の如く驚き感じかしましく、是の事を噂しあへりしかば、お

のづから、領主にも聞え、家來をして日來の行を尋ねさせしが、其の折、男六郎右衛門は、この嫁來りてより、十八年の歳月を經しが、いまだ背つて、われ〱が心にそむきしこともなく、其の上、姑は氣みじかくて、條理なき事をのみ言ひかけて責めさいなめば、如何に温順しき性質なりとも、心にさはらぬ事はあるまじと、側にも堪へがたき程なりしに、露ほども、いかりうらむる心なかりしには、いつも〱、涙もとゞめがたし、とて、なく〱物語りきとぞ。即ち、享保二十といふ年の九月に、領主より、褒美の米を賜ひて其の特行をあらはし。ひめ女が甥の虎松といへるを養子として儀八郎が後を繼がせ、同し年の十一月には、所持の田地、子孫に至るまで永く年貢をゆるすべき由の恩命をさへ賜はりきといふ。

世の中を憂きものと定めたればこそ、憂き事の多くも出できつれ。不自由を常と思ひ極めたらむには、なか〱に、樂おほき世ならむかし。世はたゞ、人の心のもてなしにて、憂き世ともなり樂き世ともなりぬべし。其の道理は、心思を煩すまでもなく、このひめ女が上にて知り玉へね。他人は堪へがたしといふ家計の困難も、姑の邪見をも、彼は、いさゝか不平とすることなく、夫の病すこし快げなりとては喜び、姑の心和ぎしとては樂み、子供の笑顔が愛らしとては喜ぶ。彼のためには、いかに樂しき世ならずや。とは言へ、おろかしきわが心には、猶、ひめ女がありしむかしの如何なりけむと、涙ぐまるゝぞかし。撞着の謗もわすられてよ。

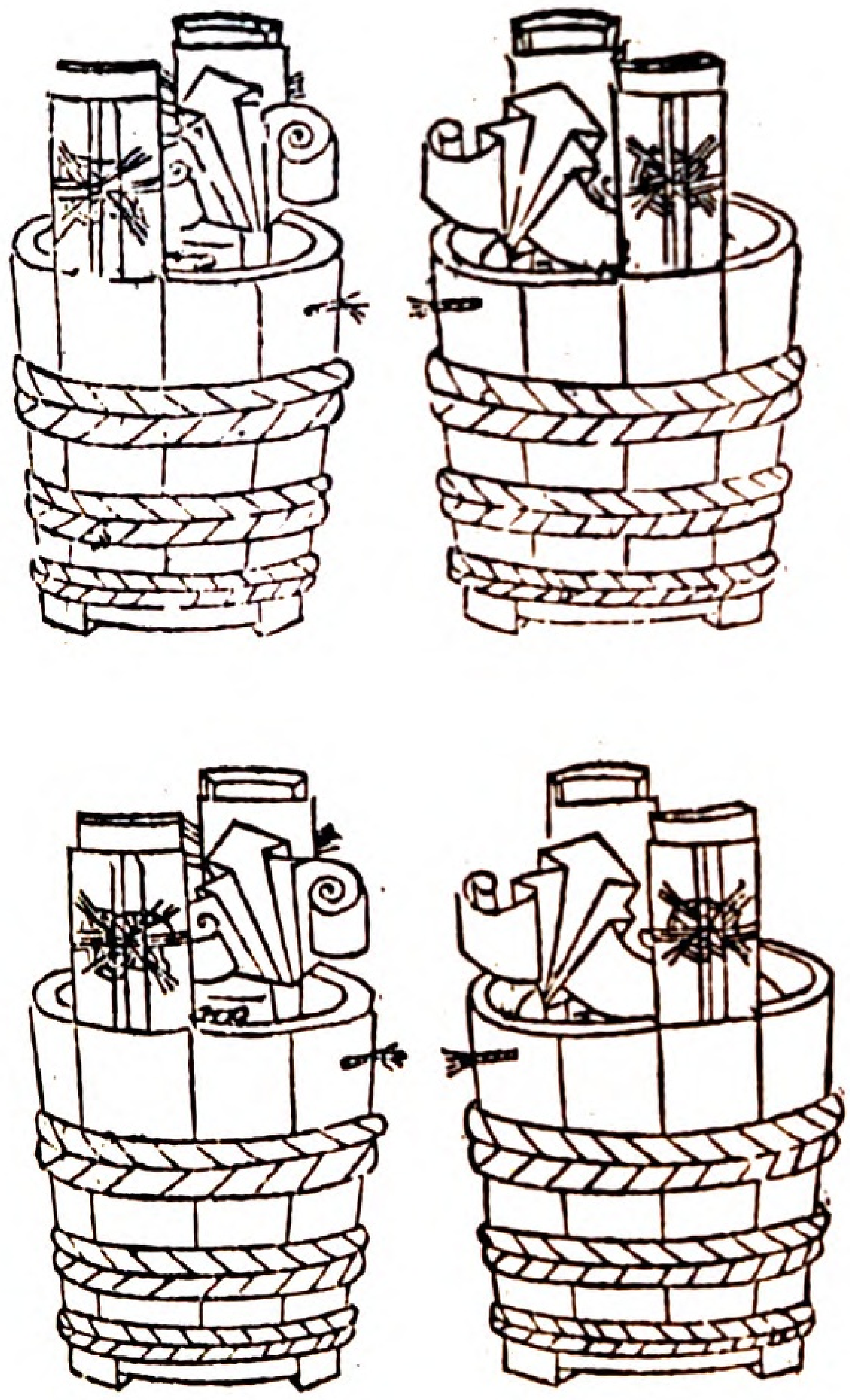
家政

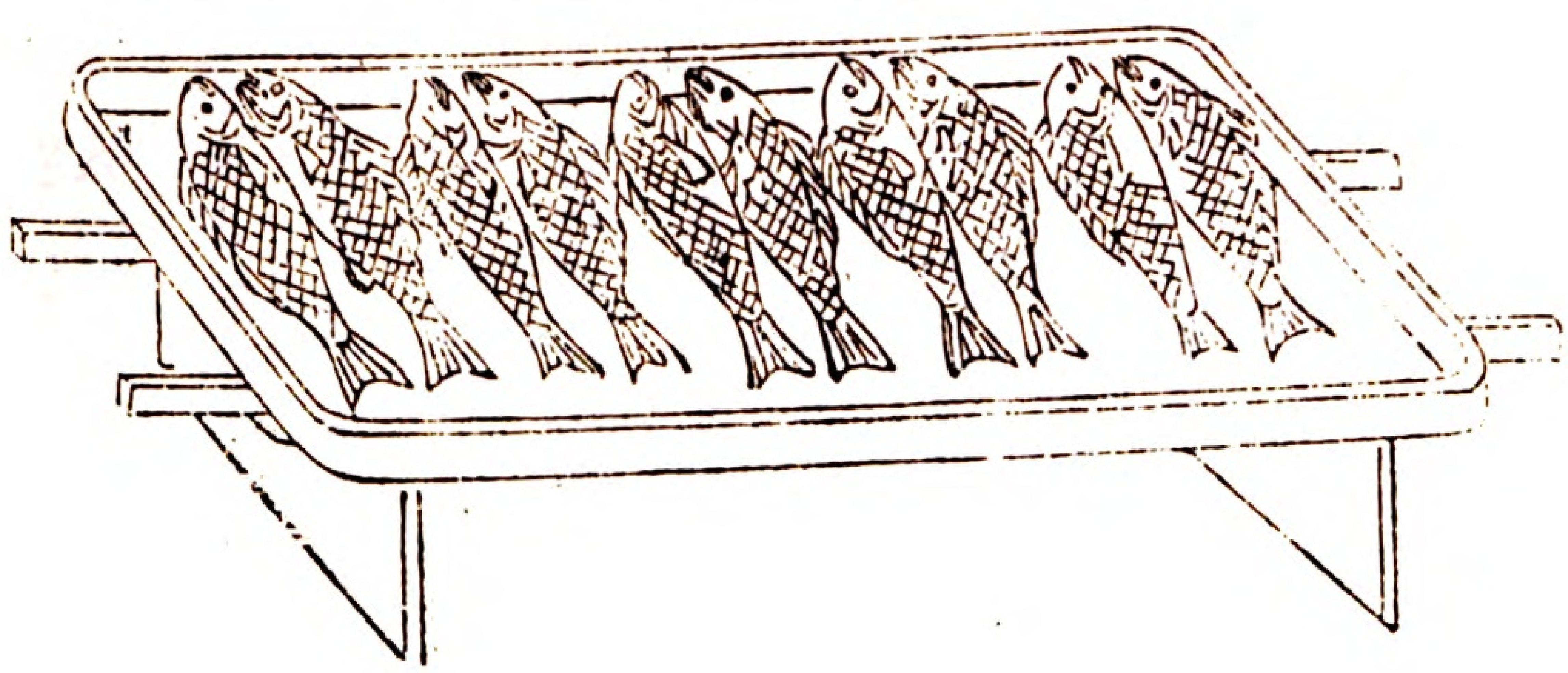


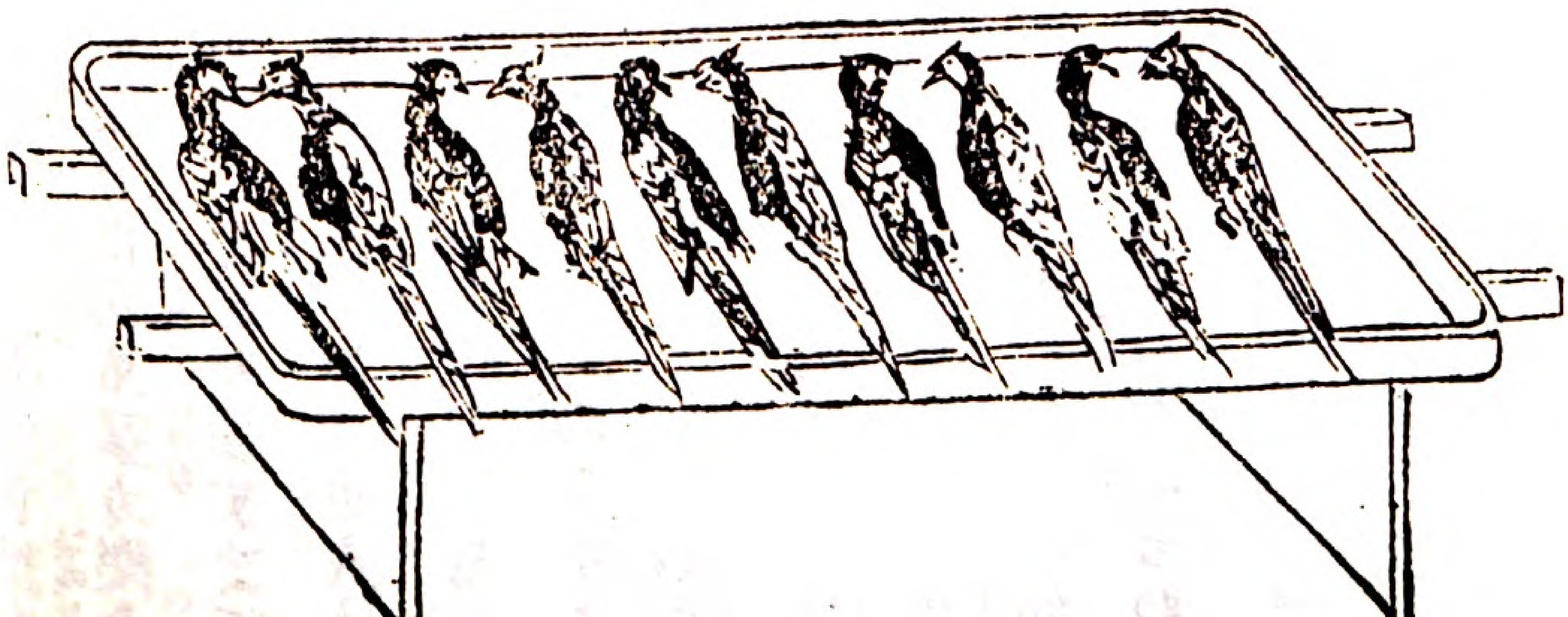
婚禮式（承前）

有住常子

品物のつみ様







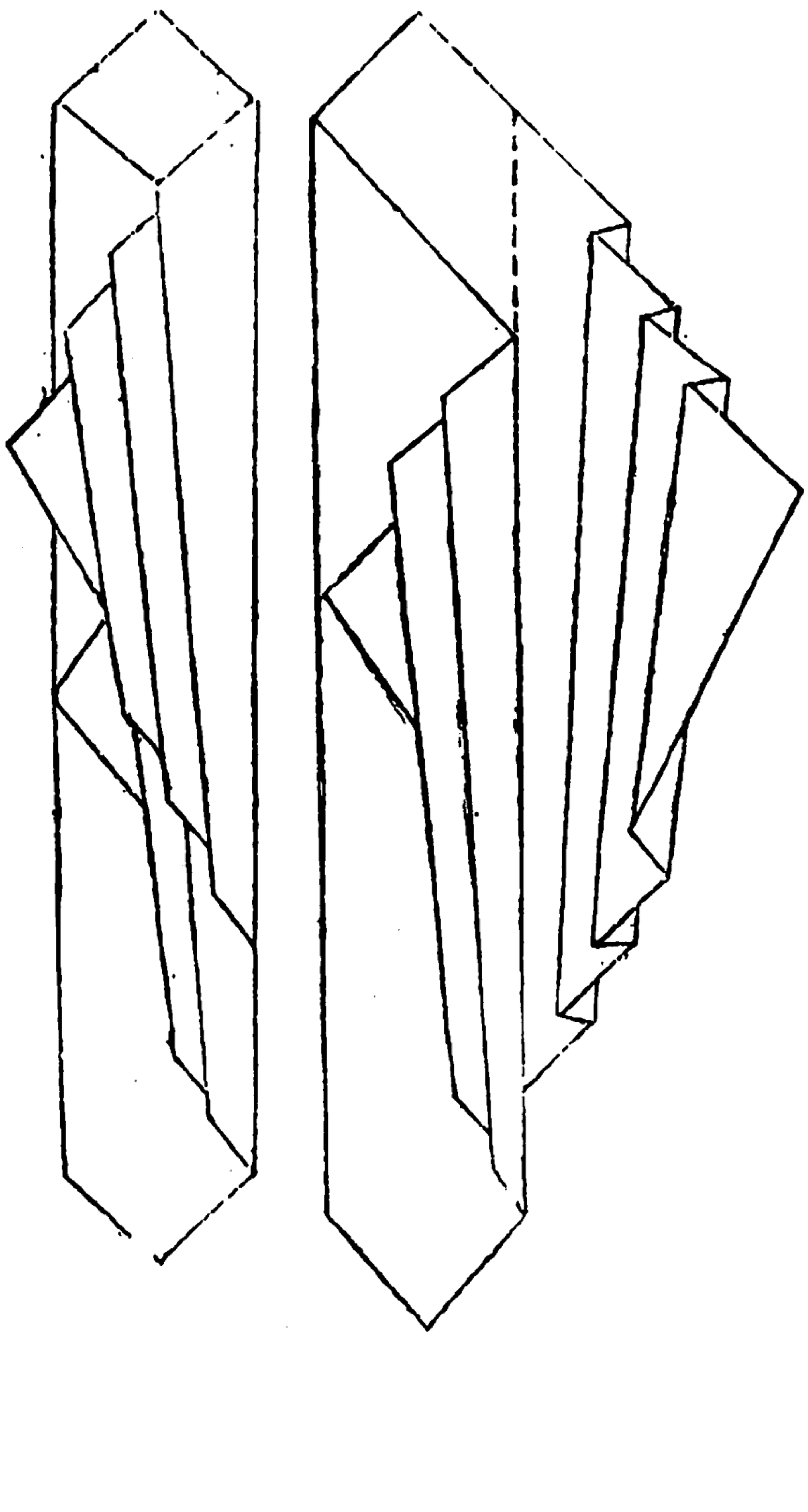
折方

眞行のし包

有住くわう子

是も、長熨斗をいるゝなり。婚禮結納等にもちひてよし。婚禮なれば水引二本にて結ぶなり。

（折上り）



茶の湯

茶禮初學（承前）

孤峰庵祿仙齋不羨

關 葦 雄

臺子種類五品

眞の臺子　利休好

竹臺子　紹鷗好

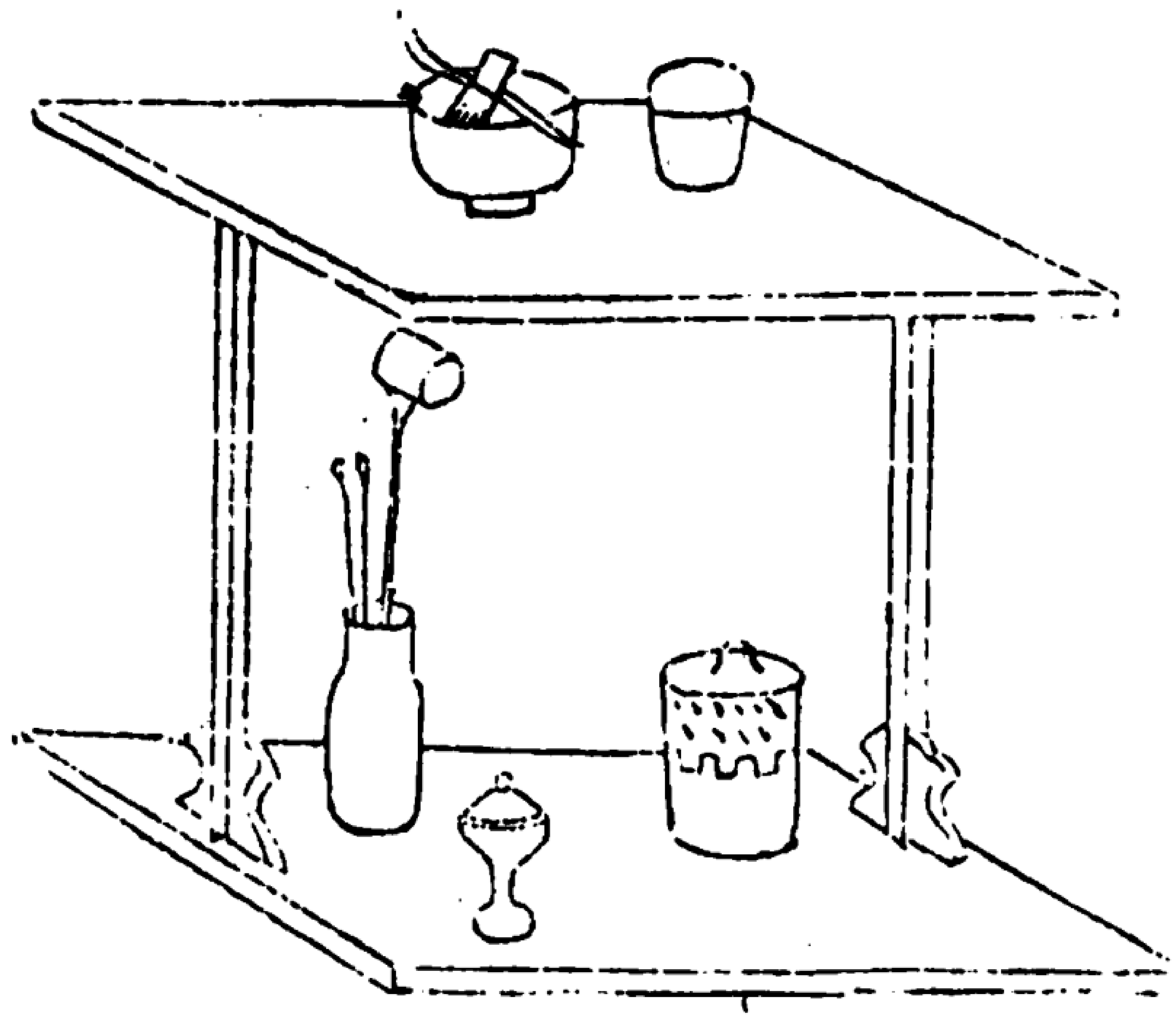
桑臺子　原叟好

高麗臺子　元伯好

爪紅臺子　同人好

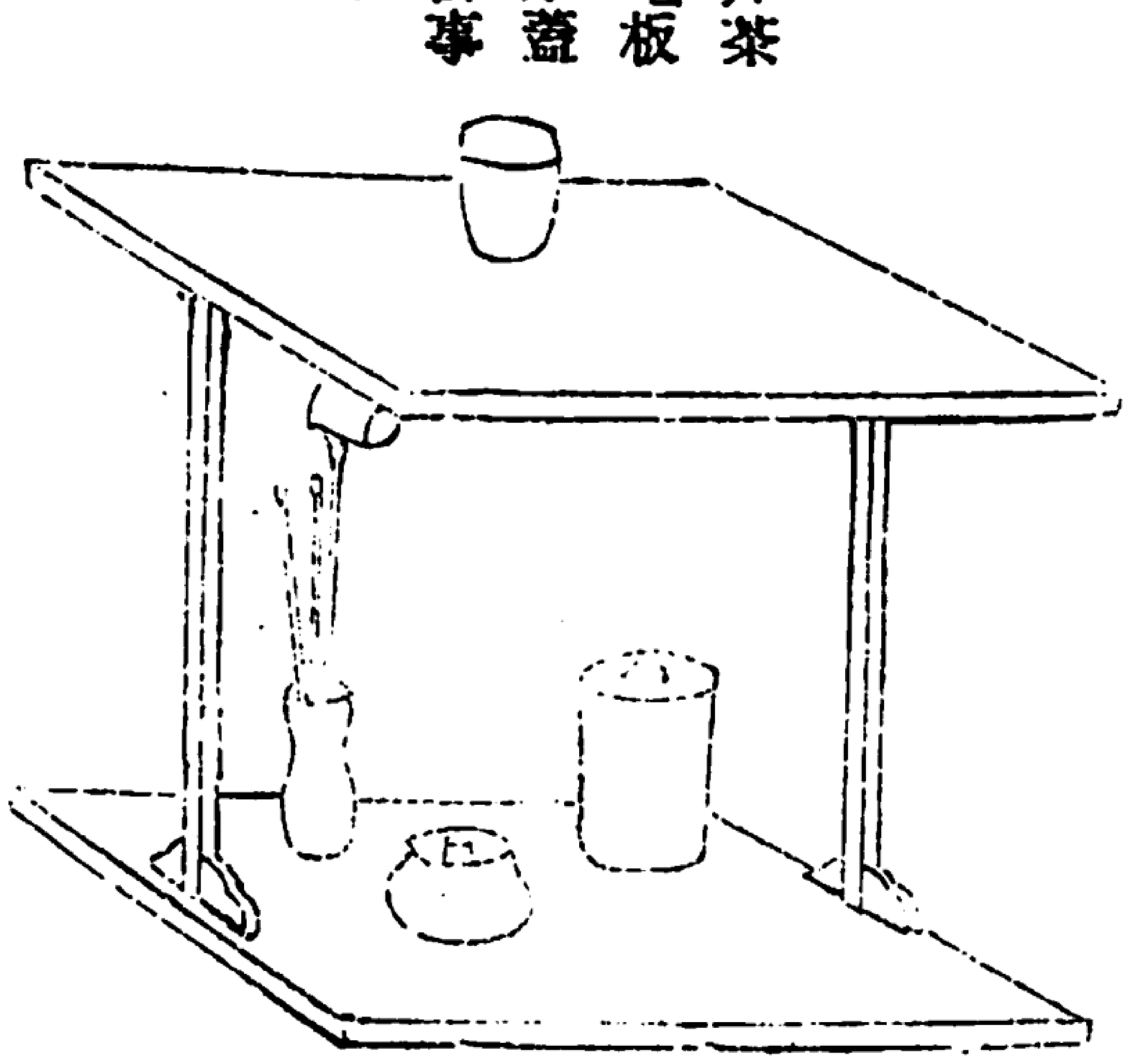
註釋不羨曰、臺子種類は、前記の如く五品ありて、最多端なるものなり。此の中、眞の臺子は如二名義一、茶道上嚴肅、且、鄭重なるものなり。其の故は、茶道の奥儀所レ謂皆傳は、眞臺子の眞の手前なり。又、其の上京都家元に、一子相傳は、三千家立會を以て子々孫々へ繼敍する長盆に、則眞臺子を用ひて點つる所のものにて、此の形容臺子は、道元禪師入唐の節携へ來りしものにて、唐の及第の臺と云事なり。其の恰好宜布を得たるを以て、假りて茶に用ひしものならん。臺子は爐の時季には地板には、水指、杓立、蓋置翻　杓立には、柄杓火箸を、必建る事也、柄杓は、月形にても、差通しにても宜し。火箸は、飾火箸と唱へ、頭に色々形あり。石琵子頭、利休、鳥頭、流芳椎頭、宗全、渦頭、祿齋　是等の中を可レ用、建水と蓋置は、必、飾と定りたる事なし。蓋置斗も、可レ有、建水を飾たらば、必蓋置は中へ可二入一置一、臺子揃と稱するものは、此の四品へ、風

爐釜を入て、五品と成し流儀にては、不白好杯、最優美高尚なり。銅揃と、今利焼の陶器と兩用あり。何れにても場合と取合にて、見



兩器飾建水引たる所天井へ羽箒香合飾事はなし

合可レ用。天井は茶入壹個、或は、總飾と唱へ茶碗を添ることもあり。爐と風爐の差違は、風爐を除くと、風爐を地板へ飾るとの違ひなり。前條名義を糺して云時は、面倒の樣なれども、平素薄茶の點前則、草に用ゐる時も差閊無レ之ものなり。爐には、居前は勿論、臺



又天井茶入斗地板へ建水蓋置入飾事もあり

目なり。都て臺子類、及、長板類は、すわり火箸、立火箸と唱へ、臺子に向ひ座したらむ直に火箸を拔きて、地板の左の方、疊の上、

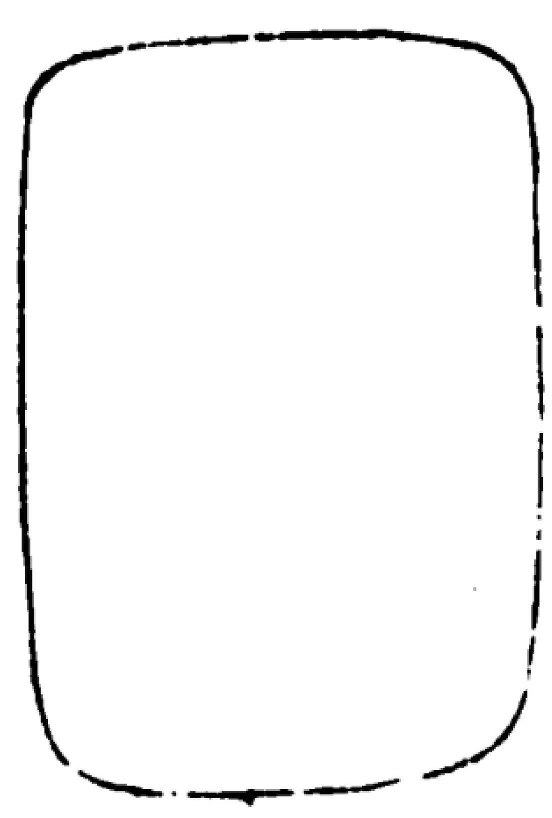
板に付て、頭一寸斗出して、蓋左手にて、可置合。手付の順は、前號に示教したり。可見合。臺子の點前は、平素の濃茶にても、薄茶にても蓋置へ柄杓を引と云ふとなし。必、杓立へ戻すべし。仕舞の時も、必湯返をなすべし。總飾にせんと思ふ時は、天井へ、茶入茶椀を餝、建水を持入、其の水を翻し、雜巾にて水をふき切て、持出、蓋置を入て餝るべし。總飾にても、翻を除くもあり。則、下圖の通りなり。書物上にては、此の解釋には困りますが、臺子となれば、點前上、何となく位高く、初歩心の諸孃方には、不得點ものなり。御注意ありて、實際點て御覽あれかし。



たちぬひ

匂ひ袋

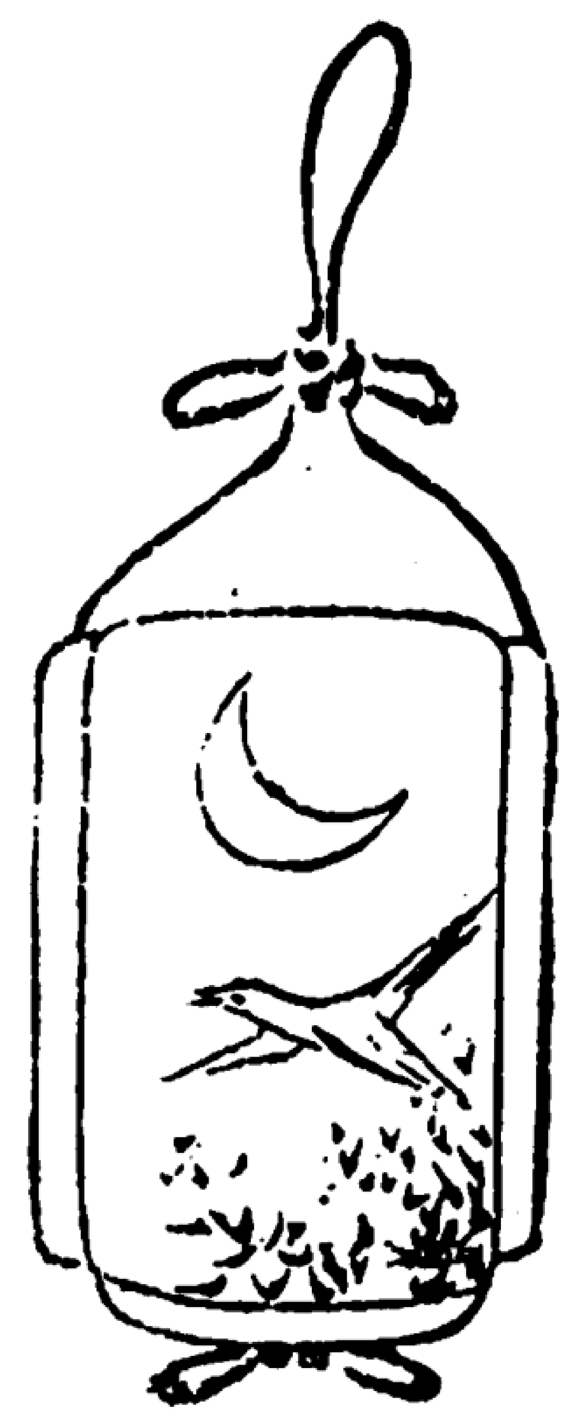
西山たい子



例の如く、厚紙を右の如き形に、二つ切り、それを眞中を高くし、綿を少し入れ、その内の凹みたる所に匂ひをつけし綿を入れ、切れを被せ紐を通し、また、かんぢんよりを二本に、切を着せおきそれを兩側にはさみイ、表と裏とをはり合すべし。それより月花鳥などの形を思ひ〳〵につくりて、

はりつけて、かざりとすべし。左の圖を見て推しはかり玉へや。

（その圖）



だいどころ

シチー椀

先づ、鷄の、皮を剝き、腸を去り、能き肉をとり、こまかにたゝき、殘りたる肉は、骨と共に、羹汁になし置、馬鈴薯、人參、大根の皮を剝き、能程にきり、湯煮し、又玉葱をたてに四つに割り、小口より、薄くきりて、さつと湯がき、前にとり置たる羹汁の中にいれ、沸騰たる時、鷄のたゝきたる肉をいれ、食鹽にて鹽梅し、暫く煮て、葛粉を水にてとき、かきまはしながら、鍋にいれ、どろ〳〵になりたらば、おろして椀に盛りいだすべし

鷄のおろし煮

鷄を、前の如くこしらひ、肉を能程に切り、骨は羹汁にして、きりたる肉を、其の内にいれ、さつと煮て、食鹽にて味をつけたるところへ、大根をおろし、水をしぼりて、能程にいれ、沸騰たる時、器に盛りて供すべし。

鯖のおろし煮

鯖を、三枚におろし、腹の骨を、へぎ去り、脊と腹と二つに割り、小口より、二三分程の厚さにきり、前の如くおろし煮にするなり。鷄の羹汁、なき時は、鰹節の羹汁にて宜し。

雛鷄の牛酪燒

雛鷄の肉を、大きくすきとり、これを庖丁の、脊

にてたゝき、食鹽、胡椒をふり、パン粉をかけ置き、鍋に牛酪をとかし、牛酪の色の、こげたるを見て前の肉を、いれて、焼くべし。皿へ盛る時には、溶けたる、牛酪の汁をいるべし。また付合せに、馬鈴薯を輪切にし、湯でゝ、焼たるものを添て出すもよし。

赤茄子鶏卵焼

鍋に、牛酪をとかし置き、赤茄子のへたと種を去り、横に二つに割りたるをいれ、鹽と、胡椒をふり、少し焼て、鶏卵をいれ、又焼て、半熟にすべし。

割烹と禮節（承前）

石井泰次郎

○献立

凡そ料理を學ぶ者の、最も注意を要すべきは、献立の法なり、献立は、其の自らか手をくだして爲す人の忽せにすべからざるは、勿論、常々專門の料理人を置きて、せしむる程の家に在りても、主婦たる人は、宜しく、能く之を學びて其の時宜に適ふべき機轉と注意を要すべき事なり。然らざれば、其の衛生上經濟上に就きて非常の影響あるは、云ふまでもなく、或は賓客を招きて、盛宴を張る等の時に於ても亦、甚だ其の便不便を感ずること、少からざるなり。况んや親愛なる父母、良人、及び、其の子女が營養と愉快とを助けんとするには其の女たり、妻たり、母たる者の充分にこの道に熟練せざれば能はざるなり。云云。

さて、献立に二種の心得べき事あり。一は賓客に供する饗膳の献立して、一は平素、我及び、一家の人の三飯に要すべき總菜の献立なり。而

して、盛饌の献立はなるべく、味ひ愛たく、外見も麗しかるべし。いはゞ交際を厚くする媒介の一種ともなりぬべければ、其の費用の如きもやゝ價高き物なりとも、其の饗宴の種類によりては、已むを得ずして、購求使用せざるべからず。而して日常の總菜は、まづ經濟と衛生との注意を第一として、なるべく費用の嵩まぬやうにすべし。斯くて、其の料理の方法によりて、たとひ一樣なるものにても、味と形と、さま〴〵變化するやうにも、心がくべき事必要なりかし云云。

要するに、献立をして巧妙ならしめんとするには、先、各種の料理法と、其の味ひとを知らざるべからざるものなれば、人の家に行きて、供せられたる食品の新珍とも覺え、味甘なりとも感じたる時には、よく其の味ひを注意し置て、暇ある時、是を料理し試むべし。然する事度重なる時は、殊更に献立法、料理法として、習ひ覺えずとも、亦、隨分に巧妙なる手腕となる事を得るものなり。而して、味ひは、常に能く心をとゞめて、風味し試みざる時は、何時までも眞の風味を知る事能はざるものなる事を心得べし。

以上は女史が講説の總論に示されたる注意の大概を摘記せるなり。献立の章尾に少許の欠點ありと雖も、全論を擧げては、割烹學の爲に盡せるの言語とやいはまし。然して、其の所論の如く、其の教授法の實行を遂げ得られたるや否やは、未だ、不幸にして、伺ひ得るに及ばざるなり。只、其の一端を以て所論の如何に及ぼす事を得ずと雖も、又以て、其の教授法の建設の一證として見るべきものあり。即ち女

史が講述にかゝれる料理法是なり。其の一節にいはく。

味噌汁

清し汁の作り方、及び、取合せ物等を前巻に掲げつれば、爰には味噌汁の事に就て云ふべし。

鯉こく　鯉こくとは、鯉の濃漿といふ語を略したるなり。鯉こくは、必ず、味噌汁に限りて、清し汁は用ひぬものと心得べし。其の仕立方は、まづ鯉の肝と膽とをそつと取除き、よく洗ひて鱗ながら、五分程づゝに輪切にし、白味噌八分、岡崎味噌二分の割合にて、擂り混せ、鰹節の煮出汁にて、うすめにとき、よく〳〵煮込むべし又わらひ味噌汁にしたるもよし。吸口には、路薬山椒の芽或は、粉山椒等を用ふべし。

泥鰌汁　云々　以下製法略す

蜆汁　云々

薩摩汁　云々

豆滓汁　云々

江瑤柱と若菜との白味汁　云々

若鮎の味噌吸物　云々

蒲鉾と松露との味噌吸物　云々

雞肉と夕顔との味噌吸物　云々

この外、何にても、時の物を見計らひて、取合すべし。白味噌、赤味噌と品物によりて、適宜に撰び用ふべし。

といはれたり。此の教授法の如何は、後に對證して云を要する時は、云ひもすべし。暫く爰には、女史が意見のまゝを紹介しおくなり。



漢文學講義

佐々木天游

遠州薑說

林 鶴 梁

世稱遠州薑之美。余始聞意其不辛辣。及咬之。辛辣尤甚。殆將及舌棘喉。以爲辛辣如是。奚足以稱美乎。既而思之。吁吾過矣。夫辛辣薑之性也。辛辣尤甚。所以美也。薑而不辛辣。是猶武士之無武烈而柔媚。豈其本色也哉。

世に遠州薑の美を稱す。余始め聞いて。其の辛辣ならずと意ふ。之を咬むに及むで、辛辣尤も甚し。殆ど將に舌に及し、喉に棘せむとす。以爲く辛辣是の如し。奚以て、美と稱するに足むや。既にして而して之を思ふ。吁吾過てり。夫辛辣は薑の性なり。辛辣尤も甚し。美なる所以なり。薑にして而して辛辣ならざれば、是猶武士の武烈なくして、而して柔媚なるが如し。豈其の本色ならむや。

遠江國は生姜が名物でありますが、茲文は其の說であります。說は矢張、解說說明の義でありまして、文體中の一式であります。論文と別に大した相違はなきものであります。此は林鶴梁先生の筆であります。

偖、世中の世間で、遠江國に出來ます所の薑は、美味で結構であると云ふことを申しますが、余自分が、始最初に、遠州產の薑は結構であると、人の申しますのを聞ました時は、其の遠州產の薑は、辛くないから、結構と世間で稱美するのであると、思ひ考へてをりました。(辣は說文辛甚曰レ辣とありまして。ヒドク辛きことでありま

す。意は心に思ふことなり）所が、サウでなくて、之（遠州産の薑を）咬み喫べてみました所が、意外にも、餘所に出來ました薑よりも、尤も甚しく、ヒドク辛う御坐りまして、舌の先が、ヒラ々々致します。殆んど鳥渡、舌を刄し、喉に棘すで、刀の刄を以て、舌の上を刺し、荊棘のトゲを以て、喉の奥を刺すが如くにして、舌の先から、喉の奥迄、辛くて辛くて、ビリビリ致しまして、ジカジカする樣に辛う御坐ります、ソコデ自分が考へて思ひますのには、辛辣如レ是で、此通に辛くて、舌や喉を刺す樣にあるもの丶、奚ぞ（何ぞに同じ）ナンヂ美味と稱贊するに足らうや。イヤニ辛い計りで、チットも結構なことはない。然るに世間で、遠州産の薑は結構と申しますが、ドウも合點がわからぬ。（乎は疑うて未だ定らざるの辭なり）と咬みてみました後に考へました。既而

サーシマシタ所で、又之を思ひて、コンナに辛いものを、美味と稱するのは、ドウいふ仔細のものかと、篤と考へました所で、初めて其の說を得ました。ソコテ吁吾過りで、（吁は嘆語の辭なり。邦語のさりとてはと云ふ程の意なり）サリトテハ、吾自分が此迄は過ちて、心得違をしてをりました。（過矣は心得違でアックと云ふ程の意なり。矣字は截然緊殺之辭と申しまして、一定不移の意を含むの助字であります）夫（夫字は起手助語辭を申しまして、發語の詞であります。虚字で、別にシカト指す所ありて、謂ふのではありません）ソレ一體。辛辣の辛いと云ふのは、薑の性質持前でありますのぢやから、辛辣尤も甚しくて、辛ければ辛い程、其の性質が美なるものである。サレバ餘所に出來た薑よりも、遠州産の薑は、尤も甚しく辛いから、美味と世間に申す釋合の

ものヂヤ。ソコデ今迄コンナニ辛いものを、何として美味と謂れやうかと、思うてをりたのは、自分の心得違でありた。モシモ薑にして辛いと云ふことがなければ、全く其の性質の持前を失うたもので、コレコソ眞實に美と稱するには足りませぬ。辛いが持前の薑で、辛いことがなければ、譬へて申さば、（玆所の是字は、俗語のコリヤーと云ふに同じ意なり）武く勇ましく、烈しき操の持前であるべき、武士モノノフでありながら、其の持前たるべき、武き操がなくして、却りて女子供の持前の樣に柔弱にヒヨハク、諛媚に人の機嫌を取りて、コブルガ如きもので、個樣なものは、全く其の持前の性質を失うたもので、固より稱するに足らぬもので、豈ナニシニ、（豈は反語の辭なり）其の本來（本色は、本來の色と云ふことにて、持前或は地質など云ふに同じ義と心得べし）の持前と謂ふべきものでアラウヤ。武烈の持前を失うたものは、眞の武士とは申されまい。それと同じことで、辛辣でなければならぬ性質の薑で、辛辣なければ、薑の性質を失うたもので、美とは申されまい。ソコテ遠州產の薑は、辛辣尤も甚しいから、世間に美味と稱する所㆑以である。（也哉は、搖曳咏嘆之辭と申しまして、長く咏嘆するの意を帶びたる助字であります）と薑の說に托して世の柔弱なる武士を、諷諭いたしましたもので、是レ猶㆔武士之無㆓武烈㆒云々の十七字ありて、玆文が始めて世道人心に關係あるの、一好文字になりましたので、サモナケレバ、玆文も亦文章の本色を失うたもので、薑の辛辣ならざると同じく、ホンノ閑文字で、固より稱するに足らぬものでありますがソレハ偖置、兎毛角も、誰人に限らず、皆其の本色を失はぬ樣に致したいもので、皆樣方もドウ

か遠州産の蠶の尤も辛辣にして、其の性の尤も美なるが如く、愈〻貞淑の本色を堅うして、其の性の美をして、愈〻美ならしめられんことを希望いたします。



漫録

女訓綾廼雛形（巻の一承前）

揖取素彦

一朝夕の食とゝのへ、厨の事まかなふは、もとより婦女のつとむべき業なればこそ貴人の御妻を御臺所とは申すなれ。御臺處とは、臺盤所の中略にして、臺盤とは、食物を盛りならぶる机案をいふ唐土のいにしへには、后妃夫人の貴き身にも、祭祀の供物になるべき野菜を、みづから摘みて、調進せられし例もあるなれば、只人の上にても、猶さらの事力をつくし、費を省き、調味の品に、器ものまで、淸きがうへにも淸く

し、神前の供物は申すに及ばず、父母舅姑に参らする物は、必らず手づから調じて勧むべし。

一凡物學するも、立居振舞の躾方を習ふるも、女の女たる理をわきまへ心すなはに、正しからずば、假令、才勝れ物しりになりたりとも、皆いたづら事になりぬべし。かく數々いひつらねたる諄言は、若き人、稚き人達の耳に、聞くも、煩らはしく、その理りもわき難きが多かるべけれど、そはおとなびたる人々に問ひ明らめて、大むねばかりをもさとれかし。日に月に人の智慧ひらけ、怜悧うなりゆくまゝに、おのづから、萬の事、くさも繁くいちはやき勢ひは、さながらうちしきる玉霰の氷を走る樣なる中に立まじらはんは、いと／＼難くもあるかな。されども善を善とし、惡を惡とするは、むかしも今も、かはる事のなきぞ頼みなる。たゞ身を愼み、誠をつくし、口と心とうらうへなる事だになくば、志を遂げ、世をわたらん事も安かるべし。さるにても、若く稚き人の心をかくさまにおしつかねては、身じろぎもならぬまでに困じはてやせんとは、おもへども、條ときて新鷹をつかはんすべもなし。よし束縛にすぐるとも、放逸なるには、ましならめ、宮づかへする人の朝とくより、起出で夜さりいぬるまで、聊か心ゆるびなく、かひつくろひ、かしこまり居るも、さまでにくるしと思はぬは、習ひ性となるものゝ如し。名教中にも、豈樂地なからむや。憂きもつらきも、樂しきも、みなこれ心のおき所一によるものを、

よしといふも草の名あしといふも草の名枯るれば隈も難波江にすむ月かげこそさやかなれ

とながめてあらば、何事も心安くのどかならん。

平常に二親に給仕する樣と、また立居ふるまひの躾方は、つぎ〳〵題目をわけてしめすべし。

他山の石

（三）マリーワシントン（ロ）

岐蘇　小東洋子譯

母と子息は、性質に於て、容貌に於て業爲に於て多く同しく、滑稽と想像力に欠くる代りに非常に正義、温順、決斷、に富む。ワシントンが司令長官として、幾多辛酸の舞臺を馳せ回りし時の勇氣と、克己も、彼の母が、殤ひ爲め、非常に苦しみつゝありし事を、數年月の間忍耐し、以て子息等に告げざりし、其の剛勇と比較せば、實に懸隔當ならずして、此の境遇を嘗めし結果、彼の女をして、獨居の決心を一層强からしめ、彼女が死する二三ヶ月前に至る迄此の高齢にも拘はらず、なさんとする事業をなし、猶は爲さんと計畫しつゝありき。

内亂鎭定として、戰爭の塵を取る爲め、バルヂニアを去るに際し、ワシントンが第一になさんとする義務は、フレデリックスボルグに行き、母を都に移さんとせし事なり。其處は令孃の嫁せし田舎にて、彼は母を此の荒涼なる田園に殘して去らんとするは、實に忍びざる事にて、殊に母は長き戰爭と、彼の歸國の期の不定なる事を、ほのかに知り居たりしかば、遂に、彼の出世の爲め、平安の心情を以て、之を承諾し、適當なる管理者を雇ひ、田園を委任し、母は屢々來りて、監督をなす事にして、都に移れり。母は生涯中、日々馬に跨りて田園に行き、播種、及果實收穫の世話より、家作の修復等を處理し、又は必要品を購入する等

の凡てを管理せり。毎朝門前には、古風の一頭曳の馬車と、温和なる馬は彼女を待てり。後年に於ける彼女過半の生涯は、戶外生活にて、自然と相交通して、浩然の氣を養ひ、密露滴るの田園に逍遥せり。此の間に子息等は成長して、各々自己の事業の爲め、遠征の途に上り、長子は、多少危險の事業に從事し、大半母と分居の有樣なりき。斯く生活せしは、彼の女の爲め、最も幸福にして、彼女の宿痾も、此の規則正しき、平靜閑雅なる生活のため、數年間發するを得ざりし。彼の女としては、必ずや悲痛苦慮すべき、種々の困難と、子息の長き遠征中不在に付ては、ワシントン夫人は全く憂ふる事なく、却て日々の經驗は慰撫平安を心中に宿すに至る。彼女は、大なる自然の意識を持ち、堅固なる意志と信仰を持し快活寛大の生涯を送れり。一言に言へば、彼女は、實に偉大なる婦人なり。生涯を常に公明の方向に從はしめ、無慈悲、不義、苦痛の、反照は、一もなく、只誠實なる敎徒にして、自己の捧ぐる祈禱に據て生れ、自己のなさんとする決斷に據て動きし人なり。八十三ヶ年の多事なる全生涯中、至る所善良なる婦人として尊敬せられたり。

吾人は、今、彼の女が、如何に、自己の生涯の歷史を編みしかを見んに、彼女は、實に沈直と忍耐勉强と決心を以て、其のページを編み終れり。彼女は、革命戰爭時代に於て、最も優美の品性を有する一人にして、婦人一般に有する美容と、技術上の熟達を持たざるも、進步的の善良なる意志と大なる事業的の力量、及び、他に彼女の個人として最も著しき、他を動かす感化力を有する彼女は敬神家にして、近世に於ける、唯物論者が、如何に其の勢力と巧なる批評を試むるも、善良なる母

即ち最も成効ありし家庭の教師は、熱心なる宗教思想の婦人の全心を以て、祈禱の力と効力を儘し其の同じ信仰を以て、子孫を養育薫陶するを、人生の最大義務となせし所の婦人なりき。

マリーワシントンは、敬神家の出なり。コベンターなりし先祖も、キリスト教信者なりき。母を持ちバルヂニア州に、父が殖民せし時一は、只一人の小兒として、宗教的に愛撫教育せられ、已に成長しては、教會員となり。爲めに友として交際せし人は、皆宗教趣味の人にて、バルヂニア州、最初の殖民者、及び、其の子孫等は敬神家にして、教會建築の爲め、時を投げて金圓を募り、安息日は、最も大切の日として、六日間は、熱心に働き翌日には、禮拜の爲め團欒の集會をなす、其の有樣、今日の教會に於て見るべからざる、嚴肅謹厚の風習なりき。隨て、此の活動なるキリスト教徒に據て養成せらるゝ小兒等も、全く宗教的嚴肅の氣風を備へ、彼等は聖書を學び、其の大部分を暗誦し、彼等の長上者と伍する時は、今日の青年男女輩の、理解すべからざる尊敬と服從を有せり。

斧のえ（五）

松竹莊主人寄贈
荒木田麗女遺稿

中將日ごろ、このみ給ふことゝて、われもすぐれ給ひ、京にて上手にものし給ふ人々にたちまじりて、をさ〳〵おとりけなきに、これはおよぶべうもなく、ゑもいはずめつらしき手のかぎりつくすなるが、いみじく見さして、かへらんことも口をしう斧のえもくたいつべく、七世のむまごに逢たらん時と、びんなけれど、とみにもうでかれず、う

ちはてゝいと思ひのほかに、日影もかたふきけりな、けふはかどかりぞ。又あすこそはと、いふままに、中將を見つけて、すこしおどろきがほに見おこせたり。こなたのひとりも、いぶかしげに、ものいはず、うちまもりけるが、からうじて、珍しきまらうどの、いましけるを、しらざりけるよ。京の人とこそ見れ、いづこにかはものし給へる。おぼろげの人來べくもあらぬ所にとゝがむ。中將今日行幸につかふまつり侍りて、しばし山の氣色見んとてなん分入はべりしに、いとおもしろき御あらそひめづらしさに、とばかりと思ふ給へしかど、あやしう長居し侍りて、あへなく御心おどろかい奉るが、かたじけなくとて、かへらんとし給へど、御供なる人ひとりみえず、ありし稲荷の峯のやうにもあらず、はじめわけ來し道もなし、いとあさましうむねうちさわぎて、いかにせんとまとはれ給ふ。一人のおきなまが〳〵しきことをものし給ふよ。こゝはみゆきなどある所にはあらず。まことにうき世のほかの山ぞやろなう道にこそをまよひ給ひけめふびんなるわざかな。御供の人の侍らぬにやといへば、中將しか一二人ものし侍りしいつの程にかくれけるにか、いふかひなきものどもにも侍るよ。たづねくらんをまたんもすべなし。あはれまからん道を敎へたまはゝと申給ふ。又ひとりそれいと心やすきことなれど、かく世はなれてはしたかのとがへるばかりの山なれば、かさなる岩ねもさわかしきおとはのみちを、いかでたはやすくはわけ給はん。こゝろなれたる木こりなどだに夜にいりてはかよふことも侍らず。まいてやこのさかひまでは、そこばくのみちなり。立田山ならねば、夜半にひとりは、いかでかはこえ給はんずる。山寺のかねの、今日もくれ

ぬとつげ侍るぞや明日は御むかひの人、かならずまゐるべければ、今夜は見ぐるしくともおのが住侍る草の庵にいざなひまゐらせん。なれずば、いかにといふめる。園生の山のわらしをきゝ、わたして、一夜ばかりは、遥のまろねをもし給へときこゆ。はじめのおきなさかし雲の上人と見給ふれどなん、そのかみにたちならし侍りし百敷のけはひもゆかしう都の手ぶりのわすれがたければ、夜とゝもに物語をだにと、せちなるさましてきこゆ。中将うれしくて、然らばともかくものたまはんせんまゝにと申給ふ心のうちには、すゞろはしう常にはなれぬみちさださへなきが心ばそけれど、たつきもしらぬ山中にて、此のよぶこ鳥にさへすてられたらん時と思せば心やぶらじとし給ふなりけり。おきなどもは、くれぬほどにと、いそぎつゝ、さきにたちて此の山をくだり谷水のいさぎよきながれをわたれば、あなたにすがたおもしろき山あり。いたゞきは平らかに、いとひろくて、えもいはずおもしろき家あり、このおきなの住家なりける。やがてそこに、ゐてゆきてまらうどゐの方にかしづきいれて、おろかならずいたはりきこゆ。ずさもあまたあり、かはらけさしいでつるに、瓶子とる人もひなびず、山かつめかしからず。みな都なれたりと見ゆ。所につけたるあるじも、うるはしうして、その夜は、おもひかけぬ山ぶみにこうじて、くるしうやし給はん。とくやすみ給へとていたうもふかさで、あるじゆもいりぬ。君はならはぬ旅ねのなますさましう、山道のつかれに心地もなやましくて、寝られたまはず。さても、いかなる所ならん、思はずに仙の宿に來けるならん。京にかへりなば世にしる人あらじ。一人いのち長からんは何にかはせん、あへなき事ぞかし。い

かでありしながらに、かはらでおらんをり、かへりにしかな、とにはかに心の中に神佛をねんじ給ふ。

いかでわれ思はぬ山に旅ねして、都を雲の餘所になしけむ」わりつるおきな、一人は家あるじにて、ひとりは、こと山に住なりけり。又明日まゐらんとて、宵にかへりつ。からうじてあけぬ　けはひも、鷄の聲はせず、ねぐらはなるゝからすの鳴さはぐも、たゞ枕かみにきこゆ。おきいでゝ見わたし給へば、庭は白砂まきちらし、たて石もわざとならず、もとよりのいはほさながらにて、苔むしものふりたる心ばへおかしく、やり水のながれ、筧の音信、わづかにめぐり、柴垣は、所々にあひて、ものはかなくゆひわたし、若竹のすがた清げにうちなびき、松は、いづこもふかきかげなるが、たのもしく、前栽も、夏の草々は花さきたるもあり、萩薄などは、秋まちがほなれど、若葉は、いとめづらしう、又、名もしらぬ草樹あまたうゑしげらせつる、いづれとなく夏の梢は、涼しげに、ことに目とまるさまなり。見わたす山々は雲のたち居もひまなく風にしたがひはれゆくまゝに、遠きちかきけぢめわかるゝなど、京のうちにては、まだ見たまはぬことなれば、けうありと思す。今朝はこの目のまへのいみじさに、心ほそくたつきなきおもひもなぐさみて、めづらしきやどりとりしもうれしう、故郷人にも見せまほしうおぼえ給ひ、御手水まゐりなどして、あるじのおきないできたる、今日は、人々たづねてやまゐるとまち給へど音なければ、心もとなくて、中將道のほどたはやすからねば、えもたづね侍らぬにやいとおぼつかなし。いかで里ちかき所まで、こゝなる人ひとりしるべにかし給はゞその給ふ。おき

な御迎の人々まゐらぬやうやあるべき。御心のどかに思せ。からめづらしうおはしたなるに、のこりおほき御物語も、あまた侍なるを、山水のにごらぬながれの、都にかはあるおもむきも、御らんじて、おきながとしごろ思ひすまし侍る心をもくみしらせ給はゞ、かつ〳〵きこえさすべき世がたりも、侍り。なほ今しはとあながちにとゞむるもわりなく、心ぐるしうきゝ給ふ。（未完）

茶話指月集（二）

鶉巣子筆録

孤峰袴碌仙齋不羨

關　葦雄寄贈

ある時豐臣關白秀吉公、始て千宗易に臺子の茶湯仕べきよし仰出さる。そのころ辻玄哉といふものの古來の臺子をしる。宗易玄哉の所へ往て、古流をならひ、御殿においてつかふまつる。公上覽の後、われも昔臺子をならふ。汝が茶湯格にたがふところあり。奈とて尤られ、宗易古流は、そこ〳〵品おほく、おもはしからずげにより、略して仕候と申上る。公さては、其のならひしらざるにあらず、最におぼしめす。向後、茶に嗜るめん〳〵、宗易が、臺子見ならふべきよし仰出され、却て御感に預る。夫より千家古流を擱利休が當流相承し來ぬ。

不羨曰く、羽柴筑前守秀吉公は、戰國の世に有て、英雄豪傑の巨將にして、戰ふ毎に必勝たずと言事なく、例の御馬驗は千生瓢簞を用ひ玉ひ、一勝、毎に一箇を加ふ。則ち千の數に至れど言軍事劇烈の間に、優美高尚なる茶道を好み給ふは、此の猛將にして、又可く賞

可ニ感佩ニ一奇事なり。老予、凡慮の考より外に、必見る所ありしならん。底で、千の宗易は、利休居士の事なり。臺子の茶湯被ニ仰付ー然る以上は、豐太閤も御覽の上、御前にて相勤候は、茶道上より言時は、最重き大任なり。故に、先辻玄哉の所に往（但し辻玄哉と云人は、紹鷗門人なれ共、休居士より先輩則ち兄弟子なり）古流を習ひ候上、御殿に於て、居士畢生の力を盡し、技量の手前を入ニ御覽ー たりしに秀吉公上覽の後、上意には、我も昔臺子をならふ雖レ然、汝が茶湯格にたがふところあり、奈と御尤候を宗易謹で申上る樣、古流は御存付の通り、底々品おはくして、おもはしからず候により、考案を用ゐ大に發明仕如レ斯改良仕奉レ入ニ御覽ー候と、慇懃に言辭を盡して申上しかば、豐太閤、扨は利休、物其の物臺子の手前しらざるにあらず、大は御賞翫御讃成被レ遊、我も左樣不レ思歟なきにしも非ずと雖も、利休手前の如くすべしとは不レ思しに、休が臺子、實に我が意に叶ひ滿足に思食向後茶道を嗜む輩は、宗易が臺子見習ふべきよし仰を蒙り、御感に預りしは利休居士一身上にとりては其の光榮莫大の事にて、此の一事にても、茶道は、名人上手の又上に位して、數百年の後も、此の業技專門の家にして、修業勉勵すると雖も、此の人に並び立事も出來ざるは、非常の茶聖と歟、茶博士と歟云て、諺言にはあるざるべし。是よりして、居士は、秀吉公の寵遇を得るの基礎ならん。又青雲の志を惹起するの第一着手ならん。諸大名を始め、門弟子の增加せしも、爰に端を開くなるべし。茶道と云ものも、上

は王侯貴人、下は士庶人に至る迄、茶の道を樂み、茶技に據て、鑑識營繕築庭懷石の料理法迄、悉皆興益を隆盛ならしめ、諸流派も、居士より分脈し、支葉の流派も休居士より出ざればあるべからず。京都千家の家元は、休の末裔なり。茶道の門閥なり。指月第一の章話、註釋如レ斯。

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其十三）

白松園主人

前號の續きなるも、石魂錄の女性につきては、未だ亦長けれども、冗長に渉る嫌あれば、今省きつ、更に編を改めて説かむ、曲亭が女性に於て、一貫の主義とする處は、重きを儒教に置き、見解を女大學と等しうする事、今迄書き連ねたるにても、大方は知られぬべし。淨瑠璃の下劣なる世話物、淫靡なる浮世草紙、洒落本等の、さらでも陷溺し易き人情の弱點に乘じて、之を吹き之を煽ぎ、利をのみ貪るに汲々として、社會を擧げて腐敗の域に投せんとするに、深く鑑みるところあり、年々出す所の戯曲小説、忠貞義烈を旨として、事皆勸善懲惡非ざるはなく、憤を發し、筆を極めて、思想界の濁流を、既倒に回さんとせし微意と効力とは、彼の儒教者流が孔孟の請賣をする貴族文學よりは、平民間に於ける範圍の廣大なる事、明に認識するを得べし。嗚呼翁の筆力、百代の下に至るも猶凜乎として生氣ありといふべし。

曲亭が數多の著作中、比較的理想の貞婦多く、しかも短篇にして、首尾通徹せる者を、三七全傳南柯夢となす。市井坊間に傳ふるを取りて材料とし

ながら、忌むべきを去りて潤色し、明玉の微疵なきが如き、忠臣烈女の操行を激揚す。其の文の高尙婉曲にして、事態の哀れ深きなど、きり〴〵す鳴く秋のゆふべ、家庭團欒の讀本として、尤も美はしき者なるべし、吾人はたとひ小說の精神なりとも、情慾戀愛をのみ說きて得々とし、痴情發達の紹介を爲すに止まりて、毫も社會に益なきを取らず、此の種の作の如く、しらず〳〵讀者を德化せしむべき小說の、世に出でん事を望まずんば非ず。

今之が大畧を、かいつまみて云はゞ、永正の頃、大和奈良の領主、筒井順昭と云ふ者、楠を伐ると云ふに事起りて、赤根半六と云ふ樵夫圖らずも立身し、其の子半七と云ふ者と共に仕へ、筒井の老臣にとり入らんが爲めに、半七と結髮の女おさん(三勝)といふを殺して、老臣蟻松氏の女園花と云ふを娶らせぬ。されどもおさんは、人に救はれて舞妓となり、名を三勝と改めて花洛に在り、敢へて兩夫に見えず、節を守る事甚だ堅し。半七は、亦園花を娶ると雖も、父に辭して聞れざりし上の事なりければ、形式のみにて、實は夫妻の契を結ばず、園花が泣いて自ら去らんを待てり。一日園花間を伺ひて情を訴ふる事切なり。半七慰諭して實を告げ、その歸り去らん事を乞ひぬ。園花苦節遂に去らず。半七領主の命により京師に至り、ゆくりなくも三勝に遇ひぬ。依りて携へて跡を隱しぬ。但し之、故ある孤忠の心より出でたるにて、暫く潜みて眞理の光明の、おのづから顯はるゝを待てり。園花奈良に在りて、ほのかに之を聞き、悲みに堪へず遂に病に臥しぬ、されど一點の怨なく、一點の嫉妬なく、只其の父の激怒を恐れ、ひそかに人をして存問怠らず、舅半六に仕ふる事、

甚だ至れり。其の間猶別に忠臣あり惡棍あり。半七幾多の艱苦を甞め、勢窮まり自殺せんとせし時、積寃忽ち霽れて、身は青天白日の恩典に浴し、却りて心曲れりし、其の父半六、及び蟻松を始め、其の妻敷波さへ、恥ぢて自殺し、猶、且つ三勝は敷波の子にて（幼にして分れ）園花とは異父の姉妹なる事さへ發見したり。斯く慘狀を呈して止みたるは、畢竟半六は、祖先楠氏の臣にてありながら、民間に下るに及び、古主の名に負ふ楠を伐りたるより、かゝる祟咎に逢ひたるなり。但し、その子の至孝其の妻（輪篠）の陰徳によりて、子孫再び繁昌すと云ふに終れり。之より、其のあはれなる、狀態を批評解説し、併せて、其の文章に及ばんとす。其の發端の文に曰く

永正年中の事かとよ、奈良の都筒井順昭とかや云へる、やんごとなき人ゐまそがりけり、其先祖を尋ぬれば、佛門より出でゝ武家に交ひ、法筵清衆の四戒を棄てゝ、兵家闘戰の六具を事とし、建武の擾亂に、軍功拔群なりしかば、忽地に家を興し、大和半國を領してより累世武威を失はず、文を備へ武を備へたる家隷ども多かり、順昭かく家富み昌にて薪には桂を料り米には珠を料り、身に錦繡を襲ね口美味に餘りて只管閑雅の遊興に耽りぬ。

先づ、大和領主の、家系及び、人物を發表せり。此の編の主人公は、將に之によりて導き出されんとするなり。筒井順昭は、此くの如き暗將なれば、文武を奬勵するを忘れ、おふけなくも、足利義滿の金閣に倣ひて、新に茶亭を造らん事を企てぬ。されども、金閣第二重、潮音洞と稱する天井は、楠の一枚板をもて造られたれば、之を摸擬すべき良材いと得易からず。順昭頻りに焦燥てども、之を求むるに日數經たり。乃ち一日老黨を召集して之を議するに、一の老臣蟻松典膳列を出でゝ曰く、大和添上郡、米谷の山間即ち伊賀より通ふ順

路の處に、山の半腹より、街道を南の方へ木垂たる楠の大木あり。その枝東南へさし出でたる事、大約八九十丈に餘り、樹下常に闇うして、旅客晝も路に惑へり、若し此の楠を挽せ給はゞ、四面五七間の板となすべしと申しゝかば、順昭ふかく喜びて、乳母子なりける、厚倉二郎太夫の諫むるもを聞かでみづから之に赴きて、數多の樵夫を下知し、祟ありとて恐るゝを容ひず、伐り取らんとせしに、忽地神木の祟にあひて、樵夫等多く傷き失せしかば、さすがの順昭驚き恐れて、遂に中止斷念せり。時に之の樵夫の中に、赤根半六といふ者あり。此の者祖先は、楠正勝譜代恩顧の家隷なりしが、正勝千早の城を落ちて、十津川に漂流するに及び、大和なる親族をたよりて、城下郡佐保庄に、住家求めしより、今の半六に至りて既に五代久しく片山里に零落し、柴を賣りて活業とすれば、文學に疎き身も、朱買臣が青雲の志を羨み、いかにもして舊の武士にならばやと思ひながら、家貧しければなり出づるよすがもなし。然るに不思議に教ふる者ありて、いかなる大木なりとも、云々の薬をもて之を枯しさて、斧を入るゝ時は、之を伐るにいと易しといひしかば、半六いたくよろこびて、おのれ伐材の殊功を顯し、之の機を得て武士ともなるを得むと、即ち先づ事の由を妻子に告げぬ。其の妻子といふはいかなる者ぞ。

妻は其の名を輪篠と呼べるが、之れも由緒ある武士の浪人、何がしが女にて、はやくより孤となり、いくその艱苦に人となりたれば、物の哀をもよくしりて、心ざまの正しき事は、富めろかたにもたち勝り、夫を諫め子に教ふるなど、女子にはいと稀にて、一子半七も、今茲はや十才になりつ、この兒母にや似たりけん、その性の怜悧はさらなり、容止端正にて、ふり亂したるうなる髪も、何となく匂やかに、垢つきたる針目衣も、おのづからひなびず、柴賣の兒にはいとをしとて、親

いしきも疎きも、ほめざるはなかりけり。

馬琴は筆を起すに、必ず零落見るに堪へぬ卑賤の者にとり、而して、其の祖先を歴史上知名の士に借るを以て常となせり。之一は彼が主義とせる道義を描く上につけて、善悪邪正の偶然ならざるを説くに都合よからしめ、一は讀者の好奇心を買ひて、同情をひくに易からしめんが爲なり。

さて輪篠は、夫が楠を伐らんとするよしを聞きて、憂慮に堪へざりき。即ち諫めて云ふやう、

輪篠しばし深念して、いふやう領主の威勢をもて、伐ることさかなはざるを、おぼつかなき言をたのみて、爲損じ給はゞ、世のものわらひとなるのみならず罪得がましきわざならずや。又爲課給ふとも、その祟あらんには、わが身はさらなり、半七がゆくすゑも不憫なり、又祟なきにもせよ、先祖は楠殿に仕へて、譜代相傳の家隷なりしと、日ごろいひ出で給ひながら、心きたなく榮利を計りて、さすがに古主の名にし負ふ、楠を伐り給はんは、名詮自性の理とやらん、末榮ゆべうもおもはれず、智恵才覺にも及びがたきは、世の人の貧福なりと思ひ絶ね、時を待ち給はんこそ、遙に心安からめ、まげて思ひとゞまり給へ、……

さしも賢く諫めたるを、半六は一言の下に退けて、天の與ふるを取らざれば、却りて禍を受くと云へり。楠を古主の名氏なりとて伐らざるは、久米氏に仕ふる人の、米を食はずといふに等しと説破して、且いふやう、

かく云ふも、わが身ひとつの爲にはあらず、御身こゝにふめりてより、既にあまたの春秋は經れど、身には襤褸日には糧、それを惱しとし思ふ氣色も見せ給はれど、わが子ながら人なみは、勝れたる半七を、世にもしられぬ深山木と、なしはてん事いとをしからずや、女伶悧て牛賣そこなふといふなる、かゝらん節は御身が知るべきにあらず、何事も打まかせ給へ。……

半六は竟に聞かざりき。即ち次の日老臣蟻松典膳を訪ひ、之を告げて、由を領主に聞えあげ、其の許を得て、楠の伐材に着手しぬ。即ち草紙の地は

之を評して曰く

げにや信言美ならず、美言信ならず、恩なるは其藥の苦きを惜み才ある者亦人美諫をこばむこと多し、輪篠は日頃より、思ふ事なば思ふが如く、よくも悪しくもなし果つる、夫を今も諫めかねて、神に露漏る言の葉も、たらはぬこの身さばかりに、しひては再び云はざりけり。

（以下次號）

歌の調（中）

清瀨元太郎

基俊卿の更科記に『歌は詠むことの難きにあらず善く詠むことの難きなり』としるされたるも、其の說明を玩味すれば調の大切なるを道破せられしに外ならず候、香川景樹翁の家訓に『和歌は理るものにあらず、調ぶるものなり』とあるは、即ち調と想との輕重を論せられしものにて、實に名言に有之候。縣居の翁が萬葉を尊重して、終に摸倣の歌をさへ詠まれしも、其の調の崇高にして、殆ど人爲を離れたるを喜ばれしにて候、桂園翁は縣居の翁と大に意見を異にし、萬葉崇拜の度に於ても、非常の懸隔ありしに拘らず、調に自然のと人爲のとあり、而して、自然に出でたるは、自ら高雅にして、種々の想を搆へて、殊更一ト節をかしからんと詠みいでしものは、却て、感薄し。即ち、想を主としたるは、其の調がたくなりて、自然の調にまかせたるは、誠實、其の內に籠りて人を感動せしむ。古來目に見えぬ鬼神をも動かすてふ名歌は、必ず此の中にありと謂へるは、二つながら符節を合したるが如くに候、內山眞弓が東塢遺言抄に『歌は見るもの聞くものをいふにはあらず、見るもの聞くものによりて思を述ぶるものなり。されば調べみて、調はざるは、云ふべからず。これをいへぬ事なきと思へるは違へり、さる

は成らざるにして、捨て置くべきなり云々』と記しゝは、如何なる妙想も調はざる時は、之を捨てよと云ひしにて、調の殆ど絶對に重んずべきを說破せしものに有之候。

されば全豹を十分に詠み負せたらんも、僅に、其の一斑をのみ詠せしも、巧拙は調の上にありて、量には無之候。『躬恒の「住の江の松を秋風吹くからに聲うちそふる沖の白浪」かくの如きさはやかなる調は貫之にもなし誠に古今の一人なり。さて此の歌は、住吉の總ての景色をいはずして、松風の爽かなるに、浪の音の、さら〳〵打合ふ勝れて感ある所のみを取りたり。又經信朝臣の「沖の風吹きにけらしな住の江の松のしづ枝をあらふ白浪」これは、景色を十分にいひ負せたるなり。されど、其の調さはやかならずして感少し。經信朝臣この歌を自負して、常に吟じくらべ見られしが漸く我が歌の逆に劣りて及ばざることを知り給ひぬ』と、これ同じ東塢遺言抄の一節に有之候、かくの如く、論じ來れば、自然の結果として、調とは、如何なるものぞやなる疑問を生ずべく候、されど、調とは、別段解釋を試むる程のことには無之、其の歌自然に具はるべき姿にて、花は花らしく、雪は雪らしく、長閑なる景色は、其の調子もおのづと長閑なるべく、さやかなるは、姿もさはやかに詠むべく、之れ即ち調に候、併しながら、『自然に具はる』と云ふ語に無限の意味あり。譬へば、目出度ことは、語る聲音も、おのづと喜ばしく、悲きことは、其の調子、自然に沈みて聞こゆる如く、此の段に至りては、擅に技巧を加ふべからず。所謂神秘力の指導に任すより外無之候桂園翁が、信濃人たすくが詠草に記るされたる奥書に、左の一節を見出し候『調と申すこと六づ

かしく思ひ給ふことには、更に侍らず、其の調の稽古は、二三歳より、誰も〳〵習ひ熟して、露も聞きまどふべきものに侍らず。譬へば、今人ありて、百萬の黄金まゐらすべしと僞に云ふとも、足下更にうけがはじ、其の調僞なればなり。又眞實に百金を與へんと思ふ人の足下へは、一文もやること叶はずと云ふとも、終に呉るゝべしとはかり知るべし。そは與ふべき調なればなり。されば、やると云ひやらぬと云ふは、言葉にて詮なきものなり。其の眞僞は語脉語勢にて聞き知るなり。之を調を知ると云ふ。因りて櫻といはずとも、櫻くさくば櫻なり。其の理に櫻といふ文字一首に五ッ六ッ詠み入れたりとも櫻めかぬは、更に櫻の歌とは云ひ難し云々』と説明すれば、大方かくの如きものに候。八田知紀が雑記に『ある時冬獸とかいへる題にて「小夜深く大路をわたることひ牛の云々」と云ふ歌を詠み出でたるに、師は、この初句、いと惡ろし、さばかり恐ろしき獸の上をいはんに、小夜深くなどやさばみたる言葉を使ふべきものかは。之は譬へば、夜中に女の聲して、外より案内するを門をひきあけて見たらんに、いとむくつけき、男の大聲にて、某なりと名のりいでたらん樣にて、思ひの外なる心地すべきに同じとて、笑ひ給へり』とあるは強くあるべき調を柔くせし非難に候はずや。

あまり多く桂園を引き候へば、我が何やらん癖ある所あるに似たれども、抑々調の歌に於ける第一要求なる事を道破し、あらゆる方面より、之が詳密なる説明を試みて、後進子弟を鼓吹せしは、我が國に歌の批判なるものありて、以來、此の翁に如く者なければ、自然と翁の言葉を引證するの

止むを得ざる次第に有之候。

おもひのまゝの記

安藤晴晨

(二)百人一首に對する外人の論評

外人が、常に孜々として、東邦の文物に留意し、着々研究の歩を進めて、倦まざるは、吾人の嘆稱する所、其の研究の態度、其の考察の方法の如き、自吾が國、從來の學者と異なるが爲、前人の未言ひ及ばざりし所論の、往々、其の筆に上ることあり。殊に廬山を出て丶後、始めて全山の面目を知り得るが如く、局外よりの觀察が、なか〳〵に正鵠を得たるあり。兎にも角にも、外人の論評の吾人に資するある事蓋少々にはあらざるなり。

近刊の日本亞細亞協會、報告中、マッカウレー教授の百人一首に關する一論文あり。今其の所論の一二節を譯載して、讀者にその大要を示さむとす。氏は、先說きて曰はく、日本の歌は、世界の文學の一部として、見る時は、他に關聯を有せず、他に類例を見ざるものにして、その起源は、有史以前にあり。その形式と內容とは、特種のものにして、而も其は、始めて、文字に記されたる時、既に、實際に定められたる者なり。而して、その最すぐれて、發達したりしは、殆ど一千年以前の事なりき。現今にありては、日本人民が、長き、鎖港の夢よりさめて、外人に接し、科學、及、その他の精神的方面に於て、著き進步をなせるが如く、日本の歌も、亦同じき刺激を受けて發達しうべきもののやうにも思はるれど、今の所にては、將來如何なる著き發達あらむとの徵候をも、殆

認め難し。されば、日本の歌を研究せむとする者は、幾世紀の古に遡り、日本帝國が、世界の諸國民相關係せざりしが如く、世界の文學を離れて孤立したりし文學界に身を投せざるべからず』云々

次に、氏は、日本の歌を研究するには、先百人一首を採るをよしとする由を述べていはゞ「此の集は此の人民の、他に比類なき歌の特質たる所をあらはせるものとみなし得べし。此は最大なる和歌集にあらず。他の家集の如く勅選に成りしものにもあらず。また人をして一時は和歌の將來に望をかけしめし彼の長歌を含み居るにもあらず、されど此の集中にある短歌は、百人の作家の作より選ばれたりしものにして、その最秀逸といはるゝ者の多數を集めたるなり。凡て、これらの歌は、その形、及、主題に於て、各著き所あり。且、これらの中の大方は、所謂、古文辭の時代に出でしものなり。而して、また其の價値は、全く如何にともあれ、是等の歌は、骨牌戯の形にて、久しきより、廣く日本の家庭に行はれ、今も、猶、その流行を見る。而して、男も、女も、小兒も、皆幾度も、幾度も、これを弄びて、歌の語句思想を繰返すなり。簡單にいへば、この和歌集は和歌を研究するに都合よきものはあらざるべし。蓋通常の觀察者にとりては、此の集の示す所、日本の和歌の特質を知るに足るべく、歐米の讀者の爲には、此の集は、日本人民の最好める詩的製作物及、愉快は、如何なるものなるかをよくあらはすものなるべければなり。」云々

次で氏は、和歌の發展の有樣選集の代々に行はれたりし模樣をのべて後、百人一首の選者に關する論議、歌がるたの起源に就きての說明等を詳述

し、次に、百人一首の作者の時代は、大方は、宮廷生活の華麗に赴きし頃なれば、讀者は、先その狀態を知了せざる可らずとて、奈良平安兩朝に於ける宮人朝臣の狀況を描寫せり。而して、また氏は總体の上より、この集を觀察して曰はく、「今この集を見わたすに、これらの歌は、その主題によりて、區別すれば、三部に分ち得べし。第一は天然、即、外界の景色に對しての幽思、及、その記述、第二は感情、即、憂鬱、悲哀、悔恨同情、滿足、友愛、孝、忠等の如きやさしき人情に伴ひたる情、第三、是は人情の最深奥なる部分に屬すべきものなるが、特に注意せらるべき値あるもの、即、戀情よりいでるものなり。實に、戀歌は、日本人の一の特質ともいふべし。此の集中にても四十六首の短歌、即、殆半數は、此の戀情をうたへるものなり。而して、他の通常の感情をうたるへものは、二十九首、天然の風光を詠めるものは、二十六首あり。されど、すべてこれらの歌は、それ〳〵の人が各その自經驗せる所をうつし出せるものなりと思ふ可らず。多くのものは、歌合の爲、またはその機巧をあらはさむが爲に造りいでたりしものにして、それらが、たゞ作者の想像にゑがき出したりし空想の外には、一の基礎をも有せざるものなりしことは、めづらしからぬなり」。云々

斯くて氏は、尙、一々、其の英譯をも添へて、說明せり。

おしなべて、氏の陳べたる所は、特にとりいでゝいふべき程の意見にも論評にもあらねど、たゞ、外人にして、斯くの如く研究論評をなしたる人ある事を讀者に示し得ば足るのみ。

叡運法師の月十首を讀む

讃岐　小西甚之助

あたりをゆく月の光に、雲の水尾の海紫ゆかりゆかしき、藤村叡運法師の月十首。言の葉月の難波の月、千里に影を分つなる、新ぶみのかすかにふりて、鄙の藁屋の我が軒にもさやけき光のさしくるぞ、いひ知らずうれしかりける。「立さわく心の雲もかゝらねば月はさやけし山住の庵」を先づ山家の月を讀み出でたる。隈なき高嶺の月と、曇なき心の鏡と、うつしつゝ、うつされつゝ、かたみに照らしあひて、柴の戸まもる松の名の、蟲の音澄めるさ夜中のさやけき、蓬生の葉蔭に結ぶさゝかにの、蜘の絲筋なほかぞへられけん。「わらむしろ軒端にしきて濁酒月に酌む夜や樂しかるらん」と田家の月を咏ぜる、絢ひかけし縄、擣ち棄てし砧あたり近う取散され、垣根に寄せし里芋の莖、うちたばねたる中隔なければ、笑ひつ語りつ、妹と脊と酌み交はす盃の月、盛れる濁酒もすみ返りて、うれしさは、四つの袂に餘まるらん。「山寺の月は靜けく更にけりしゝまの鐘を今やつくらん」これぞ僧家の月。よみ人の法の心機もほの見えて西峯高塔の頂を超ゆる眞如の月、尾上も麓も靜けさまさりて、方丈圓窓のもと、松下巖上、苔ころもに、落つる露の音、なほさやかにも聽きとめつらん。「窓にさす月光に書よめば螢も雪もたのまさりけり」これ儒家の月にて螢籠かけにし跡の軒端掠むる月影に、雪かきつめし庭の砌、寒けきばかり霜の色して、窓の呉竹文机のうへに、おのづからなる介字ぞ寫しつらめと推し量られつ。「執なるゝ筆の林は隈なくて硯の海に月は浮べる」書家の月は、濱の眞砂のしら紙の上に、落ちくる文

字の雁の幾つら。これさながら、跡もさやかにみゐ寺の月觀の臺に眺めやる、堅田あたりのけしきならまし。「琴ならば筆に光をとり添へて今宵はうつせ月の名所」畫家の月は、須磨琴の妙なる響ともろともに、浦わを辿る筆の跡、いと鮮らけく、かなづる絲そよりくる浪打際より、遠く繪島をかけし月景色や、うつし出づらんと思はるゝも淸けし。「あき人は黄金の花にかへかねて、月の憐れをよそに見るらん」商家の月。げに憐れを知らぬ習とて、月に名だゝる難波津にも、屋根の上なる影をだに見るもの稀なりときけば、舟のうちはた橋の上に、こがねの波のよどみなき、淀の川つら愛ではやさんこと、中〳〵にかたからんわざなめり。「諸ともにけふの海幸はこりあひて月に網干す蜑が家村」この漁家の月こそ、漁村のさま、あさり得てなかしけれ。網の目洩るゝ月影に、磯ばたの「くらげ」くらからす、夜光の珠ときらめきあひ月に磨ける簀の太刀魚、鋭とき光はしたゝりて、蜑か衣をまた濡すらん。「かたはらに子等を寢させて絲車月にめくらす賤やわびしき」あはれ、貧家の月、端居にわたるさ夜風に、半離れし壁張の反古ゆらけるも、縫る子の夢うちおほはん繿縷は浮く、させてふ蟲の物うげに、めくらす車に聲ひき添ふるさま、吾がまのもとに落ちくるぞ悲しき。「川竹の流をうしと袖の露おきて月見るうかれめや誰」またこそ哀れ娼家の月をばしまにみそらの月はさえ、心の闇路照らさん由なく、ぬば玉の黑板垣に圍まるゝ庭の池邊の女郎花、しをるゝ姿うつし見る水の光の射返しに、いとゞ胸をやつらぬくらん。我が袖たま露に重りぬ。

やまとめぐり（承前）

井上頼文

さしてゆくかさゝぎ山の紅葉ばにたびの衣も色かへてけり

なづみゆく木の間に見ゆる紅は峯の紅葉のしをりなるらむ。此らも旅の興とやいはむ。さて宿をたちいでゝ、御社の方にとむかふながめやれば、満山、只紅にうづもれて、常磐の木々もみえわかぬに中をたちて、三百十餘の石階ぞ聳ちたる。登りゆく人の姿を、錦きてと覺ゆるに、紅葉が洞の下かげに、酒くみかはす若人の一むれ、顔の赤らめるは、梢の色のうつれるにや。はた酔ひてにや。げに、この紅葉の、いみじうてりわたれるに、神社は、すべて丹塗なれば、殊に目もさむるやうなり。まして十三重の塔は、高く紅をうがてるを。さて鳥居の前にて、修祓す。榊なければとて、泉館の君、紅葉の枝もてはらへす（評、紅葉の枝、時にとりて面白し、鹽の多かりしも、亦一しほの興）御鹽は、御知和君なり。しほをいみじうふりかけたれば、諸人の襟ともいはず、耳ともいはず亂れ入りて、白き物のつきたる、寒からでふる雪ともいひ難くや。阿知和の君のほこらしげに、打ちいでたるをきくに、

常磐なる色ならねどももみぢばのあかき心を神やめづらむといとおかし。さて石階を登りてをろがみまつる。

蘇我山の嵐しづめて藤波のさかえ久しき神の御いさをなど聞えあぐ。社務所にゆきて、寶物拜観を願ふに、こなたへと案内せらるればゆく。其の寶物といふものは、大凡左の如し。

中將姫の筆といふ、法華經八の巻

童子鐘　細帛

信貴山、願俊作の笙
光明皇后の筆なる、普賢經一卷
金岡のかきたる、聖德太子傳圖
狩野光信の、新緣起

此の他、武具、樂器の類、いと多かりしかど、一一記す暇なかりき。中に雲慶の作りし狛犬あり。こは寶物によれりとかいふ。頭つき足つき、其のさま、すべて普通のと異りたり。こゝをたちいでゝゆくに、奄羅樹といふ樹あり。この樹は、天竺よりうつせるものなりとぞ。大鏡に奄羅といふ樹は、花はしげゝれど、實を結ぶことはかたしとこそはとき給ふなれとあるは、この樹なり。塔の側より西門にいでゝ下る。遙に見渡せど、山々遠く連りて、限りもしられず。かなたこなたの山本に、かれこれ家居もみゆ。黄金の浪よせし八束の足穂も刈り終へたればにや。田畑は黒く、打ち渡されたるに、蜘蛛手の如く、白く流るゝは、小河なるべし。談山より下る事、十八町、道けはしく、坂急にして、足をとゞむべくもあらず。ひた下りに、下り、足をいたむる程なるに、ふみしむる勢、頭にひゞきて、いよゝたへがたし。うねり〳〵て下れる所に、茶屋あり。一杯の水を甘露とさけび、いざやとてゆくに、かたへに、鎭守めきたる物見ゆ。何神を祀れるにかと思へば、これなん、高市郡、高市村、大字、上にしづまります、式內、氣津和既神社なりける。あないたまし。宮居も、今はあれはてゝ、雨漏る軒には、霜も置くらむ。風もる戶ぼそには、月もさし入るらむ。御前の、眞澄鏡は、影失せて、光もなく、八桑枝に榮えて榊は枯れて、紅葉のみ、ぬさとぞ散りかふめる。

（評、無限の感慨）

千早ぶる神のいがきはあれはてゝ秋ふけにけり氣津和既の宮。畝傍の山は、いと遥に見えて、前途ほど遠し。日は、すでに三時をすぎぬ。かへり見れば、談山、いよ／＼高し。田畑などの間を遊きて、島の莊をすぎ、岡村に至る。村の中程より右に折れて、岡寺にいたる。疲れたる足にてつゞら折なる坂を登る。いとくるし。さて、この寺は、東光山、龍蓋寺といふ。岡寺とは、其の一名なり。天智天皇の二年建立したまへる所にて、古より、人身二十五度の厄を除くる、觀世音とて、あがめまつる由なり。そのかみ、孝謙天皇も行幸ありて、落慶の式をあげさせ給ひしほどの寺なれば、いかばかりきらびやかなりけむ。庭前の露は、瑠璃の光を放ち、軒端には紫雲たなひきけんを、今は佛の光もあせて、草葉に露はやどれども昔のあとゝぶらはむよしもなく、破れたる軒は、蜘蛛の巣にけがされて、すぎし世のあとはうづもれはてたり。祇園精舍の鐘の聲、諸行無常とひゞき、沙羅双樹の花の色、盛者必衰を示す世の中。はかなき浮世とはいひながら、佛の衰ふるは、これ當然の事なりかし。(評この一轉語最よし)この寺を、岡寺としも言ふ事は、舒明天皇の、岡本の宮趾なればなり。さてこゝを下りて、田の畦を傳へて、飛鳥神社にまうづ。この社は、式内の大社にませり。催馬樂に

飛鳥井にやどりはすべしかげもよしみもひもさむしみまくさまよしとある、飛鳥井は、この社の鳥居の側にあり。今は水もなく、たゞ其の跡のみ草に蔽はれたり。鳥居を入りてゆくに、御神竹、釣竿とたて札したる、一むらの竹あり、いとめづらかなり。又えびす石と稱ふる石あり。形の似かよひたればなるべし。さて内宮といへるにまう

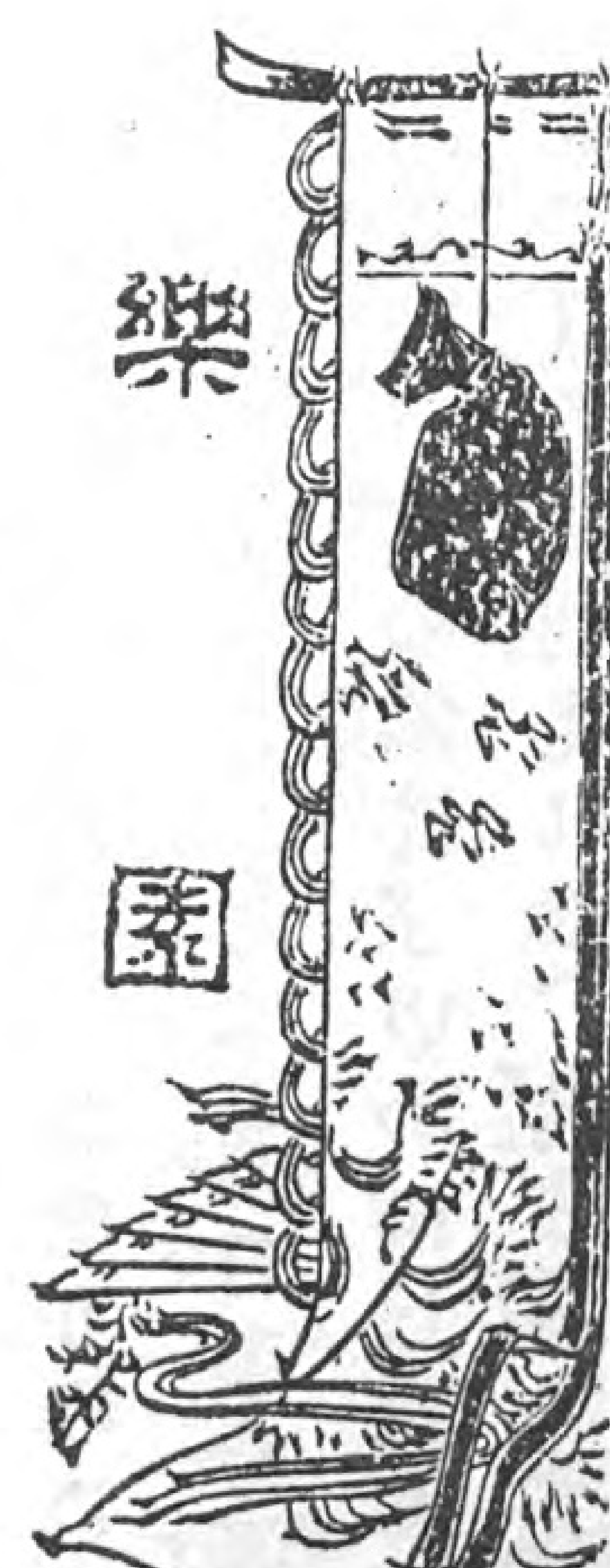
づ。この所には、事代主神、高照光神、建御名方神、下照姫命四坐を合せ祭る。中の宮は、素盞嗚尊大巳貴神、二柱を、外宮は、天照大神、豊受大神をいつき祭れり。末社、八十ありて、皆境内におはせり。同じさまなる御社の立ちならびますこれなり。まうでをへて、橘寺にいそぐ。日はや暮れて、暮色稲葉にたゞよへり。たはぶれてよめる

日はくれぬあすかの里はたちいでぬ今宵いつこに宿はからまし。

橘寺は、佛頭山、上宮院、菩提寺といふ。橘寺とは、其の一名なり。橘村にあり。上宮太子の建立せられしなれば、上宮院とはいへるにや。橘の宮の舊跡なれど、橘寺とはおはせけむ。水鏡、推古天皇の條に、此の寺に、かゝれる事あれど、くだくだしくもあり、かつは要なければはぶきつ。門の右の方に橘あり。櫻あり。それも日暮れたれば、おぼろげなりさてひたいそぎにいそぐほどに、いつしか本道を見失ひたりけむ。山のはざま、田畑の間をよぎりて、足を早むるほどに、やう〳〵本道にいでたり。燈火もなく、闇にたどりて、おぼつかなけれど、道行く人に尋ね〳〵て、やう〳〵平田村なる、欽明天皇の御陵を拜せり。此の御陵は、俗に梅山とよぶとぞ。石の玉垣、いとおごそかにて、夜目にもしるき白眞砂きよらなり。委しきさまは、暗ければ見えず。殘り惜しき事なり（評、殘り惜しかりしは、げにこのあたり）さて、此の陵より右に行くこと一町ばかりの畑の中に、皇極、孝徳兩天皇の御生母、吉備姫命の御墓あり。さまで大きからず、御墓の左右に、石人三つ四つならびたり。猶闇をたづねつゝ、久米に至り、久米寺を左に見てゆく。道、三すぢある所に出でたり。いづれにかゆかむ。いづれをかたどらむ。おぼつかなきまゝ、杖をたふしてうらどふに中なる方を

さしつ。さらばとてゆくに、げに畝傍村にいでたり。橿原神宮の入口にて修祓をなし、夜もふけたれば、遙拜し奉りて、天皇陛下萬歳を三度唱へぬ。けふは天長節なればなりけり。畝火山のかたはらを過ぎ、八丁の道をよぎりて、御陵前にいたり、福本彌三郎方にやどりぬ。時に午後八時頃なりき。げに、この宿よ。いともあやしげなる家にて、ゆあみするに、据風呂といふもの丶朽ちたるやうなりしなど、いとあさましかりき。今夜御陵の松風枕にひゞけり。さめやすき夢は、いづこをかさまよふらむ。





しのぶ旅路（一）

永潜生

はしがき

去るものは日に疎しとは、誰が云ひたりけん。故るとを忍ぶこゝろは、引き延ばされしゴムのそれならで、相隔たゝると愈々遠くして、相思ふと益々切なるものにはあらずや。三年前に物せしこのしのぶ旅路よ、數ならぬ路芝の、もとより春花の優れたる匂もなく、秋艸のめでたき姿もなくれど、風清く月明らかがさけふ此頃、さすが人知れず袂を濕す白露の宿らでや、あはれ

風聲月色、秋は昔の秋ながら、慈親の鬢邊霜漸く白く、亡魂の祭亦七度を重ねんとす。夜雨靑燈獨之に對すれば、萬感露と共に滋く、惆悵の情すぞろ抑ゆべからざる者あり。頃日同鄕の友人川崎氏を訪ひ、談偶々佛通寺のことに及ぶや、しのぶ旅路の愈しのびがたくてなん。かくはものし侍りつるも、一つは懷舊の流を立ち切りて、おもひの胸をやすめ、一つは鄕國の美はしき一ふしをも、世に告げんとてなり。

おのれ、佛通寺（安藝國豐田郡にあり）の勝をも探らばやと思ひ立ちしは、徃ぬる廿八年の夏にてぞある。さるをえしもなしはてずて、今日まで止みにしは、そも故なくてやは。小指をりつゝ、數ふれば、二たとせ前葉月六日のことなりけり。いつかはと思ひしこの景色も明日は、いよ／＼踏まれつべしなど悅びいさみて、草鞋も打たせつ餉もとゝなへなどして、夜明けぬまに出で立つべしとて、早く寢ねつ。更たる頃、家の中いと明かるきに急ぎ起き出づ。父君も、母君も、はやおましぬ。本家なる伯父君も來合せ玉ひぬ。こは故なくてやはと、とゞろく胸打しづめて、側へにかしこまる。伯父君は語なくて、一封の電報を渡し玉ひぬ。眼すりつゝ繰り返し讀む。天城なる叔母君俄かに病さし起りて、はや危篤に迫まれり。今夜すぐさず見舞の人遣らばやなど父君はの給ふ。母君の驚き給ふこと一方ならず。かれこれ云ひのゝしる程明けやすき夏の夜は、やう／＼にしらみ行きて、しのゝめの雲たえ／＼に棚引く頃ほひ、二度の電音は、終に訃を齎らせり。あまりのことに、涙さへ出でず。夢心地のうちに、忌日など過しつ。あはれ其の草鞋、其の餉は、いかにしたりけん。我は知らず、只心に刻まれて、歲と共に、新なる

ものは、叔母君を悼む切なる情あるのみ。かくてこたびの企ては、涙もて流がされつ。

去年の夏は都なる伯父君の下り給ひて、こゝかしこに随ひありきし中に、休みも終へたれば、今年の休みには、是非にと心構へして居たるに、去る二日には、矢掛なる弟も來合せたれど、折こそよけれ、明日は出で立んとて、調度など何くれとなく揃へつ。さるにても、先つとしは、など叔母君のこと思ひ出でゝ、昔を忍びつゝ、夕餉を終はりたるに、怪しうぞ、大鐘打たゝく。すは火事ぞと云ふ程もあらず、大空は一面紅となりて、人々の馳せ違ふさまあはたゝし。火は、我が松阪従兄の煉瓦製造所を燔きつゝあるなり。取るものもとりあへずかけつく。折ふし風なぎ渡りたるため、思ひしよりも、早く鎮まりたれど、明日の旅はゆくべくもあらずなりぬ。あはれ、こたびの企も、火にて燔きつくさるべきか、さあれ一度思ひ立ちたること空しくてやみなんも、いと言ひ甲斐なし。且つは打つゞきたる暑さも、先つ日の雨にて、大方あらひつくされたるを、いつまでかくてたふべしやとて、去る廿九日いで立つことにきはめつ。さてもいかに障多かりしことよ。雪に堪へて、梅の花かをりよしを云へば、いかに樂み多き旅路なるべきにか。

八月二十九日

短かき夢を父君にさまされつ。出で立ちし頃は在明月、やう〳〵山の端にしづみて、曉の鶏も、まだ鳴きやらず。

あかつきの鶏なかずともよし明らけくをさまる
御世に關路なければ

青鞋三寸の身のかるさ、天つ空をもかけりつべし。すゞやかなる風の吹くなべに、植ゑ渡したる

稲のさは〳〵と、さはたちて葉のばる露のゆらくさまなど、えも云はずこゝちよし。

千町田にうゑわたしたるわせの色に瑞穂の秋は見えそめにけり

小吹山を超えて、小泉堤に向ふ頂につきし頃、夜は、ほの〳〵と明けはなれたれど、空は、いたく曇りて一つ二つ雨さへ降る。さても涙に流され、火にやかれむとせしけふの旅は、又も雨にてぬらさるべきか。よし降らばふれ、思ひ立ちたることと、いかで止みてんやなど、踏みけびつゝ行く程に雲は、やう〳〵に薄くなりゆきて、日の光さへさす。嬉しさ云はん方なし。小吹の谷は、嘗て我が祖父君の開墾せばやと、公に願ひ玉ひしこともありしよし、けふまのあたり打ち開かれたる良き田あまた見つゝ行につけても、祖父君の故事など忍ぶ。このあたり、女郎花いと盛りなり。かひなくあだの名を立てなんとも、一夜を明かさまほしき心地す。

かへり路ならば折らましものを女郎花

長き小泉の堤も、はや半ばはゆきつくして、米山寺への道を問ふに、末廣學校の裏手より、登り玉へと、教へらるゝまゝ、堤を折りてゆくに、白き壁のきはやかなる一構見ゆ。末廣の小學校は、これにやあらむ。かく天ざかる鄙に到るまでも、往くとして學校の設けあらざるなきは、ひとへに、此の大御代の御恵みならんかし。かくてぞ、御國の末はひろからめなど、父君のゝ給ふも、例の教の道に切なるおほんこゝろよりとぞ覺えし。

此のあたりとある山畠の上に築地めいたるめぐらした所あり。げに覺ゆるまゝ尋ぬ。小早川氏の墓なりと云ふに、扨てはとて馳せ登る。方三間許の中に塔の形せる碑を据ゑ、前に建石ありて、末弘

平朋平と誌るされ、後の方には、五百回忌の卒搭婆たてられたり。落葉路を埋めて、靑苔滑かに秋色は已に、之の古墳に在り。

　古墓にしだれ櫻の落ち葉かな

こゝを下りて再び學校の裏手より登ること七八丁米山寺の門は、已に脚下にあり。

旅のらくがき

明治三十二年熊本の旅舍にて　深山庵主人

（二）人の命名の所によりて異ると

千早ぶる神の創めし御國の中に生を受けたる靑人草の數は、四千余萬とさへ云ふに、稀には、同じ姓同じ名のなきにはあらねど、大方は、其の顔貌の異れるが如く、已がじゝ好み／＼の名を持つてそ不思議にも、亦、面白けれ。そがうちに少しく、注意を加ふれば、命名の法にもおのづから國ところによりて、特別なる風習あるを見出すべし。女に、梅竹寅熊など、植物動物に因める二字、名男には右衛門、左衛門兵衛、何吉、何二郎、三郎などは、出羽奥州の果より、不知火の筑紫の隅々まで、異はれるとなけれど、土地によりては、其の間に忌み嫌ひあると譬へば、京阪にては、便器の名なる、おマルと云ふ名の、東國にては、平然として行はれ、東國にて、醜女の異名なる、おカメと云ふ名の關西にては、目出たき名としても囃やさるゝが如し。近き頃は、交通の便開けて、胸狹き地方などいふ念慮の次第に薄らがんとする傾きあれば、一概にはいはれざれども、京阪附近と、其より東には、女子はタマ、キク、ハナ、など二字名多く、中國の西半部、即ち、廣島縣鳥取縣より、西の方には、ミツヨ、キクノ、ハナヨなど、

三字名の多きといちゞるき事實にぞある。九州の西海岸長崎の附近、島原天草熊本縣の沿海地方には、女の名、實に奇かしきが多きなかに、壽龜、壽登、壽乃などの如く、壽の字を冠せる名いと多し。龜喜、恒喜、或は、爲記辰記など名の下に、記、若くは、喜をつくるは、熊本福岡邊に多く、何熊何馬は、豐筑肥後薩摩一般なり。我が可笑しと思ひしは、熊本に何傳と云ふ名の少なからぬとなり。津傳與傳嘉傳など如何に語呂の面白きや。而して、多くは、皆士族なるが、通名も、矢張六ッかしき稱へなく、ツデン、カデンと呼び居るなり。寅槌龜槌など云へは、廣島の人かと言葉かはさぬ前より推せらるゝ如く、槌と云ふ名は、廣島に特有なり。其の外に、何登何曽など云ふも、他には見ずして、廣島にては、屢出で逢ふ名なり。何時の世、何時なる人のつけ初めて、習ひとはなりけん。さても怪しきものは、所所の風習なりかし。

石中の蝦蟇

山岡螢雪

嗚呼、社界は、千變萬化、實に奇妙な者であるとは、誰も皆云ふ處の、所謂陳腐なる言葉であるが、陳腐だからつて、特更に、斬新なる、奇言を綴り出すにも及ばん話で、兎に角、世の中は奇妙など云ふより、簡にして、意味深長の適語を、見出さない。先づ、動物界中を見渡せば、地上に、水中に、土中に、或は體中にも、植物中にも、生活しつゝあるは、吾等黄吻兒の云ふまでもなく、既に、貴孃がたの知らるゝ處であるが、固形體中にも、尚、能く生活し得る、動物のあるに至りて

は、造化の神の技倆も、今更の如く思ひやられ、實に不可思議千萬である。

今は昔、靈元の御代、天和三年、西暦一千六百八十三年に、佛の學者ブロンデル氏が、或盛夏の頃日午の暑を消さんとて、瀛々たる大洋を吹き渡る、潮風を浴びつゝ、海邊を逍遙せるをり、はからず石をわりて、食し得べき牡蠣を得たと云ふ事實を、ソーロンの中學に於て、談話せられた事があつた。

素より、奇を好む歐人の事なれば、傳へ聞くもの、吾も〳〵と鐵槌を携へて、海邊に至り、往々獲たと云ふ事が、當時の新紙上にも、仰々しくのせられた。夫から凡、百八十年の後、今名を忘れたが、或る新聞記者が、彼のスクータリの對岸に、殆、九十萬に近き人口を有し、黑海より地中海に通ずる、水路の咽喉を扼し、優に、西亞、東歐を控制するに足る、往古の羅馬帝國の首府、即ち、オトマン帝京、コンスタンチノープルに旅行したる際、ダクタイルスと名づけし、細微なる小動物を、含有し居る石を見出したと、其の國在留の佛國公使チコーラフエー氏を、保證に擧げて、同記者が紀行文中に、記載したことがあつた。

夫から慥、一世紀も經過した後だと思ふが、獨のボールシールなる石坑にて、工夫等大いなる石を擊ち碎きたるに、不思議や一疋の蝦蟇が、石中より產出したのである、此の蝦蟇は、普通のものと形に於て、相違はないが、唯、色が灰色よりは少し濃黑、背部に小さき斑點があつて、腹部は背より白く、目は小さくて圓く、而して、目の玉にかぶさる薄き膜の下より、靑白く實に美麗なる、金色の光を放つばかりである。試に、棒を以て、其の頭を推せば、眠るが如くに目を閉ぢ、棒を取り

除れば徐々と眼を開くも、自由に他へ移ることと出來ず、又、口は黄色の膜を以て、閉塞せられ、如何にして、今迄生活し得たかも、推計る事が出來ん。

工夫の一人戯れ、其の背を壓したるに、力の强かりしか、將た多量の空氣に接したる爲めであつたか、淸淨なる少量の水を吐き出して、餘り苦みもせず、終に絶息した。因て其の口中を撿するに、上下の腭に、鋭利き齒二枚ありて、少しく鮮血が着て居たと、云ふことである。

察する處、蟇公の特性として、闇黑を好み、夕陽の沒するを待て、靜に巣穴を出で、、東西を、さまよひ、終日の食を漁るをり、誤て、彼の石杭に落ちたるも、其處の闇きより、先生得意となつて居る中、光陰は、昔も今もかはりなく、いつしか、幾百の星霜を經て、自然と石のために、取かこまれ、辛くも生を今日まで、保ちたるには、非ざるか、否かは、未だ專門の學者すら、研究がとゞかず、一の奇談として、傳へらるゝのみであれば、吾々門外漢の、知り得ることは、出來ぬ。

されど、蝦蟇の石中に在りて、尙よく生活し得る例は、甚だ、尠なくない。

今を去ること、百三十六年前、即、一千七百六十四年の秋、ロルレインの石坑の地下、四丈五尺の處に在りし、石の中より、灰色の中位なる、一疋の蝦蟇が出たと云ふ事を、或る、窮理學者が聞きつけ、直に、出張して、細密に撿したる結果、只石の中に、極く小さき一竅を、見出したのみであつた。時に石工が、吾等は、三十年以來に、石中より蝦蟇の出るを見る事、既に六回に及んだと、語つて居つた。又、グァダロープに於て、醫官某の後園へ、坑を堀りしに、坑夫等化石の中に生け

る、蛙の有るとて、さわぎ立つを、彼の醫官自ら、坑中に入り、岩と化石との一層を取り來り、其の中より、綠色の蛙を引き出したるに、其の形狀全く、吾人が平常、目擊しつゝあるものと、少しも異る點がなかつたとか。こは、蝦蟇にはあらざれど、嘗て、西班牙にて、直徑三間許なる、大理石の大塊中に、九回に蟠旋り居りし、蝮蛇を得たとか、又は、二疋の白色なる小虫を、發見したと云ふ。此等數多の事實談より、學者の好奇心は、早速蝦蟇を捕へて、先づ、土器に納め、或は玻璃壜に入れ置き、茲に、試驗することゝなり、許多の年月を經たる後、取り出すに、果して生存し得るもの、多しと云ふ事である。

嗚呼、奇妙と云ふ語を、再び、くりかへし度なつた。如何でござります。讀者諸媛。

初紅葉

秋鹿生

おもての大通を轢り行く車の音とくに絕えて、稀に往き來ふ淋しき下駄の音もかすかになり行きぬ。大木戶の閉鎖は午後十時限と、差配が筆なるべし。はや年月すぎて見わき難うなりにたる木札に讀まれつ。溝板の、ともすれば足もと危しげなるをたどりて、もとより瓦燈のともさるべくもあらぬ軒端を、同じ樣なる建まへの家、角より一つ二つと數へん煩もなく、慣れたればこそ、とある戶をくゞりぬ。年は五十餘しき坂踏みこえて幾年月を經たるなるべし。後すがたに、夜目にも著しき瘦せ細りたる躰の、流石に妻は禮をわすれで出迎ふる、名はかりの玄關口に、「お歸り遊はしませ」と三つ指つきてかしこまるに、太はがれはてたる

力なき聲に、「あゝ」とのみ。

座敷はやがて寢室なるべく、食堂をも兼ねて居間なるべし。

八疊の疊何れともに疊といふは名のみ、床の上に花瓶はなくて種々の勝手道具らしきさへ列ねたり。襖の彼方此方、あはれ古新聞のはりませに破れを繕はれぬ。十一二歳にもや、眼すゞしく口もときとしまりたるは、母に肖て、顔の圓ろきは父の面影をうつしたるが、まだ片隅の机に三分心のラムプの薄あかりに、學校の豫習に餘念なき傍には、寢顔めでたき四五歳の女の兒と、七八歳の男の兒と、夢のうちは貴きも貧しきも、富めるも賤しきも何れ選ばらやうなき樂のうちに時をすごすらし。主人の名を内藤主計ときかば、名前はかりにても、屬官以上の價値は確かなるべきを、昔の羽振よかりしにひきくらべては、なほ嘆かるゝ今の零落に、己が不才とはいひながら、今を全盛の某々がためにあやまられて、僅かに家内五人の口すぎは、某省の雇に拾枚内外の收入に支ふべくもあらねば、昔眼下に使ひしといふ某新聞の社員が惠に、地方へ送り出す新聞封紙のうはがきに、かつかつの命を永らへつ。

今こそはかくまでも落魄れにたれ。昔は西方の某大藩に内藤とさへいふを憚りて、備中さま〲とて知られたる身なり。嘆きて詮なき昔の夢たとらむに由なき上は、わが長子を勵まして、學齡の來るを待つ間おそしと、近處の公立小學校に入れ、己が夜業の傍に豫習に、復習よと怠りなき注意は、自ら兒の上にあらはれて、入學最初の試驗に讀書作文算術何れも甲と記され、學校はじまりて以來、品行も正しく學業も勝れたると、此兒の如きはと、掛りの教師が賞めちぎる樣になりぬ。親々

の注意も力あるべけれど、この兒生れながらに才智長け、その心ばえも大人はづかしきこと多く、主計が行末はこゝに一點の微光を認めぬ。共同井戸の邊に口善惡なき貧乏長家の評議にもこの兒のみは賞めものになりて、主計が貧苦に逐はれながら、おのれ等ならば夙に丁稚奉行さすべき兒を、何の金まうけもさせずにおくを訝り、かばかり怜悧なる兒を、つまらなき學校通ひを止めさせて、何事にまれ仕事させなば、五年といはず親父殿の腰辨當も不用となるべしとまでもいひはやしぬ。

一雄は、父主計の活計に苦しきを知らぬにはあらず、人に優れて美はしき筆は、いまや父に劣るべくもあらねば、切りに父が晝の苦勞を休めて、夜の仕事に手だすけせむといふを、その志の愛らしからぬにはあらねど、父が願は行末にあれば、たゞ日々の課業に勵めよとのみ答へて應ぜず、三度四度にも及べど、はてははげしき叱りに逢ふことあり。主計は身を死しても家のためには一雄を世の中に立派に立たせんと思ひ、一雄は少しく復習を怠るとても同級生に負く可くもあらねばとて、ひたすら父の苦を分たむと思ふうちに、日はすぎ月はうつらむとす。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

兒供には、早く寢よといひて、己のみは夜更くるまで玄關の三疊に仕事をつゞけ、老いたる眼に、三分心のラムプの穗かげうす暗く、晝の疲勞しあれば、五十枚を關に手も眼も用にたゝずなりて、綿の如くなりたる躰を短かき夢に托しぬ、父の言葉に反くは良き事にはあらざれど、さりとてそのまゝ父の苦を分たで止まむも不幸に似たり、一雄は年にませたる考にくるしみて眠りがたき夜を、

父が苦しげなる呼吸にて仕事を止むるに泣きぬ。父が仕事を止むるのときは大方に推せられつ。仕事はてゝの父は死したる如き困睡に陥るも知られぬ。一雄は遂に父の苦を分つべき方法を案じ出しぬ。一雄は父に知らせず、知られぬ樣に父の苦を分つの術を得たり。父眠靜まりて後、一雄はそと床を起きいでゝ小さき腕に勝手知れたる暗をたどりて、再び火を點じて、父が書き殘したる封紙に筆を取りて、幾十枚かにいたれる頃、はや母の眼さますべき時と知りて、火をふき消して再び床に入るなり。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

常になく主計はけふは眉の間に喜の色をたゞえつ。

日々の仕事に腕も慣れたるか、去る月の末よりもけふの賃銀は多くうけとりぬ。かくて進まば、來の月は更に多かるべし。

といへば妻も、亦喜びぬ。之を聞きて一雄の喜は何にか例へむ、一雄もいたく嬉しといへば、今日の夕餐は久し振に愉快に終へられぬ。一雄の喜の那邊に在るかは父の知らむ由もなく、父の一雄が資を知らで喜べるをば、一雄はいたく嬉しと思へるなり。一雄はこの父母の喜びに代ふべき嬉しさを知らず、その後日に〳〵仕事にはげみたれば、父の收入はます〳〵多くなりぬ。されど一雄の疲はいよ〳〵加はりて昔にも似ず、一雄の床を放るゝとは次第に晩し。己が昨夜の仕事の高をも數へんとせざるか、三分心ラムプの油の減の近頃いたく大なるをさとらざるか。一雄の顏色のあをざめたるに心づかざるか。たゞ一雄が蚤起せざるを叱りて、家のためにその怠惰を嘆きぬ。父に叱かられて床を離るゝ一雄は、無事を装ひて學校には上れ

ど、疲れたる躰の授業に堪ふべくもあらで、さしも教師の評判めでたかりし一雄も、今は居眠りに屢々教師の譴責をうくる様になりぬ。はては教師より父の耳に入りぬ。主計が前途の望の光は、いなやまた失はれむとす。主計はいたく一雄を責むれど、一雄は固くその原因を語らじと自ら誓ひぬ。

* * * * * * *

今夜も常の如く、父が眠につきたる後一雄は例の仕事をはじめむとせり。いかなる足のくるひか襖の傍に身は仆れむとして、纔かに支へたれども物音は著るしく、もしやと思へども、しばし伺ふにさせるけはひもなければ、また襖しめやりて、三分の心の光に對ひぬ。夜はいよ〳〵更けゆきて、晝間は騒がしき釣井の音はもとより、時々夜中をも憚らぬ溝板の上のあら〳〵しき音も聞えず、表通の某醫の門邊に、勢よき車の止まると共に、忙はしき聲たてゝ戸を打たゝき、急病なるべき人の家の使の聲、火の番の金太が、姿には似合ぬ憐れなる聲に、鏘然たる巡査の佩劍の音と相合して聞ゆるのみ。一雄は晝間の疲夜が、教師と父母との憂をなすを知りて、いよ〳〵この半夜の仕事を思ひ絶たむとしたるに、今ははや習慣となりて、定まりたる刻限には、眼自ら醒めて眠られず、今夜はいよ〳〵最後ぞと自ら誓ひて仕事にかゝりたるなり。

はや十四五枚をかき了りたる頃、誰とも知らぬ人の手は、そと一雄を後より抱きぬ。ふりむきたる一雄の、あと言ふ間もあらせず、父が老たる眼より、村雨なす涙は下りぬ。しばしが程は互に聲もなし。やがて二人とも、鼻すゝりして、一雄は先づ聲を放ち、

「お許るし下されませ」

父は涙にむせびて聲もきれ〳〵に、
「何、何を許るせとか、わが身こそ卿に許るしを乞ふべきなれ。かくばかり厚き志とは知らずして今日迄〻卿が晝間の疲を叱りたるわれの愚さよ。卿の志は深くわが肝に銘しぬ。以後卿はわが子にしてわが子にあらず、わが子なれどもわが大恩人なり。往末遠き望ある卿にかゝる苦しき月日を過ごさしめたる愚さよ。明日より卿が願をかなへて、わが夜業の幾分をも卿に譲り、卿は中夜の苦業を廢すべし。」
と語り、一雄は抱かれたるまゝ久し振りに樂しき夢を貪りぬ。一雄の喜び如何なりけむ。





萩散らんとす　東久世通禧

なつかしき色うつろひて露はかり
さかりに見ゆる秋はきのはな

曉露　高崎正風

そよとたにかせはおとせぬ朝月夜
きすなき露のたまを見るかな

雨中虫　鍋島直大

なく虫の聲たえ〳〵にきこゆなり
雨夜ふけたるにはのくさむら

夜聞水聲　津輕承昭

松にふく風しつまりてたにかはの

おとさやかにも更る夜半かな

秋草咲き亂れたり　竹屋光昭

色いろにさきみたれたる秋の野の
はなのうへには露もたまらす

寢覺に虫を聞く　宮地巖夫

物思ふ夜半のねさめをなくさめて
なくかゝき根のまつ虫のこゑ

庭秋草　北郷久政

秋草のはなのさかりはわかにはも
さなから野への心ちこそすれ

茸狩　坂正臣

秋の雨のはるゝまつまにくやしくも
やまの松たけたけにけるかな

朝秋風　鎌田正夫

秋風もやゝ身にしみてはつかりも
おとつれぬへきけさの空かな

水上月　松本高明

宵のまにそゝきし庭のたまりみつ
おもはぬ月のうかひけるかな

霧中鶉　三輪義方

ほのかには月もにほひてたそかれの
はな野のきりにうづらなくなり

秋野遊　近衛貞子

同しくは月になるまてあくかれて
むしの音きかん秋のはな野に

月夜に船こくかた　蜂須賀隨子

船ひとのさをさしとめて見る月の
かけも水にはなかれさりけり

暮行く空に月出てたり　鍋島榮子

霧なからくるゝとおもひし山の端に
いてたる月のかけのさやけさ

月明らかなる夜友來れり　前田朗子

月夜よし夜よしとかこつ門の外に
くつの音すなり友やきつらん

海上雁　柳原愛子

わたの原舟こきゆけはくも井にも
唐ろおしつれかりわたるなり

雁聲遠　大谷章子

久かたの雲井をわたるかりかねの
こゑはるかにも聞えけるかな

案山子　松平健子

くれぬとて人は歸らしやまはたに
案山子のみこそ獨りたちけれ

殘月　中牟田常子

大路ゆく人かけたえてかはそひの
やなきのいとに月そかゝれる

曉燈　中村禮子

夜しらぬみやこの大路もあかつきの
のきのはかけは淋しかりけり

旅宿會友　宮地小東洋

憂き旅のこゝろ細きにゆくりなく
めくり逢ぬるとものうれしさ





雜報

●御精勵　掛けまくも畏しこけれど陛下には、例年諸官員に暑中休暇を賜はるも、御自は、嘗て御休暇など執らせ給ふ御事なく、國務に御精勵あらせられ給ふとかや。殊に本年は、清國に事ありし以來炎威金を鎔かすばかりなりしにも拘はらず。毎朝午前七時御學問所に出御ましく\、午後は、七時迄、同所に於て、文武百官に接し給ひ、夜は十一時に御格子(御寢殿)時としては、夜半に及ばせ給ふ御事もありきとぞ、漏れ承りぬる。

●御遙拜扈從　いにし二日午後八時宮中南苑に於て行はせられし　皇太神宮臨時遷宮御遙拜に付扈從せられし宮内官は、川口次官、岡澤侍從武官長、岩倉侍從職幹事、三宮式部長、香川皇后宮太夫、其の他侍從武官二名なりきと云ふ。

●皇太子殿下の御徳行　去る五月廿五日、殿下には、妃殿下と御同行　伊勢大神宮御參拜の砌、東宮殿下には、神苑を御散歩あらせられながら、喫煙なし給はんとて、御かくしより、煙草を御取出し遊はされしが、喫煙禁制なる事を御心附かせられ、俄かに　神宮の方に向はせられ、恭しく御禮拜あらせられ給ひしとぞ、承る。殿下、御謹み深き御性行に渡らせられ給ふ事、實にかくばかりなり。世に禁を犯かしても、此の慾をとげんとする未成年輩等以て如何とすらむ。

●閑院宮御獻品　過般歐洲より御歸朝あらせられたる閑院宮載仁親王殿下より、此の程畏き邊りに御獻上の品は、銀製の器具數種にして、皇后陛

下東宮殿下にも、夫々の御献上品ありし由うけたまはる。

●古式の婚禮　婚禮は、人生の大禮にして、古は重ぜられしものなり。然るに、近時いたく頽廢して、見るべきものなかりしに、いにし、五月の御慶事は主として古式に基かせ給へるより、大に悟る所ありて、諸所に盛禮を見に至る。次にかゝげたる報は、近頃稀有の盛式なり。日光二荒山神社宮司園田弘氏我　國結婚式の由來を調査し、上代に於ける結婚の式例を復活せんとて。頃日上野松太郎塚田マツ兩人に對し、結婚式を行へり。其次第は、式場を、日光神殿と定め、園田氏齋主となりて、多數の神官を統率し、大麻、鹽酒、開扉降神、進饌、祝詞、新夫新婦の拜禮等あり、終つて、新婚奉告祭といふ順序なりと。

●日本皇帝萬歲碑　南部臺灣下淡水溪の左岸に、瀰濃庄より潮洲庄に亘り、十數里の間、廣東移住民の部落連續す。此の人民は他の福建より來りたる臺灣住民の大部分と、全く氣風を異にし支那人としては、勇悍にして武を好み、容易に服從せざるも、一たび服從すれば、再び離反することなく、各部落を通じて、團結最も固く、一方は生番に對し、一方は福建人種の壓迫に對し、老壯皆農となり、兵となり、屯田的組織を以て、自衞し、殆ど、一の別天地をなせり福建よりの移住民が、康熙の末年以來、屢々反亂を企て、南部一帶を卷席したる時の如きは、福建人民に對する種族的反對と、主權者に對する服從心とにより、全部落を舉げて、賊と戰ひ、功績甚だ大なりしかば、康熙帝、特に彼等祖先の靈を祀れる祠宇の爲に、忠義亭の勅額を下賜したることありき。此の忠義亭は、廣東部落の中樞とも云ふべき内埔庄の附近にあり

て、大事件ある毎に、各部落の代表者會合して、向背を決するの地たり。前年乃木中將が、第二師團を率ゐて、南方を討伐するや、廣東部落に入りて、最も頑强なる抵抗に遇ひ、次で三十一年末には、租稅賦課のことより、殆ど全部落を擧げて、一揆を起したることありしが、頑强の抵抗をなしたる代りに、臺灣全く日本帝國に版圖に歸し、淸國復た顧ざることを了解してより、全部落を擧げて、十二分の服從をなし、今は臺灣に於て、最も治め易き人民となりしが、斯くて、此の頃に至りて、祖先以來淸國皇帝に奉じたる忠義心を、日本皇帝陛下に捧げ、其の赤誠を表する爲め萬歲碑を、忠義亭の附近に建立せんと決議し、直に資を集め、工事に着手し、今は殆ど竣工したる由にて、來る二十四日を以て、臺南縣知事旅團長、其の他官民を招待して、盛大なる建碑式を擧行する筈なりと。

●恩露の餘滴　四谷鮫ヶ橋谷町一丁目四十二番地辻谷政吉（四十九）と云へる者、去月初旬、赤阪東宮御所御造營工事中、重量ある鐵管を輕便軌道によりて、里俗安珍坂より御所内へ運搬せんとしたる折、誤まつて右脚を運搬車の下に轢かれ、重傷を負ひて、直ちに麴町區下二番町回生病院へ入院したり。其の後何分重傷の事とて、終に右脚を切斷して、治療を盡し、一時重体に陷りたるも、漸く取止めて、快方に赴むき、今後一週間程にて、退院すべきに至りしが、到底義足を用ひざれば、實行し難く、且つ、入院中の費用も尠なからねば、本人は、唯々途方に暮れ居る所、今回宮内省より、東宮御所工事中の負傷なれどとて、入院費一切を下賜さるゝ旨、御沙汰ありたれば、政吉は夢かと許り打喜び、是も難有き大御心のめぐみの露に霑

ふ身の幸はひにこそと、暫し感泣の面を得上げざりしとは、左もありなん。

●孝又貞（小竹園主報）

熊本縣、肥後國、菊地郡、隈府町、相川莊一の母、相川菊子は、父母に孝養をつくし、夫に貞節なりしかば、熊本縣知事より、褒賞金を賜はりぬ。左に辭令書を

熊本縣菊地郡隈府町
故相川莊平寡婦
相川きく

資性順良、平素克く父母に事へ、夫莊平を迎へしより、同人も、亦孝道の志厚く、質儉身を守り、精勵業を勉む、殊に母ちず、明治十四年以來、中風症に罹り、身体不隨となるや、夫妻戮力看護に心を盡し、同二十三年、父武平又、重病に罹り、起臥自由ならざるにより、夫妻は、日夜心力を盡して、益、看護を怠らず、莊平は、兼て、公吏の職を奉ずるを以て、不在中は、きく、専ら看護に從事し、傍ら子女の教育に心を致し、莊平は出入必ず告げ、晨昏必ず省す、職務の餘暇には、夫婦、共に、父母の床褥に侍して、病鬱を慰め、淸温和愉備さに至る、明治三十年、母遂に歿し、昨三十二年に至り、父死し、尋て夫莊平又病死す。其病に罹るや、病災交至ると雖も、毫も屈せず、看護至らざるなく、且一家の輯睦を圖り、親族近隣の交誼を厚くする等、前後十九年の久しき、終始一日の如く、洵に、奇特とす。仍て、爲其賞金五圓下賜候事。

明治三十三年九月十八日
熊本縣知事從四位勳三等　徳久恒範印

○相川菊子が褒賞を祝ひて

露しもにうつらふいろもしらきくの
はなの名ふかく香ににほひけり
宗毓季

かたりつぎいひつぎてまし白きくの
はなのいろかのたぐひなき名を
早田俊臧

菊池川みづのかがみにうつしおきて
千五百ながわき傳へさらめや
佐々豐水

親につかへ夫につくししまごころを
かみもあはれとみそなはしけん

●徳行者褒賞

愛知縣名古屋市住吉町鈴木房吉資性直、幼より淺井松兵衛に事て、勤務怠らず、殊に主家は商業の失敗に因り、資産を蕩盡して、尙負債あるの難境に陥るや、奮勵之が整理の任に當り、幼主を補佐して、刻苦挽回の策を講し、遂に家運の隆盛を致せり。前後三十余年の久き、忠勤一日の如く、且つ平素、能く父母に奉養を竭くす等、志行洵に奇特とす、仍て爲其の賞木杯一組下賜候事。

明治三十三年八月三日

愛知縣知事　男爵　沖　守　固

愛知三河國北設樂郡武節村　原田　さく

資性温厚、歸嫁以來、能く夫に仕へ、父の明を失してより、病て沒するまで、二十年の久き、承歡慰藉到らざるなく、備さに奉養を致せり。志行洵に奇特とす。仍て爲其賞金一圓五十錢下賜候事。

明治三十三年八月三日

愛知縣知事　男爵　沖　守　固

○はつ子の篤行　廣島縣山縣郡某村の尋常、小學校員に花井沖八(三十二)といへるあり。親もなく妻もなく、只、獨弟時之助(十七)相手に貧しき烟を立てゝ居たるが、斯ては萬事不自由なるより、去し明治二十九年中同村の脇屋與七なる者の世話にて、隣村の上村瀬左衛門の娘お初(二十五)といふを娶りて、妻となせしに、初女は、心ばへ優にして、夫に事へては、貞節に、小舅たる時之助に對しては、血を分けし兄弟も及ぬ計りに慈しみ、少しも、影日向なく振舞ふにぞ、一家の和合は、村内の手本となりて、誰譽めぬ者無く、最も幸福に其の日を送り居たりける。去る程に時之助は、高等小學校を卒業す、更に中學に入りたくは思へど、薄給の兄が、月々の學資を仕送ると思ひも寄らねば、如何ともせん樣なく、徒らに月日を送ることの口をしきより、時之助は、或日、潜に嫂に向ひて、其の事を物語りしに、初女は、其の心根を不憫に思へど、上に云ひし如くなれど、せんすべしらに、心を千々にくだきぬるほどに、夫沖八が肺炎に罹りて、生死の程さへ覺束なき重病に陥りたれば、初

女の嘆き一方ならず。日夜夫の看護に怠りなく、其の傍に內職をして、生活と藥代との補助を爲し心の限り働きたる効ありて、夫の病も二ヶ月餘にて回復したれば、一家の喜び譬ふるに物なく、初女は、是に氣を得て、愈々益々心を盡して、夫に事へけるが、時之助の事が心に掛りて忘れ難き處より、女ながらも心定めて思ひけるは、夫が病氣の積にて、內職を勵まば、月々の學資の仕送れぬ事はあるまじとて、此の事を夫に告げ、時之助を廣島せなる中學校に入學せしむる事に爲せしを、斯と聞傳へたる村內は、何も初女の志に感じ、應分の學資を補助せんと言ひ出づるものさへありて、益す便りを得、遂に昨年四月廣島の中學に入學せしめたるにぞ、時之助の喜び言はん方なく、爾來日夜の差別なく、勉强せるゆゑ、學力優等常に一級の首席を占め居れりとぞ。十室の中、忠信ありとは、是等の事をやいふならん。

●孝女　上州、高井郡綿內村小林善三郎の妹のや子(十二)亡父の遺言を守り、多年貯蓄したる金員、及び、己れが婚儀に用ひんため購ひ求めたる衣類を賣却したる金員を以て、路用となし、亡父の遺骨を負ふて、遙々京都西本願寺に詣り、納骨式を了へて歸る。

●美擧　巖手縣西磐井郡花泉村は、戶數を三百を超えざる小村なれども、村內には奈良阪花泉の二小學校あり。校舍は孰も二十年以前の建築に係り、漸く其の用をなさゞるに至りたるを以て、村長以下村民の有志者數千圓を醵出し、校舍の改築をなさんとす。村税に據らず、寄附金のみを以て、之を成さんとする學事熱心の程感ずべし。

●感心な生徒　紀州楠本尋常小學校は、山村僻地に在り、諸般の設備全からず、同校生徒之を遺憾と

し、毎夜學校に會して、棕梠繩を製し、一日廿人三錢宛の賃錢を得、校具、其の他の購入費に充てつゝありとぞ。

●下田文學士　女子教育取調のため、歐米に渡航せる文學士下田次郎氏は、去月十一日巴里着、同月末瑞西に向ふ由通知ありたりと。

●琴香女史　信州松本に村田琴香（十六）といふ畫家あり、濃淡の墨色、殆ど、神に入るの思あり、且女性に珍しき勇氣と大望とを抱き、一たび大陸の山水を見て目を養はんと欲し、支那漫遊を企てしが、たま〳〵老母の世を去るに遭ひて、豫て蓄へ置きたる旅費を、悉く葬送の費に供し、空しく志を抱きて、身の薄命を嘆ち居れりと。

●婦人會の消息　日本體育會女子部、一昨六日午後一時より九段牛ヶ淵の同會にて、講演會を開き、久保田讓、三宅秀、安井てつ子三氏の有益なる講話ありて、餘興には、女子の遊戲、體操學校生徒の普通體操等あり、頗る盛會なりき▲日本弘道會女子部はいにし七日體育會に於て例會を開き、棚橋絢子小具貞子二氏の有益なる講話ありき▲大日本婦人教育會は、去月二十九日華族女學校附屬幼稚園にて常集會を開き、服部宇之吉氏の北京籠城談、安井てつ子氏の英國婦人の狀態の講演ありき▲大日本婦人衛生會は、今回大坂に支會を設けんとし、目下計畫中▲大坂婦人慈善會はこれまで、會員の醵金にて維持し來りしが、今回一層擴張を計り、其基礎を固くせんとて、市内の名望職其の他紳士豪商等より特別維持會員といふを募集することゝしたりと、▲京都婦人慈善會は、本日より寺町の高等女學校にて、秋季大會を催す筈因に記す同會は、今春までは會員三百名なりしも、近來續々入會者ありて、すでに四百五十餘名に達したりと▲備前國邑久郡美和村婦人會は、去月末同村高松尋常小學校にて、開會し、欇木郡視學の女子教育談ありしが、來會者、八百名に達したりと、▲愛媛縣新居郡東部小學校の裁縫教員數名發起となりて、東新婦人會といふを設立し、去月十九日泉川第一尋常小學校にて發會式をあげ、規則制定後役員撰擧を行ひたるに、會長には西原環子、副會長には、宮崎さら女氏、當撰し、以下役員定まりて、西原村長宮崎校長の講話ありきと、當日來會者は、五十餘名留役は、毎月第二日曜に開會の筈なりと▲香川縣三豐郡の有志婦人發起となり、道德涵養風俗矯正の目的を以て、三豐郡婦人會といふを設立し、去月三十日發會式をあげたり、▲愛媛縣喜多郡五十崎村婦人會は、去月二十四

日第三期總會を同村宗光寺にて開き、來賓高野島太郎吉岡壽平、其の他の講話あり、終りて調理裁縫作法の實地研究等あり。出席者、四十餘名、皆滿足して、散會せりと。因り記す、同會長は向井よれ子副會長は、神田こう子なり。

●女學校の消息

▲日本女子大學校を官立と誤解せる人あれど、同校は純然たる私立なり、されば、各地方縣にて、入學試驗を行ふなどの事はなし、位置は、小石川區目白臺にて市街を離れたる閑靜の地なり、建築は去月より着手非常に工事を急ぎ居れば、來年四月の開校には、充分間に合ふべし、校舍は本科、附屬高等女學校、校長教員住宅、生徒寄宿舍、其他講堂、書籍室、理科教室體育場等にて、極めて、完美したるものなりと。來年四月はじめの生徒募集人員は五百人にて、內百人は、本科（大學部）四百人は豫備科（附屬高等女學校）の豫定なる由、入學程度は、修學年限五ヶ年の高等女學校卒業生ならば、無試驗にて入學を許し、四個年の者ならば、豫備科、即ち、附屬高科女學校の五年級に編入して、卒業の上本科即ち、大學部に入學せしむる筈、また、私立女學校卒業生は、其の學校の科程を考へ、之に準じて、或は、無試驗或はある科目のみを試驗する筈の由、尙又、大學部は家政部文學部、教育部、體育部、音樂部、美術部、理科の數部に分ちたれども、最初は諸般の準備整はざる故、來年はまづ、家政部と文學部とのみを開き、他は兩三年の後漸次に開く筈にて、尙其の文學部も國文學部、英文學部、佛文學部の三つに分れたれど、佛文學は、これも當分見合せ、來年は、國文學、英文學の二科のみ開く筈されば、來年四月、此の校に入學せんと望まるゝ人は、家政部、國文學部、英文學部の三部中、孰れかを撰ばざるべからずとぞ。同校設立事務所は神田一つ橋通帝國教育會內。

▲學校長第二回協議會にては、同教育に對する各校長の意見を呈出して、其の熟議に附する由、停學兒童の取扱小學校令に依るに、不良の兒童にして、他の生徒の妨害となる者は、就學を停止する規定なるも、他の一方にて、之を放任する時は却つて、不都合を來たすを以て、東京感化院にては、是等の放校兒童を收容し、感化の實を擧げんと、已に東京府及び神奈川縣等へ照會し、來月一日より實行すと。▲東京府第一高等女學校、目下神田橋外にある第一高等女學校は、明年度に於て京橋區築地三丁目の第一中學校分校（舊東京府尋常中學校跡）の所へ移轉する筈にて、之れが建築費三萬五千餘圓を、府三十四年度豫算中に編入せり▲愛媛縣溫泉郡雄群村に、愛媛縣立松山高等女學校を設置し、明治三十四年四月より、開校の件認可せられたり。

▲去月來大坂府第二高等女學校教員、黑田芳江、および其の第五女あぐり赤痢病に罹りたるため、長女せい、二女花香、三女みち、四女こうの通學せし中之島第一高等女學校竹屋町育英女

子高等小學校周防町三津尋常小學校同幼稚園は、學校醫をして生徒の健康診斷をなさしめ、校舍には清潔消毒法を施し、二日間臨時休業をなしたり。▲岐阜市高等女學校は、兼て縣税の補助申請中なりしが、此の程金七百五十圓補助の指令ありたり。▲栃木縣高等女學校にては本月より、尋常小學校女子准教員講習科を置きて、小學教員の補充をはかる。▲新潟縣女子師範學校にても女子准教員講習科を置きて、過日生徒を募集せしに、定員四十名の所へ、百十一名の志願者を生じたりと、▲去月下旬高知市育兒會堂にて小笠原流女禮式臨時試驗を執行せしに、受驗者三十四名ありきと、▲大津高等女學校は、大久保初男氏辭職後、未だ、後任校長も決定せず、隨うて、教諭の欠員もそのまゝにて、現今は殘餘半數許の教員にて、やうやく授業し居れりと、元來同校は、市立なれども縣税より三千圓の補助を受け居るため、校長の後任についても一方は資格優等の人を選ぶべしといひ、一方は今日の場合たとひ資格に不足の所あるも、人物經驗に於て、校長たる手腕あるものを任すべしとて、相變らず、意見の折合はざるためなりとぞ、迷惑なるは生徒なり但し遠らず決定を見るに至らんと、▲秋田縣師範學校女子部にては、豫備科生三十名を募集せり志願のものは、本月二十四日までに願書差出すべしと廣告せり、▲佐賀縣高等女學校の建築地は、縣廳の東側競馬場に定まり、すでに登記の手續をも終へたりと▲各高等女學校の教科書は、大抵中學校師女學校と同一の者を用ひ、頗る不適當なりしが、文部省は、さきに女學校用教科書の必要を感じて、まづ修身教科書の編纂に着手しこのほど殆ど脱稿したるを以て、成るなく來年四月の新學期より、使用せしめんとて、取急ぎ居る由、▲埼玉縣北埼玉郡埼玉村にては、村内學齡兒童中女子の多くが、子守のために就學せざるを以て是等子守の教育を圖り、去月初旬より、毎日二時間宛同村尋常小學校に兒守を集て、修身國語算術遊戲等の初歩を教授す、集り來る者七十一人、かくては學齡風俗改良上にも功があらん

▲高等女學校　京都府高等女學校は新、築校舍(寺町荒神口)の設備略ぼ整ひたるを以て、九月一日同校舍に移轉し、同六日より開校せし由、尚ほ寄宿舍は、本年度中に落成する筈なれば、右竣功の上來年四月新築落成式を擧行する筈にて、夫れまで、寄宿生は日々元校舍の寄宿舍より通學する都合なりと。

▲女准教員講習　新潟縣北蒲原郡に於て、郡内の雇女教員講習を開催せしが、目下の處、其の成績頗良好にして、准教員講習にも、甚だ遜色なしといふ、左に其の規程を掲げん。

北蒲原郡雇女教員講習規程

第一條　本規程は雇教員を講習し北蒲原郡内小學校女教員の補缺するを目的とす

第二條　講習所は北蒲原郡新發田に置く

第三條　雇女教員は北蒲原郡内より募集す

第四條　講習の期限は六ヶ月とす

第五條　講習開始の期日は別に之を告示しべし

第六條　講習の學科目及其程度は左表の如し

學科目	程度
修身	人倫道德の要旨
國語	教育の大要各學科教授法、假名遣文法要略講讀及作文
算術	筆算、比例、利息算法、珠算、加減乘除四則雜題
地理	總論日本地理の要略
歷史	日本歷史の要略
習字	楷、行、草、
裁縫	通常衣服の縫方裁方
唱歌	單音唱樂器用法及音樂上の名稱記號律加譜拍子等の要略

第七條　講習をなすべきものは年齡滿十五年以上三十年以下の女子にして品行方正身体强健修業四ヶ年の高等小學校卒業又は之れと同等なる學力を有するものに限る

第八條　講習所の講師は尋常小學校本科正教員以上の資格あるものに囑託するものとす

第九條　講習生には筆紙墨料として一ヶ月金壹圓を支給す講習にして宿宿又は講習所々在に宿泊を要するものは一ヶ月金參圓を增給す

第十條　講習を卒りたる者は郡長の指揮により第一條に定むる教育事務に從事するものとす

第十一條　講習を請はんとするものは一號乃至第三號書式に據り願書及履歷書契約書を出すべし

第十二條　講習を了へたるものは試驗を擧行成し績を檢定し講習證書を授與す

第十三條　講習完了の者は其證書受得の日より滿二ヶ年間本郡公立小學校雇教員の職に從事する義務を有す

第十四條　本所規程に違反し又は卒業の見込なき者は退學を命ずべし

第十五條　講習生自己の便宜上中途にして退學し又は不都合の行爲あつて退學を命じたるときは其の情狀に依り給與を償還せしむることあるべし

第十六條　雇教員にして其契約に違背し又は不都合の行爲あるときは事宜により講習證書を沒收することあるべし

●教員檢定出願者注意　本年十二月（本試驗は來年一月）施行の師範學校中學校高等女學校教員試驗檢定出願者注意左の如し。

一、師範學校家事科の試驗檢定を出願したるものには本試驗の際裁縫をも試問す（但し裁縫の免許狀を有するものは之を省く）

一、裁縫科は豫備試驗を行はず

一、國語又は漢文の免許狀を有して國語漢文科の試驗を出願したるもの、地誌又は地文の免許狀を有して地理科の試驗を出願したるものには豫備試驗を行はず直に免許狀を有せざる部分につきてのみ本試驗を行ふ



十月廿日兼題

山初雪

天　芝區神明町廿五番地　岩崎とし子

みや人も小簾かゝけてやめてまさん
　むかひのやまのけさのはつゆき

地　筑前國嘉穂郡飯塚町　松尾くに子

さてこそは夜半の寒さもおほえつれ
　はつゆきふりぬみよしのゝやま

人　東京本郷春木町二丁目四十三番地　坪井はま子

ふりさけて見てのみしたふふるさとの
　おばえのみねにかゝるはつゆき

人　駿河國富士郡鷹岡村　佐野きやう子

つねにみる山をもけさはゆひさして
　ひとにもつくるみねのはつゆき

（以下原稿到着順）

もみぢはのなかめたえてしいそ山に
　はなさも見ねてふれるはつゆき　岡本葛乃子

いにしへゆ絶しこさなき富士の嶺に
　またあらためてふれるはつゆき　岡本松野子

池の面はいまだこほりをむすばねご
　くもゐのやまにゆきはふりけり　服部倫子

くまなして月にうかりしやまのはも
　今朝なづかしくみゆるはつゆき　德永萬壽子

むかひみる山しろたへにはつゆきの
　うづみはてたる今朝のたのしさ　德永廣子

山さゝはみやこのそらにさきだちて
　しろたへにつむ今朝のはつゆき　德永識子

めづらしく雪こそつもれきのふまで
　もみぢかりせしやまもまだらに　友永章子

さく花のおもかげみせてみよし野の
　やまのしらゆきふりそめにけり　山代由子

足からもはこれさおなじすがたにて
　ゆきのころもなかづきそめけり　佐々小寥子

ひがし山いたゞきしろくみねけるは
　ふもさのしぐれゆきさなりけん　佐々有鄰子

人ごさにめづらしげにも見さくらん
　あらおもしろの今朝のはつゆき　澤田春子

世の中におくれがちなるやまのはゝ
　はやくぞつもる今朝のしらゆき　濱口貞子

きのふまできりにかくれし山の端の
さやかに見ねてふれろしらゆき　西川順子

豊さしのしろしな見せてやまの端は
いちはやくこそゆきはつみけれ　田代艶子

峯に尾にかゝれろくもかさはかりに
けさめつらしく見ゆるはつゆき　田代綾子

時ならぬはなのにほへるこゝちして
はつゆきふれりみよしのゝやま　山田裕子

ちりのころ紅葉もあるなさきにけり
よし野のやまのゆきのはつはな　永井さい子

あすもまたさけすあれかし黑かみの
やまにかさしのむつのはつはな　竹村竹里子

ころもうすくおもほね初めし此朝け
をちのやまの端しろく見ねつゝ　目黑佐喜子

夏ころもきのふぬきつさおもふ間に
はつゆきしろし富士のたかやま　本庄のふ子

み山へにつもるしらゆき見ね初めて
そよふくかせにさむさおほゆる　森このゑ子

きのふまできわの松にむかふやま
いつしかふりしらゆきのはな　高羽ふし子

いつしかさお指なり數へうなゐ子の
まちかれやまに初みゆきふれり　關勝子

今朝みればさきはの色もしろたへに
なりそめにけりやまのはつゆき　秋山よし子

みはやしゝ葉末のつゆのきねぬまに
かすがのやまにはつゆきそふる　澁谷やす子

みやこびさまだ冬ごろも裁たなくに　篠田圓子

さよさしのさがさや人のあふぐらん
はつゆき降れりふじのたかねは　松尾せい子

時ならぬはなかさ見ねてさほやまの
いこまのやまに降れるはつゆき　松尾富美子

み山にはのころもみちもあるものな
こずゑにかゝる今朝のはつゆき　田村多豆子

吹くかせもこさに寒しさ見わたせは
はやくもゆきはふりそめにけり　村上操子

松をみなうつむるけさのはつゆきに
かのやまのはにかゝるはつ雪　上原信子

もみち葉もまたちらなくにこの朝け
さきはのやまもふゆなしろらむ　久野春子

みやこにはまた紅葉もちらなくに
はつゆきふれり伊勢のむらやま　久野久和子

こしのしらやままししろなりけり

田子のうら松はらゆけはふしの根の
けさはつゆきのめつらしきかな　久野てう子

なにこさも遲れかちなる深やま路を
しりてやゆきのはやくふるらん　久野德子

きのふ今日野邊の秋かせさねくれて
はつゆきしろしこしのしらやま　永山さよ子

山のはにたれかきせけむきのふかも
ぬきすてたりしゆきのきころも　永天禎子

うぐひすの初音もきかぬまがきより
けさみねそむる富士のしらゆき　山下登美子

山すみの身にはみやこにさきたちて
さしこさに見るにはのはつゆき　佐野鶴子

夜をさぶみ朝戸をあけて見れはうへ
をちのたか根につもるはつゆき　福原菫子

をちこちのもみちの色もあせぬらん
はやふりそめしさほやまのゆき　牧衆子

初みゆきふりにけらしなみわたしの
やまはみなからはなさなりつゝ　鎌田きよ子

さねくれしあらしの音もしつまりて
やまのはしろしけさのはつゆき　上本ちさ子

見せはやなみやこの人にあさ日かけ
にほへるやまのききのはつゆき　鈴木秀子

みよしのゝ山にふりしくはつゆきを
つきのかつらのはなさいふらん　齋藤駒尾子

けさみれはのきはの山はめつらしく
かのこまだらにふれるしらゆき　檜崎ちせ子

今朝みれはみさりのころもぬき捨て
ゆきのすかたさなれるまつやま　百瀬登代子

しつまりし夜風のはてはしられけり
さほやましろき今朝のはつゆき　松山比天子

夜をさむみなくやましらの聲かれて
やましろたへにはつゆきそつむ　松山かすみ子

夜もすからすきもる風の身にしみて
かさぎのまやにはつゆきそふる　松山せい子

見渡せはやまのにしきもいろあせて
またらにしろしゆきやふるらん　中村貫和子

なかむれは秋のなこりのうつろひて
おのへのゆきはにしきなりけり　佐久間八重子

うらうらさ上るあさ日にかゝやきて
仁保しま子

はつ雪のふりしあしたのふしのれは
あそか峯しろし今朝のはつゆき　佐野みさ子

あはれにも鳴く鹿の音はたねはてゝ
わきてもたかきここちこそすれ　北島操子

年ふるしくろかみやまのいたたきに
をちのふもさちはつみゆきふる　北島功子

みやこには木枯すさむしこのあさけ
しろくも見ゆるけさのはつゆき　北島松子

時しらぬ富士のたかねはさもかくも
はつゆきふれりきたのやまのは　立原よれ子

あさなあさなかゞみになれし白雪も
つくばのみねにふれるはつゆき　松尾やそ子

がみな月しぐるゝ今日ぞよしのやま
みやまにみればめつらしきかな　中川芳尾子

やま松のこすへにうすらはつゆきの
みねにはゆきのふり初むるらん　佐久間正子

けさ見れは初ゆきしろし小野やまの
はなにまかへてつめるけふかな　高石登代子

きのふわか袖ひきたれてたけ狩りし
さきはのいろも見ねわかぬまて　平野琴柱子

枝なからみやらにおくるよしもかな
やまさゝみねず今朝のしらゆき　宇高松子

よもすからふきしあらしの音たへて
けさめつらしきゆきのはつ花　由井浪子

みな寄きなかにいたゞきうすしろく
けさめつらしきやまのはつゆき　琉井美和子

けさうもわかきふじのはつゆき

きのふまできりにかくれし山の端の さやかに見ねてふれるしらゆき　西川順子

豊さしのしるしな見せてやまの端は いちはやくこそゆきはつみけれ　田代艶子

峯に尾にかゝれるくもかさはかりに けさめつらしく見ゆるはつゆき　田代綾子

時ならぬはなのにほへるこゝちして はつゆきふれりみよしのゝやま　山田裕子

ちりのころ紅葉もあるなさきにけり よし野のやまのゆきのはつはな　永井さい子

あすもまたさけずあれかし黒かみの やまにかさしのむつのはつはな　竹村竹里子

ころもうすくおもほね初めし此朝け なちのやまの端しろく見ねつゝ　目黒佐喜子

夏ころもきのふぬきつさおもふ間に はつゆきしろし富士のたかやま　本庄のふ子

み山へにつもるしらゆき見ね初めて そよふくかせにさむさおほゆる　森このゑ子

きのふまでときわの松にむかふやま いつしかふりししらゆきのはな　高羽ふし子

いつしかさお指なり數へうなゐ子の まちかねやまに初みゆきふれり　關勝子

今朝みればときはの色もしろたへに なりそめにけりやまのはつゆき　秋山よし子

みはやしゝ葉末のつゆのきねぬまに かすがのやまにはつゆきそふる　澁谷やす子

みやこびさまだ冬ごろも裁たなくに はつゆき降れりふじのたかねは　篠田圓子

さよさしのさがさや人のあふぐらん いこまのやまに降れるはつゆき　松尾せい子

時ならぬはながさ見ねてさほやまの こずゑにかゝる今朝のはつゆき　松尾富美子

み山にはのころもみちもあるものな はやくもゆきはふりそめにけり　田村多豆子

吹くかせもことに寒しさ見わたせは かのやまのはにかゝるはつ雪　村上操子

松なみなうつむるけさのはつゆきに ときはのやまもふゆなしるらむ　上原信子

もみち葉もまたちらなくにこの朝け はつゆきふれり伊勢のむらやま　久野春子

みやこにはまた紅葉もちらなくに こしのしらやまましろなりけり　久野久和子

田子のうら松はらゆけはふしの根の けさはつゆきのめつらしきかな　久野てう子

なにことも遲れかちなる深やま路な しりてやゆきのはやくふるらん　久野德子

きのふ今日野邊の秋かせさねくれて はつゆきしろしこしのしらやま　永山さよ子

山のはにたれかきせけむきのふかも ぬきすてたりしゆきのさころも　永天馥子

うぐひすの初音もきかぬまがきより けさみねそむる富士のしらゆき　山下登美子

山すみの身にはみやこにさきたちて さしこゝに見るにはのはつゆき　佐野鶴子

夜をさぶみ朝戸をあけて見ればうへ
をちのたか根につもるはつゆき　福原菫子

をちこちのもみぢの色もあせぬらん
はやふりそめしさほやまのゆき　牧　衆子

初みゆきふりにけらしなみわたしの
やまはみなからはなさなりつゝ　鎌田きよ子

さぬくれじあらしの音もしづまりて
やまのはしろしけさのはつゆき　上本ちさ子

見せばやなみやこの人にあさ日かげ
に匂へるやまのききのはつゆき　鈴木秀子

みよしのゝ山にふりしくはつゆきを
つきのかつらのはなさいふらん　齋藤駒尾子

けさみればのきばの山はめづらしく
かのこまだらにふれるしらゆき　楢崎ちとせ子

今朝みればみさりのころもぬき捨て
ゆきのすがたさなれるまつやま　百瀬登代子

しづまりし夜風のはてはしられけり
さほやましろき今朝のはつゆき　松山比天子

夜をさむみなくやましらの聲かれて
やましろたへにはつゆきぞつむ　松山かすみ子

夜もすがらすきもる風の身にしみて
かさぎのまやにはつゆきぞふる　松山せい子

見渡せばやまのにしきもいろあせて
またらにしろしゆきやふるらん　中村貴和子

ながむれは秋のなごりのうつろひて
おのへのゆきはにしきなりけり　佐久間八重子

うらうらさ上るあさ日にかゞやきて
あそか峯しろし今朝のはつゆき　仁保しま子

はつ雪のふりしあしたのふしのねは
わきてもたかきここちこそすれ　佐野みさ子

あはれにも鳴く鹿の音はたえはてゝ
をちのふもさちはつみゆきふる　北島操子

年ふるしくろかみやまのいたゞきに
しろくも見ゆるけさのはつゆき　北島功子

みやこには木枯すさむしこのあさけ
はつゆきふれりきたのやまのは　北島松子

時しらぬ富士のたかねはさもかくも
つくばのみねにふれるはつゆき　立原よね子

あさなあさなかゞみになれし白雪も
みやまにみればめづらしきかな　松尾やそ子

がみな月しぐるゝ今日ぞよしのやま
みねにはゆきのふり初むるらん　中川芳尾子

やま松のこすへにうすらはつゆきの
はなにまかへてつめるけふかな　佐久間正子

けさ見れは初ゆきしろし小野やまの
さきはのいろも見ねわかぬまで　高石登代子

きのふわが袖ひきたれてたけ狩りし
やまさへみねず今朝のしらゆき　平野琴柱子

枝ながらみやらにおくるよしもがな
けさめづらしきゆきのはつ花　宇高松子

よもすがらふきしあらしの音たへて
けさめづらしきやまのはつゆき　由井涙子

みな青きなかにいたゞきうすしろく
けさうもわかきふじのはつゆき　琉井美利子

みなれたる山さへけさはふりつもる
　ゆきのはつはなめつらしきかな　丹下花子

おのづから落葉のおともしづまりて
　はつゆきしろしみやま邊のいは　大谷津峰子

よもすからきた風さむくふきあれし
　しるしをみするみねのはつゆき　武田龜子

わか宿のしつ江のもみちちらぬまに
　はやさほやまはゆきふりにけり　鏡山増代子

まくら花みしはいつこそみよしのゝ
　よしのゝやまははつゆきのふる　有信やす子

かへり花咲くと見るまに消ぬにけり
　よし野のやまのけさのはつゆき　日高かず子

玉しきやにしのあさかせまぬく〱て
　甲斐が根しろくはつゆきそふる　高砂柴代子

あさまやまふもとの紅葉いろあせて
　こしのたか根にはつゆきそふる　高砂き代子

八千草のすそ野のあきのすきぬ間に
　不二のたかねにかゝるはつゆき　内田さく子

みち奥のいはきのやまのはつゆきを
　不二にゝたりとたれもめつらん　吾妻ちの子

みやこぢはまた寒かりてきのふけふ
　つく紫のやまにかゝるはつゆき　宮田けい子

木々の葉もまたうつろはぬみ吉野の
　やまかせさむくかれるはつゆき　舘脇ます子

はるならはひとは花とやおもふらん
　よしのゝやまのけさのしらゆき　秋原章子

みやこには紅葉も木々にのこれるを
　はつゆきしろしこしのたちやま　金原わき子

木からしのかぜもいつしか埋もれて
　のきはのやまにつもるはつゆき　縣靜子

二荒やまはつゆきみねつあきひとの
　ふもとにくだるときやきぬらむ　河合縫子

嶺たかみつもるもはやきはつゆきに
　ふもとのさとやいかにさむけき　三宅中技子

おき出てむかひのやまのはつゆきを
　まつらんこらにみせんきかせむ　服部爲子

三河ぢのしぐれのくものはれまより
　かひが手しろくみゆるはつゆき　服部正子

あらしやま松のこずゑのはつゆきは
　まちみしたなのけしきなりけり　加藤[illegible]子

木がらしのおとしづまりて朝日やま
　くもかさみればつもるはつゆき　鍋田龍子

十月廿日兼題

新刊書籍を贈るに添ふる文

地　肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子

此のころは、いとゝはとはしく侍りしが、いかがわたらせたまふやらん。承りたくなん。さて、新刊の明治庚子熊本洪水實記一冊は、今年の七月の大

洪水の實況を、見るがごとく記しゝものなれば、つたなき文もてきこえ奉らんよりはと、此の書を買ひて、御便のしるしにきこえ奉りぬ。あはれ、白川のうき瀬にしづみし男女のくるしみを、御心にしろしめしたまひてよ。あなかしこ。

白川にあふれし水のあとみれば
うき瀬にたちし人をしぞおもふ

駒込東片町　北島功子

人

秋もやうやくなかく成ゆく朝な夕な、御すか〳〵しうおはしますらんは、いとうれしうなん。諸新聞雜誌等にて、かねての評判高かりしなにがしの先生御著述の書、此度、博文館より發行と承り、久しく心待にしをるからとて、早速取よせ、時々繙き居申候。人々の評判も實にさることとなから、親しく該書につきて研究いたし候へば、さて〳〵きゝしにまさる好事にて、踏みわくべき女子の道は申も更なり、妻として良人に仕ふるの道、母としては愛兒教育の法、さては、老後の戒にいたるまで、よろづに、いと詳らかに且ついと懇切にて、宛然ら臨席の講義に露異り申さず、誠に一讀三誦の價あるものとは、かゝる好書をやいふらんと存じ申候。幸書肆に熱懇の者これあり、五六部とりまとめ、格外の安價に讓受け候へば、夜長の御つれ〳〵を、せめては慰めまゐらする一助にもと、一部御贈り申上候。幸に貴意を得ば、うれしきかぎりにこそ。

いさ共に底のまたまをあつめきて
よわたるみちのしるへとやせむ

かねては、打絕えし日比のおこたりを謝したてまつらんとてなん。あなかしこ。

(以下原稿到着順)

德永廣子

軒の木葉の色つきはじめて、ここちよくふきくる風もいささすずしく、秋のけしきの、一日一日にふかくみゆ侍るを、やすらけくわたらせたまふよし、目出度いわひまいらせ候。さて、此のころ、某の作られし東洋戰爭實記は、いさ感ずべき事の多きよしを、人のうはさし侍れば、妾も、しきりに讀たく思ひたてるなりから、書籍商のもちきたりぬれば、もとめ侍りて始終よみわたし侍りしに、將士兵卒にいたるまで、身をわすれて、旭旗かがやかし、いさましく戰はれしことさ、其の人々の大日本心の一筋に道を守られしことの、よみもてゆくに、身おのづから、戰場にむかひしごこちし、いさましきことの身にしみて、獨讀み侍るも本意ならねば、中かきのへだてなき御身に、差上奉候。御覽たまはらば、いかばかりうれしくぞんじ奉るになん。あなかしこ。

松原かじ子

この頃は、うちたゆて御音づれも之なく候故、いかゞ御暮し遊ばされ候かさ、日々おもひいでながらも、つひ〳〵御無沙汰のみ致

し候だん、おゆるし下されたく候。扨、この書は、何堂より發行の新刊にて候が、かれて、仰せ遊ばされし樹木栽培のことの委しくしるし有之候ゆゑ、さりあへず、一部御贈り申上まいらせ候。かしこ。

森　このね子

久々御無意にて打過ぎ候ひしに、いつしかさ身にしみ初むる風の音に、それさわかれさ、野べの千草に露見ねて、かゝやき渡る夜の月、なき居る虫の聲あはれに、何さなう秋のけしきの淋しさを覺ゆる頃さ相成候。御許には、いつも平らかにすくさせられ給ふらむさ、けに御うらやましくなむ侍る。此方は、常々おくれ勝ちなりしに、學びやをいでしよりは、いさゝ家事に取紛れ、思ふ萬一もなす事能はず候段、御察し下され度候。然りながら、夜長の友の徒然に何か新刊書籍をさ存じ、東京なる取次ぎ所へ申遣し候處、漸く昨日送りこし候に付、取敢ず四五部御持たせ上け候まゝ、御暇の節御一讀あらせられたく、わけて、明治才媛美譚こそ、上流令嬢達の淑德才藝のほまれ、いや高きいさなしを、一々にかいつけしこさいさ丁寧に、中にも德川芳子孃などの行ひの健けさ、お身のいたましさ、ほむる言葉も出でざる程に候。餘は御覽あらせらるゝ折にさゆづり習き候まゝ、何卒逸早く御目を通し給はむことを祈り上け候。あなかしこ。

坂本光子

朝な夕ないさひねまさり候折柄、いかにすぐさせ玉ふらん。みいたつきも、少しは御心よく成らせられ候や。恙なき身にさへ秋はよろづにあはれ深くおぼね候を、まして、やまひの床に打ふし給へる君には、さぞかし、さやかくさ御あんじあそばされ、一入御心細くおはしまさんさおしはかりまゐらせ候。今少し近くに居なば朝夕さぶらひて結ぼほれ玉ふらん御心をもさきまつ　るべきを、かく遠くへだて居る身の、心にまかせで、ひたすらに天かけるのうらやまれ候も甲斐なき身をかこち居候。さて、此程、あらたに發行致せし文學の栞さなん云へる書籍、至極面白き由人づてに聞うけ、如何なる書籍なるか見まほしく存居しに、昨日某の君がさ音づれまゐらせし折、はからずも見候處、評判にたがはず、まことに面白く、殊に、日頃好ませ玉へる敷島の道の事ども、こまごまさかいつられありて、まことによき書籍さ存候まゝ、せめて、御心はるけさせまゐらするよすがさもなり候はんかさ存じ、一部もさめて、御ちさへさゝげまゐらせ候。御心にかなひ候はゞ、上なくよろこばしき事にこそ。尚、申上度事も山々候へども、去るしげきわざに取かゝり居て、何事も取いそぎ候まゝ、惜しき筆止めまゐらせ候。何れ近き中に、休日もさめ、まうのぼりて、まのあたり御樣子も伺ひまつるべけれど、先は取あへず御見舞かたく、かくは。かしこ。

松尾せい子

千草にすだく蟲の音も枯れくに、暮れ行く秋の氣色、如何にみそなはせ給ふらん。此程は、砧擣つわざのみいそがれて、御さぶらひをだに怠り侍りしつみ、みゆるし給ひてよ。さて、この國文學、近頃發行のよしにて、只今、書林より持ち來り候まゝ、取敢ず、一部まゐらするになん。なほくれぐれきふしはさりすて給ひ、日頃きはめさせ給ふ道の、御助の端さもなり候はゞ、こよなき幸にこそ。

福原菫子

この女子消息文は、都なる兄のもごより、こは、ちか頃發行なせし新書にて、いさ高評なればさて贈りこせしものなるを、學びの道に分け入り給はんよき栞りの一にもさ思ひ、一卷おくりまゐらするを、御徒然の折にも、御一覽玉はらけ、いさうれしうなん。

かしこ。

伊藤田　富久子

その後は、みけしき伺ひ侍られど、いつもさやけくすぐさせ給ふらむかし。こなたも、ことなう暮し侍れはみ心やすうおぼされてよ。このごろ、世に名の高き。某の社より、何々といふ書すり出ださるるとのことき〻て、わらはは、今日か明日かと日ごとにそれのみまちにまち侍りしが、けふは出來あがりしとのことをき〻及びていそぎ我があたり近き店よりあがなひて、よみけるに、かれて、もろもろの新聞紙などにかきのせありたるごとく、かのみちに心をよせらる〻人々には、よほどのたすけとあひなるよう見うけられけるま〻、いつぞやまかりし折、君の、なににてもあれ家にありて獨學びの心にかなふふみもがなと、おふせられし言のはをちらさでありしを。今日、このふみの我手に入けり。これぞ、君へ上も一念のとゞきしよと、取あへず御目にかけまゐらするになん。かしこ。

日ごと日ごと心にかけしこのふみを
　おくる今日こそうれしかりけり

西川順子

おのづから燈火のしたしまる〻時節とはなり申候。さても、先つ日は、參上いたし、御話のおもしろきま〻に、思はず長坐仕候。その節承り候新小學校令に付ての御意見は、未熟の心にも幾分か會得いたされ、いとく嬉しく存まゐらせ候。殊に、君が御熱心なる國語の事は、大に御同感に存をり候處、昨日書肆に參り候際「言葉の栞」といふ新刊の書を見うけ候ま〻、如何なるものにかと存候に、全く此度改正せられし假名に付きての心得などをものせし書の由に候へば、かねての御話も有之候につき、御參考と相成候か否かは分り申さず候へども、一部さし上候。御閑暇のふし御一讀の榮を賜はらば、こよなう存上候。聞ゆまつり度事は瀬山侍れど、余は、御目にかゝりてと申殘し候。

中村貴和子

晝はあらがねの大地も鎔けんばかりの暑に、身の置きどころもなう、たゞ緑色濃き樹陰、波打ち寄する浦邊などのみ慕はれ、消讃まんことも難さらんことも、意のま〻ならず。漸う日も暮れぬれば、打水蚊遣などして、前栽の柳吹く風を愛で、築山池の上などゆきかふ螢をながめ、晝の苦を取り返へさばやと思ふまに、なしくも更け行く短夜の夏も、いつしか過ぎにけん。一ツ二ツ列も正しう雁が音の、鄙をもすてず、凉しき秋を音信れて、雨風毎に、山は紅の色を染め、野は千種の花を咲き廣げ、夕暮は、松漏る月の影もさやかにいとおかしう、軒端にすだく虫の聲は、琴の音留の聲かともあやまたれ、見るもの聞くものも、皆たへに、殊に燈火挑げて書など讀まんは、こよなうたよりよくなりける。昨日今日。貴孃には恙もなう、學びの道にいそしみ給へ、ましてこの永き夜のすさびには、古の聖の跡をも追はれんこと〻、いとよろこばしきかぎりになん。さて〻此の書は、今世にときめける、それの博士の女子の爲にとて、其が道の數を、誰彼にも悟り易からんやうにかゝれしものにて、その世の好みにかなへること、なかくにたゝへんこともなう、梓にのぼせられしより、いまだ幾程も經ざらんに、あまたゝび梓をかへ、新書のおほき、例のいひはやす、汗牛充棟とやらんもいつわりならん、世の中に、唐人のいひける、洛陽の紙價をも貴からしむると、いふごとくなれば、男といはず、女といはず、一度は見置かれんこそよかめれと、都の知人より、二部おくりこしたれば、貴孃に一部を進めまへらすになん。この頃の、夜永のすさびに、書の林にも蹈み分き入られんたりの、友ともせられなば、うれしきかぎりにこそ。

佐久間　八重子

織なす錦色いと濃く、空ふく風は日に増しそう〳〵しうなりきて、肌うす寒う侍れど、最平らかに渡らせ侍らむといとうれしうなむ。さて、此頃新聞を見侍れば、我が隣なる唐土は、久しう聯合軍とやらと相搆ひて、未だ解けやらず、南亞の空は、去年より戰雲立ち込めて、未だ晴れやらずとや。彼といへ是といへ、實にいと淺ましう、世はいと覺束なきけはひとはなりにき。然れば、今より一しきりは弱肉強食とやら、いと〳〵心もとなき樣の現はれ來むか。よりて吾々女子とて、爭でかはのどかにて止まんやは。いと烏許がましうは侍れど、往昔に我神功皇后陛下の女性の御身もて海を渡らせられ。彼「ジョアンダーク」の義あり勇ある振舞に感じ、又近くは彼の杜國の娘子軍隊の、いと勇ましかりきとの事いと羨ましうなむ。我天術の御軍の務は、今や宇内に其比なう侍れどとて止むべきかは。殊に我邦は四方とも海にし侍れば、之を衛りて尚威を外つ國に張らむには、完きが上にも完からむこそ願はしけれ。若し夫れ一朝事出で來侍らむ節は、女子たりとて、爭でか手を束ねて終はるべきかは。よし息長足の命のごとく、海を渡りてものせずとも、内は男の子に代て業をいそしみて、國の富を謀り老を養ひ幼を教へ、且つ國のはて〳〵を衛り敵をも防ぎて、赳々たる武夫をして内を顧るの患なからしめ、せめては南亞の娘子軍たらむは、妾等婦女今日の覺悟ならむ乎。されば平素女子は、只、姫百合の風をいたみ、露をも厭ふごとくいと温雅なるに努めど、又、内にはいと勇ましき覺悟も亦あらまほしうなむ。妾常々かゝる教育もがなと思ひ侍れりしを、此たひ、國光社より刊り出だされし「女子と軍事教育」てふ一冊には、時節柄とて廣告直ちに皷膜を打ち侍れば、時を移さず取りよせて、燈下に繙きしに、實に文章といへ見識といへ、いと勝れて一讀三歎懦夫をして奮ひたゝしむるてふほとなれば、今戰國女子必讀の一書と思ひ、水魚の間柄もある人見んはと、取敢へず御目にかけ侍るになむ。若し長き夜の御伽草にもなり侍れば、此上なううれしうなんあなかしこ。

宇　高　松　子

吹風もいつしか身にしむ頃と相成候へども、御兩親樣始め、御夏人樣にも、ます〳〵、御氣色美はしう渡らせられ候よし、何よりの御ことに存上候。さても相生の松の、緑の、千代も八千代も諸共に榮ゐさせ給へと、御よごと申上まいらせしは、まだ、昨日の心地いたされ候を、今日しも、御實家の御母樣より承はれば、御許樣には、近頃御ふくよかに入らせられ候よし。いと〳〵よろこばしうなん。就ては、聊か御參考にもならんかと、母樣の心得および先日送りまいらせし家庭の栞の第二編、此度出版に相成候まゝ、不取敢、共に御送り申候に付、御いさまのなり〳〵、御覽可被下候。尚、申すまでも、御坐無く候へども、たゞならぬ御身に候へば、一層御いたはり遊ばし、白かねも黄金にもまさる寶を得させ給ふ樣と、かげながら念しまゐらせ候。かしこ。

由　井　濱　子

近き頃は、新刊の書物もとはに出づるものから、多くは、何公の題字何某の叙文とかに、書の光をさしそへて、さなきものさへ、いと貴く見ゆるこそあやしけれ。此の書籍、けさしも例のふみ屋の贈き行くまゝに、見もてゆくに、さるべきすぢの序辭こそ少なけれ、さすがに斯道の大家とて、著者が多年のけいけんに才學もて、いとさつはらかに、ときあかされつれば、さながら日頃おほひし浮雲のあきらかにはれし心地して、いとゞめづらしとする事も少なからぬを。我のみ獨見もて置かんも、あまりにほいなく思ひ給ふるものから、同しくは、心あひの御許にとて送りまゐらするもあな

がちに、無禮のわざさヽがめたまはで、秋の夜長の友さなし玉へかし。かしこ。

有信やす子

いぶせかりし暑さも、何時しか過ぎ去りて、荻の上風いさ涼しき今日此頃、其許樣には、すこやかにて、日々父母の君にいつきかしづき、學びの道にいそしまれ居らるゝよし、かげながら嬉しくなん。先つ日の玉章によれば、御二方樣は、すぎにし年よりはいやまさりでの御すこやかさにて、笑ひの内に日々辭させ給へりさは、げに、御許の御心つかひのまめなるが故さ、いさせめてうれしうこそ。妾も恙なくて、朝な夕な學びの庭にいそしみ居り侍ればご心安く思し給へ。げに、去年こひしき故里を立出でゝ、草枕旅にし在る我が身、あけくれ胸に懸かるゝは、御身さ手をさりて櫻花めでにし愛宕山の麓、朝夕心に浮び出づるは、共に夕涼みせし金倉河の堤、あはれ、御身さ諸共に花をめづるはまた何時ならむ共に夕涼みするはまた何時ならむさ思ひ出でられては、只西の空を眺めつゝ、そゞろにすぎし日のこひしくてなん。かく思ひ出での增りがちなる昨日今日、せめてもの心やりにさて、先つ日書店にて得たる歌の栞さいふ歌書を御身におくり侍りぬ。御好みのうたぶみにて、こたび某うしの著はされし好き文にしあれば、學びの暇にひもさき給へ。妾の幸ひこよなくなん。時增しに、學びにはよき時さはなり侍れさ、五体ありての物種なれば、御身害はぬ樣心がけて、いそしみはげみ、人にはさらさら後れ給ふな。御年さりたる父母の君には、御心かけていつき奉りてよ。こは、姉のかへす〴〵も願ふ所になん。あなかしこ。

高砂きよ子

ふりみ降らずみ、定めなき秋の御空の物わびしさ、いかゞ渡らせ給ふらん。みけしき窺ひ入れよし候。次に、妾事、いさすこやかに

家のなりはひいそしみ居り候。よそながら御心やすめ給ひてよ。さて、今年の春たらしれの母十かへりの祝ひにさて、廣く諸體の玉詠乞ひ侍りしに、いさうるはしき御詠に預り、こよなきうれしさ、うや〳〵しして拝し納め候。さては、御寄贈の玉詠五百餘首、小き冊て相綴り、こゝに出版出來致し侍れば、學の窓の玉の机の傍に一部呈し參らせ候。いさかも、物うき秋の御心やりにさてなむ。



女鑑歌文月次兼題

十一月五日　歌　奉祝天長節
　　　　　　文　菊をめづる詞
　右十月廿二日〆切

十一月廿日　歌　水上落葉
　　　　　　文　豊年を祝する文（地方なる友に）
　右十一月七日〆切

十二月五日　歌　殘菊
　　　　　　文　歳月不待人と云ふ題をよみて
　右十一月廿二日〆切

十二月廿日　歌　往事如夢
　　　　　　文　家計日誌の末に記す
　右十二月七日〆切

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題
住所
姓名

用紙は半紙半截の事。一題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題
住所
姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なにひとにても、隨意に投稿することを得。

日本に於ける赤十字唯一の機關雜誌

日本赤十字

毎月一回十五日發行●第九拾壹號十月十五日發行●一冊代金八錢●六冊代前金四拾五錢●拾貳冊代前金八拾六錢●全國無遞送料●郵便劵代用一割增●爲換拂渡局は東京新富町郵便受取所

這回の清國事變起るや我赤十字社は乃ち人道の大義に仗り率先して新造患者輸送船**博愛弘濟**の二隻を出し列國環現の裡に立ちて内外病傷者の救護に從事し陸には又**廣島**に**太沽**に**天津**に續々救護員を派遣して**博愛慈善**の**崇高偉大**なる事業を實施し宇内の稱讃と感謝とを享けつゝあり今や北清の野には尚ほ幾千の病傷者あり今後陸續内地に輸送せらるべく赤十字社の事業や是より益々多事ならむとす而して我赤十字社の救護員は如何に熱誠以て事に從ひつゝある乎六十七萬社員の熱心なる同情は如何に彼れ内外傷病者の慘苦を慰めつゝある乎是れ**社員否日本擧國民**の切に知らんと欲する所なるべし此を以て日本に於ける赤十字**唯一の機關雜誌**たる本誌發行所は特に**特派員**を**病院船**に乘組ましめ又**廣島**には別に**特派員**を派し其通信に依つて海陸救護の詳況を報道せんと欲す**赤十字の社員**は勿論苟も**日本の國民**たるもの必ず之を讀むの**義務**あるべし其他本所は外國の赤十字雜誌社と交通を開き又た**英國倫敦**には**特別通信員**を置きて海外赤十字の状況を報ずるの外近頃**歐米巡視**の爲め渡航せられたる某々氏に**各國赤十字事業**の調査を依託したれば其通信は續々本誌に掲載せられ以て幾段の光彩を放たむ**赤十字**の何たるを知らむと欲するものは是非共**本誌**を讀まざるべからず

發行所

東京京橋區築地二丁目二十一番地

日本赤十字發行所

女學校外

女子獨習の好講義錄
第七號
十月廿日發行
定價一冊金十三錢
郵稅一冊金一錢

●本年七月より明年三月迄九ヶ月間每月二回(五日廿日)發行之れを第一期限とす
●十冊前金一圓廿錢郵稅十錢●十八册(第一期全部)前金一圓九十八錢郵稅十八錢

本誌は本會が世の高等女學校不足のため或は家庭事情の爲め高等なる普通學を修め得ざる諸孃諸姉の需めに應じて實際に學びの庭を開きつゝある趣意を押しひろめて遠近不同なく盡す所あらんために發行せらるゝものなり其の載せたるものは即ち本會にて諸講師の親しく講義したるものに係れりされば其の有益にして眞價ある坐ながら正則の高等女學校に在りて學ぶと異ならず志ある諸媛老少既婚未婚にかゝはらず購讀あれ誌上の科目及び講師左に記載す

●修身(婦人の心得)●家事前女子高等師範學校助教諭塚本はま子●禮法、料理、幽香女史●家庭教育、女子高等師範學校教諭藤堂忠次郎●外國語、作文の添削、東京府第一高等女學校教諭小島政吉●算術、東京府第二高等女學校教諭高木みつ子●理科、同上藤堂忠次郎●習字、華族女學校講師小野鵞堂●裁縫、幽香女史●文苑、吉野翠南●雜錄(日常の須要事項を批評的に記載せり)

發行所 東京神田區一ツ橋通町 女子講習會

發賣元 東京京橋區南傳馬町一丁目 吉川半七

社告 女鑑毎月五日、廿日、發行

定價			代金	領收	照會	廣告料	
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二冊(半年分)	通貨又は郵便小爲替、銀行爲替及通運便にて御拂込の事 拂込は、郵便爲替、拂渡局は東京南宮町郵便受取所、受取人は東京南傳馬町一丁目七番地靜思館宛、郵券代用一割増	別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料又は端書封入の事	編輯上に關する件は「東京市京橋區築地二丁目二十一番地國光社編輯部宛」○會計上に關する件は東京京橋區南傳馬町一丁目七番地靜思館宛照會は返信用切手封入若くは往復葉書にあらざれば回答せず◎未納郵稅の來書は一切受取らず	一行(五號活字廿三字詰) 金二拾五錢	料金は前納、位置は申込の順により組み込む
拾錢	五拾五錢	壹圓				半頁(一行三十詰) 金六圓	
送料 全國無遞						一頁(二段六十行) 金拾圓	

明治三十三年十月十九日印刷
明治三十三年十月二十日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衞
印刷人 東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木良雄
發行所 國光社
發賣元 東京京橋區南傳馬町一丁目七番地 靜思館 電話本局一千三百七番

明治三十三年十月廿日發行

女鑑

毎月二回五日廿日發行
第二百五拾號

明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

(東京市京橋區築地二丁目株式會社秀英舍第一工場印刷)